

障害のある人のアート作品市場開拓のためのモデル事業

特定非営利活動法人クリエイティブサポートレッツ

目次

■ 事業の概要

- 1 事業の背景1
- 2 事業の背景2
- 3 目的
- 4 事業内容
- 5 調査方法

■ 調査結果報告

第1章 先進事例施設(神奈川県、奈良県、福岡県、大阪府など)の調査から見る、取り組み内容と課題の整理

I アート作品の市場について

- 1 事例に見る美術市場の状況
 - 1■アトリエインカーブの試み
 - 2■ボーダレスアートミュージアム NOMA の試み
 - 3■エイブルアートムーブメントの試み
 - 4■工房絵の試み
 - 5■美術品としての市場

2 美術品をめぐる市場の課題

- ① 福祉施設の問題点
- ② 評価づくりの意味
- ③ 評価作りへの批判
- ④ 早急に望まれる美術作品の評価の整理
- ⑤ 福祉施設をベースとした美術市場の特徴
- ⑥ メディアへの対応

II 商品としての市場

- 1 事例に見る障害のある人の障害市場の状況
 - 1■工房絵の試み
 - 2■アトリエラボオの試み
 - 3■アトリエインカーブの試み

- 4 ■エイブルアートカンパニーの試み
- 5 ■たんぽぽの家の試み
- 6 ■工房まるの試み
- 7 ■ラバルカの試み

2 商品をめぐる市場の状況と課題

- ① 福祉施設の商品開発の課題
- ② 社会的使命を負う商品
- ③ 商品のイメージと障害のある人のイメージ
- ④ 全国を視野に入れた展開と課題
- ⑤ 地域を重視した市場作り

3 商品市場の可能性の整理

- ① それを制作している人のことを知ることができる商品
- ② 人と人をつなげていく商品
- ③ コンテンツとしての商品

第2章 静岡県におけるアート活動実態調査

I 静岡県浜松市におけるアート活動の実態

- 1 調査からわかるアート活動の実態
- 2 余暇活動としての表現活動
- 3 表現活動が就労として扱われない理由
- 4 働くということ
- 5 親の子どもの将来に対するイメージ
- 6 ますます広がる就労への不安

第3章 障害のある人のアート活動を普及させるための展覧会の実施と地域における市場開拓するためのアート作品制作

●目的と方法

I 展覧会 ローリングコレクション レッツとカイの作品展

■展示のあらまし

【効果】

- ①本格的な作品展の意義
- ②展覧会の構成と目的
- ③障害のある人のイメージの維新

II アート作品の商品化

■事業のあらまし

【効果】

- ①コミュニケーションツールとしての商品

III たけし文化センター

■事業のあらまし

■たけし文化センターのコンセプト

■事業の内容

【効果】

- ①障害のある人の文化芸術活動と地域
- ②地域資源としてのたけし文化センター
- ③市場としてみるたけし文化センターの意義

第4章 提言

I 障害のある人の美術市場開拓への提言

- ①評価図栗の必要性
- ②美術市場を取り巻く環境の整備
- ③国レベルでのサポートの重要性

II 商品市場開拓への提言

- ①福祉施設を主体としたアート商品ビジネスモデルの確立
- ②地域に商展を充てたコミュニティビジネスの開発

III 地域における市場開拓のための提言

- ①コミュニティの中核となる福祉施設
- ②地域資源としての施設
- ③コミュニティの中核を担う障害の人
- ④障害のある人の新しい生き方
- ⑤コミュニティの中核を担うたけし文化センター
- ⑥たけし文化センターの実験事業

■ 資料

I ヒアリング、アンケート

資料1:先進事例ヒアリング議事録

資料2:浜松市内・近郊特別支援学校、発達支援学級アンケート

資料3:市内学校・保護者・施設ヒアリング議事録

II たけし文化センター

①「Rolling Collection Vol.1 レッツとカイの作品展」「サテライト:たけし文化センター」報告書

②新聞記事

■ 事業の概要

1 事業の背景 1

NPO法人クリエイティブサポートレッツは2000年より、障害のある子どもの芸術文化活動のサポートを行ってきました。どんな子どもでも参加できる絵画、造形、音楽の講座や、軽度発達障害の子どもに向けてアートプログラムなど、10前後の講座を常時運営しています。

当法人に通う障害のある子どもたちとは、著作権、肖像権の契約を行い、制作された作品の販売、レンタル、貸し出し等によって派生した収益の一部を本人に還元することも行なっています。これによって、本人や関係者にこうした活動の意義と継続、本人の自立を促す努力を行なっています。

その他に、障害のある子どもたちの理解を進めるための商店街とタイアップしての展覧会の実施、他アーティストやアート関係者とともに行なっている、アートセンター実現に向けてのプロジェクトなど、芸術文化を通して、障害のある人や子どもが様々な人たちと繋がるプロジェクトを展開しています。

2 事業の背景 2

2002年にトヨタエイブルアートフォーラム浜松を開催しました。その後、アウトサイダーアート、ボーダレスアートなど呼称されるような社会的現象も起こり、障害のある人たちのアート(芸術文化)活動が新聞報道に多く掲載され、マスコミでの注目度など、こうした芸術文化活動の広がりを感じることができます。しかし、私たちが活動場所としている、静岡県および浜松市では、歴史ある福祉の中で、こうした障害のある人のアート(芸術文化)活動に的を絞った、NPOあるいは法人の活動は、市民権を得ているとはいええない状況にあります。

全国的なこうしたムーブメントに反して、この地域の障害のある人の芸術文化活動をサポートする体制は、特別支援学校や教育施設でも、美術や音楽教育は彼らの可能性とは裏腹に、相変わらず重要視されず、活動を支える人材も、財源も、設備も整ってはいません。

その背景にあるのは、アート(芸術文化)活動が、「特別な人たちの特別な活動」といった見方が根強くあり、障害のある人や子どもたちの尊厳を守り育てる「人権」としての視点が薄いことと、厳しい障害者の世界の中で、アート(芸術文化)活動は就労形態として考えにくいことに起因しています。

つまり、障害のある人の芸術文化活動の意義は正しく理解されること無く、「食えない」「あまりものの活動」「余暇」といった位置づけが固定されているように思います。

そしてこうした状況がこの地域特有のものではなく、全国の地方都市も同じような状況にあるのではないかと感じています。

もう一つの課題として、障害のある人のアート活動を対価に変えていく試みです。長年、障害のある人のアートを就労形態とした施設の共通の問題は、多くのスター級の作家を輩出し、作品の制作、個展、美術館での発表、商品開発、メディアでの広報などあらゆることにチャレンジしていますが、毎日の活動の中で多くの作品が生まれているにも関わらず、それを対価に換えるための市場がなかなか育ちにくいことです。

その大きな原因は、障害のある人のアート活動が施設を中心に行なわれ、厳しい経営状況ののな

かで、スタッフが、障害のある方々のケアと兼業して、商品化、営業等行なわなければならない、こうしたマネージメントまで行なう余力が、法人施設内に補完されていないことです。

3 目的

本プロジェクトは、この地域に根強くあるこうした無理解を払拭し、障害のある人のアート活動の素晴らしさと意義を当事者と、障害者をサポートする人々、一般市民に広く伝えて、こうした活動が盛んに行うことのできる土壌を掘り起こしていきたいと考えています。

そのために、静岡県の障害のある人のアート(芸術文化)活動の現状を把握し、どのような課題があるのかを検証していきたいと思います。

障害のある人のアート活動を就労形態とする全国的にも先駆的取り組みを行なっている複数の施設の市場開拓への取り組み、施設を取り巻く地域性、社会的状況、地元企業団体等とのネットワーク状況などを、比較、検討することによって、障害のある人のアート活動を就労形態とする施設の課題を整理、検証、提言を行ないたいと思います。

また展覧会、講演会等の実験事業を通して、障害のある人のアート活動の普及と評価作りを行っていききたいと思います。

あわせて、障害のある人の文化芸術活動の市場を開拓するための実験事業を、試験的に行ない、今後の検討も行なっていきたいと思います。

4 事業内容

- ①先進事例施設(神奈川県、奈良県、福岡県、大阪府など)の調査から見る、取り組み内容と課題の整理
- ②静岡県におけるアート活動実態調査
- ③障害のある人のアート活動を普及させるための展覧会、シンポジウムを実施と、地域における市場を開拓するためアート作品レンタル事業
- ④①～④を通した課題の整理と提言

5 調査方法

①先進事例施設(神奈川県、奈良県、福岡県、大阪府など)の調査から見る、取り組み内容と課題の整理

15年間、障害のある人のアートを就労形態としては先駆者である、神奈川県平塚市の社会福祉法人湘南福祉センター工房絵の取り組みを中心に、同じく活動実績の長い、奈良県奈良市の社会福祉法人たんぽぽの家、その他長年活動している施設、新進気鋭の施設等を比較調査する。

特に地域における市場開拓の試み重点的に調査し、その課題を検証する。

調査の特出項目	● 施設内でのアート活動の取り組み状況 ● 施設を取り巻く社会的状況 ● 市場の範囲、性格、特徴 ● 地域との連携状況 ● 福祉事業、それ以外の事業との関係性 ● 運営の課題 ● その他
調査対象	1・工房絵 (社会福祉法人湘南福祉センター)(神奈川県平塚市)関根幹司氏 2・たんぽぽの家 (社会福祉法人、財団法人)(奈良県奈良市)播磨靖夫氏 3・エイブルアートカンパニー 柴崎由美子氏 4・JOY倶楽部 (福祉法人福岡障害者文化事業協会)(福岡県福岡市)原田氏 5・工房まる (NPO法人)(福岡県福岡市)樋口氏 6・アトリエインカーブ (社会福祉法人素王会)(大阪府大阪市)今中博之氏 7・ボードレスアートギャラリーNO-MA (社会福祉法人滋賀県社会福祉事業団)(滋賀県近江八幡市)はたよしこ氏 8・らばるか (社会福祉法人豊生ら・ばるか)夏目浩次氏
調査方法	現地視察調査、ヒアリング、文献調査
調査時期	平成20年11月～3月

②静岡県におけるアート活動実態調査

県内の、特別支援学校関係者、障害児芸術教育関係者などからヒアリングを行い、障害のある子どものアート活動の状況を把握する。卒業後の、アート活動の実態もあわせて調査する。

静岡県によって開催される、静岡県障害者芸術祭に応募する障害のある人を対象に、アンケート、ヒアリングを行ない、県内における障害のある人の芸術文化活動の状況を把握する。

1 アンケートの状況

調査の特出項目	● 障害のある人、子どもたちのアート活動の取り組み状況 ● アート活動の状況(施設、場所、予算、人材、設備など) ● アート活動の課題
調査対象	養護学校関係者、障害児芸術教育関係者、その他
調査方法	現地視察調査、ヒアリング、文献調査
調査時期	平成20年6月～9月

2 ヒアリングの状況(学校関係)

調査の特出項目	● 障害のある人、子どもたちのアート活動の取り組み状況 ●アート活動の状況(施設、場所、予算、人材、設備など)●アート活動の課題
調査対象	浜松特別支援学校 浜松特別支援学校 朝霧分教室 曳馬小学校 発達学級 中ノ町小学校 発達学級 根洗学園
調査方法	現地視察調査、ヒアリング、文献調査
調査時期	平成21年1月～2月

3 ヒアリングの状況(個別編)

調査の特出項目	● 障害のある人、子どもたちのアート活動の取り組み状況 ●アート活動の状況(施設、場所、予算、人材、設備など)●アート活動の課題
調査対象	Aさん 高校3年生 男子母親 Bさん 高校2年生 女子母親 Cさん 中学1年生 男子母親 Dさん 高校2年生 女子母親 Eさん 中学3年生 男子母親 Fさん 高校3年生 女子母親 Gさん 成人女性 母親 Hさん 成人女性 母親
調査方法	現地視察調査、ヒアリング、文献調査
調査時期	平成21年1月～2月

4 ヒアリングの状況(施設編)

調査の特出項目	● 障害のある人、子どもたちのアート活動の取り組み状況 ●アート活動の状況(施設、場所、予算、人材、設備など)●アート活動の課題
調査対象	特定非営利活動法人 トータルケアセンター 社会福法人ひかりの園 協働学舎根洗寮
調査方法	現地視察調査、ヒアリング、文献調査
調査時期	平成21年1月～2月

③障害のある人のアート活動を普及させるための展覧会、シンポジウムの実施と地域における市場開拓するためのアート作品事業

障害のある人の質の高い展覧会、シンポジウムを開催し、特に美術関係者、文化団体関係者、企業関係者に向けてこうした活動の意義をアピールする。同時に、工房絵とクリエイティブサポートレッ

ツが共同で作品レンタルモデル事業企画し、さまざまな産業が集積している都市(浜松市)において、企業等と協働してアート作品を市場化するためのアート作品レンタル事業を実施する。

- ①ローリングコレクション レッツとカイの作品展
- ②アート作品商品化
- ③サテライト:たけし文化センター

④①～③を通した課題の整理と提言

①～③の調査、実権を踏まえて、課題の整理と提言を行う。また、今後この地域における障害のある人の芸術文化活動の振興と、就労形態の可能性を開く施設化、市場の開拓のための実権事業を行うための、提言も行っていく。

■ 調査結果報告

第1章

先進事例施設(神奈川県、奈良県、福岡県、大阪府など)の調査から見る、 取り組み内容と課題の整理

I アート作品の市場について

ヒアリングを通して、アート作品の市場は大きく2つに分けることができる。

1つは、障害のある人の作品を美術品として取り扱う市場である。もう1つは、作品を元に商品化し、それを販売していく市場である。

1 事例にみる美術市場の状況

1 ■アトリエインカーブの試み

アトリエインカーブの2002年からの活動は、まさにこの評価づくりを戦略的に行なったといつて良い。アトリエインカーブの代表である今中氏は、所属している障害のある人の作品のポートフォリオを、日本各地の美術館に送ってみたが、まったく反応がなかった。その後、NYのギャラリーに送ることによって、アウトサイダーアートのパイオニアである、フィリス・カインド女史の目にとまったことからこのように展開が始まったと述べていた。

国外での活動は、2005年から2008年まで、毎年、フィリス・カインド・ギャラリー(NY)、アウトサイダーアートフェアへ出展(NY)している。国内での企画展では、2007年「アウトサイダー・アート LEZDBY アトリエインカーブエキビジョン&トーク・セッション」(主催:アトリエインカーブ、株式会社電通)、2008年「PURORESUMAN」(国立新美術館 SFT ギャラリー)、「現代美術の超新生たち アトリエインカーブ展」(サントリミュージアム天保山)、などを行なっている。

日本には障害のある人の作品を正當に評価する美術館やシステムがない。海外で評価を受けて、それを日本に紹介することによって、正當な評価を受けるといった形式は、日本の美術業界の慣習とも言えるパターンであるが、それを、戦略的に行なっているのがアトリエインカーブだといえる。こうした評価作りを積極的に行うことによって、障害のあるアーティストの評価が高まり、高額で作品が取引されるようになる。そして、アーティストが正當な対価を得ることを可能にした。

寺尾勝広、新木友行は、NYのアートマーケットによる評価によって、1点100万円以上で売買されるようになった。

現在インカーブに在籍するクライアントは25名いるが、そのうちの5名が現代美術として評価されている。そして残りの20名の「美術市場」を模索していくことが今後の課題であるといえる。

2 ■ボーダレスアートミュージアム NOMA の試み

ボーダレスアートとは、障害のある人の表現活動の紹介に留まることなく、一般のアーティストの作品とともに、並列して見せることで、「人の持つ普遍的な表現する力」を示し、「障害者と健常者」「福

社とアート」「アートと地域社会」などの様々なボーダー(境界)を超えて行こうとする取り組みである。ボーダレスアートミュージアムNO-MAは、2004年に、滋賀県社会福祉事業団が、近江八幡重要伝統的建造物保存築の町屋を改修し、ボーダレスアートミュージアムNO-MAを開設した。

2008年にNO-MAでは、障害のある人の作品の収蔵では世界一の規模と研究を行っている、アールブリュット・コレクションと連携して企画された、「アール・ブリュット／交差する魂展」は、北海道、滋賀、東京で開催され、NHK教育テレビの「新日曜美術館」に番組として放映され、その後、ローザンヌで「Japon」特別展を開催している。この展覧会は、ヨーロッパでも高く評価され、会期を延長して開催されている。

日本の作品は、欧米では今とても高い評価を得ている。その中で、約10人の作家の作品がアールブリュット・コレクションに収蔵されることが決まった。

アールブリュット・コレクションに収蔵されたことによって、こうした作品を求めて、世界からギャラリストが買い付けに来ることも予想される。作品の価値に無関心な日本の福祉施設に管理されているこうした作品をどのように守っていくかが、今後の課題であり、NO-MAでもこうした作品のアーカイブ化が始まっている。

3 ■エイブルアートムーブメントの試み

「エイブルアートムーブメント」と可能性の芸術の意味であり、障害のある人の表現活動を中心としながら、人間の可能性を追求していくという意味である。1995年、財団法人たんぼぼの家によって、市民による新しい芸術運動として「エイブルアートムーブメント」を社会に提案した。

1995年ごろ、バブル経済が崩壊し、社会全体の意識や価値観に変化の兆しが見えた時代であった。芸術や文化についても、画壇や美術館などで一定の評価を受けた作品をただ単に受容するだけでなく、一人ひとりが独自の価値観で鑑賞したり、表現の現場に参加したりと、多様性が生まれた時代であった。エイブルアートムーブメントは、「障害者運動」や「障害者福祉」に留まらず、障害のある人とその表現活動を中心にすえながら、すべての人にとっての表現の可能性、社会とアートの関係を追求している。

1995年に「ABLE ART FESTIVAL 95」(大阪)、1996年「エイブルアート 97・東京展—魂の対話」(東京)、1999年「このアートで元気になる エイブル・アート 99」(東京)などの展覧会を行った。1996年から6年間行なわれた「トヨタエイブルアートフォーラム」は全国38都市で行なわれ、企業とNPOと地域が一体となり開催し、それをきっかけに、現在も全国各地で障害のある人たちの表現活動を支えるさまざまな団体が活動している。

社会福祉施設におけるアート活動の意義や技術について考える「福祉におけるアート化セミナー」(2002年～)、障害のある人を含めた舞台芸術の可能性を追求する「エイブルアートオンステージ」(2003年～)など、人、地域、障害者をアートでつなぐ、さまざまな活動が行なわれている。

4 ■工房絵の試み

全国でも、アートを仕事とする施設として先駆的な活動を行なってきたのが工房絵である。

1992年、地元の養護学校の卒業生を中心に10人ほどの障害のある人たちからスタートした。

施設長である関根幹司氏が、「好きなことを仕事にする」ことを掲げた工房絵ではあったが、ボンドを塗り手繰る、1回で絵の具のチューブを出し切る、紙を破り続ける、カーテンであろうが何であろうがはさみで切り刻む……、などの行為が繰り返された。こうした混沌とした状態が1年ほど過ぎたころから、ようやく現在の「毎日絵を描くことが仕事」というスタイルが導き出されたのである。

最初の展覧会をやろうとしたときに、利用者の親から、「これは落書き、あるいはいたずら書きで、絵とは言わない。今までなんとかこの子の障害を隠してきたのに、こんな稚拙なものを世間に出してくれるな」と言われたそうである。障害の人のアートが認められるような環境ではなかった。

1996年の八王子の展覧会の出展を皮切りに作品が買い上げられ、周りの評価が変わり始めた。1998年映画「まひるのほし」への出演(監督:佐藤真)。東京都美術館で行なわれた「エイブルアート 99 このアートで元気になる」(主催:東京都美術館、日本障害者芸術文化協会(現エイブルアートジャパン))への出展など、現在も、年10本から13本の作品展を出展企画している。

2001年には共同で「スーパーピュア 2001」を東京で開催、2003年には世田谷美術館企画展「KALEIDOSCOPE～6人の個性と表現展～」は川村紀子を選出された。この美術展はNHKの「新日曜美術館」にも放映され大きな話題となった。

16年間の活動の中で、多くの障害者アーティストを輩出し、一定の評価も得ている工房絵であるが、海外の市場に打って出ることが難しいと関根氏は語っていた。

それはそうしたネットワークを持っていないこと、資金的、人的な問題からなかなかここに力を入れることができない。工房絵を牽引してきた川村紀子は今は絵を描いていない。自閉症である彼女は、注目されると同時にぱったり絵を描かなくなった。それでも彼女は工房絵に毎日通っている。

5 ■ 美術品としての市場

障がいのある人の創作物を芸術として捉える世界的な動きとして大きなものに、ニューヨークの「アウトサイダーアート・フェア」と、スイス・ローザンヌ市の「アールブリュット・コレクション」がある。

「アウトサイダーアートフェア」は、1993年にスタンフォード・L・スミス・アソシエーツの主催で第1回が開催され、今年17回目を迎えた。40以上のギャラリーが参加し、プレビューを入れ4日間の期間中に8000人の来場者が訪れる。また、その流れを受け2008年には、ウィーンのオーストリア国立図書館にて「ヨーロッパ・アウトサイダー・アートフェア」が初めて開催された。

「アールブリュット・コレクション」は、ブリュノ・ドシャルム(コレクターであり、アール・ブリュット作家のドキュメンタリー映画の監督でもある)と、アール・ブリュットに共感する人々との出会いによって1999年に設立された「非営利財団 abcd(art brut connaissance & diffusion=アール・ブリュット:理解と普及)」が進めている。その活動は、(1)コレクション、(2)ドキュメンタリー映画の制作、(3)多角的な研究に分けられ、それらを通じて「アール・ブリュット」が投げかける様々な問いに光をあてることを試みるものである。19世紀半ばから現在に至る200名あまりの作品、2000点をコレクションとして収蔵している。

このような大規模なコレクションの存在は、収蔵作品に社会的価値を与えることとなり、コレクターの目に留まりやすくなることで、高額な取引が行われる。しかし、一方でバイヤーやディーラーが、作品の価値も定まっていず、対応の整備も行われていない福祉施設などへ出向き、二束三文の値段で

作品を買い付けていくということも起こっている。障がいのある人の生み出す作品に対する福祉従事者の認識を新たにすることは重要な課題といえる。

美術市場は、画商や美術商が作家から買い取り、顧客に販売する1次市場と、オークションなどの顧客と顧客を結びつける2次(再販)市場に分けられる。1次市場に属する業者のほとんどが個人商であり、業界の習慣として、その価格などを公にしない傾向があるため、なかなかその把握はむずかしいが、2次産業の主となるオークションを取り上げて見ると、2008年上半期のオークション売り上げで、10億ユーロ(1300億円)超を記録したのはアメリカと英国、続いて100万ユーロ(13億円)以上10億ユーロ未満が中国、フランス、50万ユーロ(2億6000万円)以上100万ユーロ未満がドイツやイタリアなどヨーロッパ3カ国であったと、2500万件にも及ぶ全世界のオークション価格をデータベースとして持つ、アートプライス・ドット・コムが発表している。

アートフェアや収蔵が進んでいる国を見ていくと、障害のある人の芸術作品のマーケットは、国毎のアートマーケットの大きさに比例しており、そこへ向く人々の興味や視線も同様であるように思われる。近年、相対的に見てアート市場がまだ未発達にある日本では、その市場の確立を目指し、アートフェア東京などに代表されるアートフェアが多数開催されるようになってきた。まだまだ購入客のほとんどが国外の人間であるといった状況はあるが、そういった場に障がいのある人の作品を扱うギャラリーが出展してゆくことでの認知拡大、顧客の獲得、価値付けなどといった効果は期待できる。

2 美術品をめぐる市場の課題

①福祉施設の問題点

●人的な問題

人的な問題とは施設内でこうした事業を行なうスタッフの問題である。福祉施設は、障害のある人たちのケアとサポートがその仕事の本望である。それを行なった上でさらに、作品を管理し、美術館、海外等との折衝、営業、マネージメントを行なわなければいけない。つまり、9時から3時までは障害のある人のお世話をし、それ以降がこうした業務に当たる時間となる。福祉のプロとしての要素に加えて、マネージメント、デザイン等もこなせる、スタッフを要することは容易ではない。また福祉施設の報酬は、社会的にも恵まれているとはいえない。こうした状況の中で、優秀なスタッフを養成していくことは難しい。

それでは、アトリエインカーブがこれを可能にした要因はどこにあるのか。設立当初から、専門性の高いスタッフの養成も同時に行ってきたことにある。また、25名の定員を増やすことなく、スタッフは25名のクオリティを高めることに専念している。

またトップである今中氏が福祉の出身者ではないことも大きな要因だろう。今まで企業で鍛えてきたプレゼンテーション能力と広いネットワークによって、トップクラスの広告代理店、国立美術大学とも連携し、様々な人の手を介して市場作りを進めていくだけの基盤があることはおおきな力となっている。しかし、全国のほとんどの施設は、アトリエインカーブを追従することは難しいと考えられる。マネージメント企画、渉外をこなすスタッフ(複数でもかまわないが)を育成していくとは容易ではない。

●経済的な問題

第2に、事業を行なう資金調達の難しさにある。こうした施設を運営しているのは社会福祉法人は、国が認めた公益法人であり、国の事業を行なう義務がある。指定された事業の他に、こうした事業を行なう資金を捻出することが難しい。その場合、一般の公的な助成(財団、企業、外郭団体等が行なう助成事業)に応募してその資金を得るか、または株式会社と同じく融資を募ることによってその事業費を捻出する方法がある。しかし、一般の公的な資金調達は、全国のさまざまなボランティア団体、NPO 団体が殺到する。どこの助成も非常に競争率が高い。また単年度のところが多いため、継続的に事業を行なうには則していない。一般的な融資(金融機関による)も、先々が見えにくい事業に対して、なかなか融資を受けられない。こうしたことにより、市場開拓のための資金を得ることは非常に難しいのが実情である。

●倫理的な問題

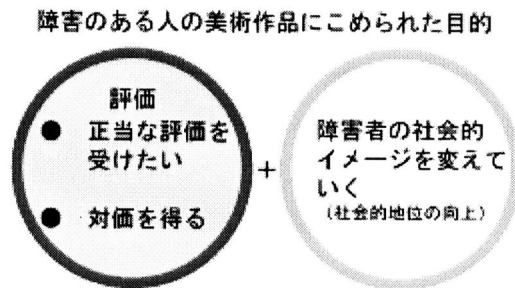
障害のある人の作品の価値づけを行い、美術市場に流通させ、対価を得ていくことはビジネスである。このビジネスとして施設単位でどのように捉えていくのかといった倫理観によってもこうした市場への参入を難しくしている。伝統的な福祉に立脚したこの業界では、ビジネスへのアレルギーがある。絵が売れる人と売れない人、賃金の格差が、同じ施設内で生じることにはさまざまな戸惑いがある。こうしたところをどのように整理していくか、それぞれの施設の倫理観に基づいて考えていかなければいけない。障害のある人の美術品としての市場開拓は、このような倫理観をどのように整理するかもまで踏み込んで考えていかなければならないのである。

②評価づくりの意味

アトリエインカーブの今中氏は、設立の動機となったエピソードの中で、「障害のある人の芸術的な才能を正當に評価され、それに見合う対価を得るべきだ」と語っていた。障害のある人の作品は、長い間、美術教育を受けことができない人の作品として、美術品として扱われることもなく、評価を受けることがなかった。そうした状況を改善し、評価づくりを行なうことによって、それに見合う対価も得ていこうとするのは当然である。

NY のギャラリーへの出展、世界的レベルのアートフェアへの出展、日本の美術館主催の企画展示など、今までの福祉施設の常識では考えられない事業を次々に成功させている。

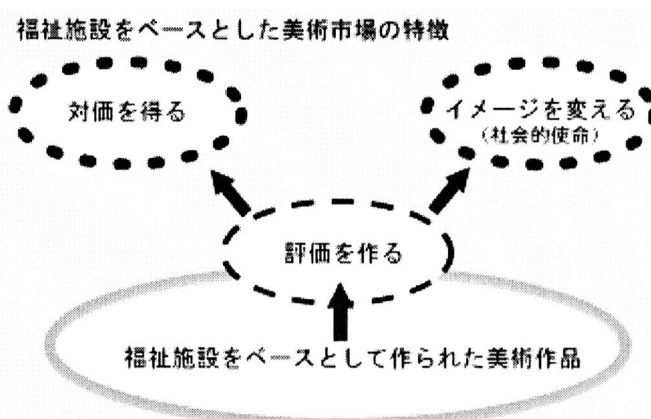
しかし、この場合の「評価」は、「対価を得ていくことだけが目的ではない」と今中氏は語った。それは、今まで、障害のある人の作品の価値をあげていくことによって、それを制作している障害のある人の社すべてを平等にしてしまうことによって、創造性の可能性までそいでしまう」今までの福祉の考え方も一線を引く。障害のある人の作品の評価の意味は、ただ単に売ればよいということではなく、障害者そのものの社会的地位の向上を目的とし、福祉の考え方までも影響を及ぼしている。



③評価づくりへの批判

美術品としての市場を今後日本でも根づかせ、成長させていくためには、評価づくりは欠かせない。しかし、作品の背景である、福祉のさまざまな価値観の中で、この評価づくり大変難しい。1995年に提唱されたエイブルアートムーブメントは、障害者の作品の評価づけに対して、美術界に厳然としてあるヒエラルキーの中に障害のある人の作品が切り込んでいくことは、危険も伴う。障害者が障害者であるがゆえに常に苦しめられていた「評価づけ」「価値づけ」を、自ら容認することにつながり、「これは障害のある人が手に入れようとしている“自由”に反する」とエイブルアートジャパン理事長の播磨氏は語っていた。

それを制作する障害のある人たちの社会的な認知、置かれている立場も含めて、評価自体に異論を唱えている。エイブルアートムーブメントは、障害のある人の作品を通して、社会の問題を解決することに意義があり、そのために障害のある人の作品は、一般の美術の価値観から解放された存在でなくてはならない。それが同時に福祉の社会化につながっていくと訴えている。



④早急に望まれる美術作品の評価の整理

このように障害のある人の作品をめぐるさまざまな考え方があり、それが、「ビジネス」や「対価を得る」ということでは割り切れない課題を抱えながら、自立支援法の施行とともに、より活発化している。ボーダレスアートミュージアム NO-MA のはた氏が指摘するように、日本の障害者アートの市場が外圧によって荒らされる前に、こうした問題を整理し、どのように業界を守り、進めていくかの議論が早急に必要ではないかと指摘する。

障害のある人の芸術作品を評価する市場を、障害者の社会的な地位の向上と、対価を得ていく方法として、どのように作っていくのか。障害者のアートを通して、彼らも包括する社会づくりをどのように進めていくのか。そのために、施設や関係者がどのように連携していけばいいのか。そうしたことを議論する場が今、求められている。

⑤福祉施設をベースとした美術市場の特徴

障害のある人の作品を生産、マネージメントしている母体は、福祉施設であることが多い。福祉施設は法定施設である。その運営は税金で賄われている。障害のある人の生存に関わることを、国の事業として請け負っている。営利を目的とする以前に、障害のある人たちの社会的な地位の向上や、生活の質の向上を第一目的に掲げていくのは当然である。アトリエインカーブ、たんぽぽの家、工房絵の試みも、こうした理念に立脚して、「社会を変えていく」ことを前提に、戦略を持って行なって

いた。障害のある人の美術作品にはこうした社会的使命があるのである。

もう一つの特徴は、市場の狭さである。

日本には障害のある人の美術作品を取引する市場はない。世界的に見ても、アトリエインカーブが作品を出展したNYのアウトサイダーアートフェアや、ボードレスアートミュージアム NO-MA が連携しているアールブリュット・コレクション程度で、その市場は大きいとはいえない。こうしたところに世界から作品が殺到することを考えると、こうした市場に参入できる障害者アーティストは、今後も多くはない。このように、障害のある人の美術品の市場は、障害のある人の作品の評価を高めていくことに大きく貢献するが、対価を得ていく市場としては多くの課題がある。

⑥ マスメディアへの対応

アトリエインカーブのアーティストがニューヨークのギャラリーを皮切りに、さまざまな活動を展開しているが、それをマスコミが大きく取り扱った。美術雑誌や、雑誌等に特集が組まれ、テレビ番組が制作された。同じようにボードレスアートミュージアム NO-MA のアールブリュット展は、NHK の新日曜美術館にも取上げられた。

こうした、「NY のギャラリーで認められた」「海外の美術館に収蔵された」「有名な美術雑誌に取上げられた」「障害者の作品が高額で取引された」等といった情報が、繰り返し報道されることによって、障害のある人でも普通のアーティストと同等に評価を受けていくことが可能なことを多くの人々に伝えるのに大変効果がある。

障害のある人の社会的なイメージを変え、多くのファンを作っていくためにも、マスメディアへの露出は非常に重要だ。しかし、一過性のブームとして扱われてしまうという危険性もある。障害のある人の芸術活動を正しく伝えるマスメディアに対してのマネージメントが早急に必要である。

参考資料

【HP】

戦略経営の視点「期待される美術市場」

アールブリュット

outsider art fair

art price

アトリエインカーブ

ボードレスアートミュージアム NO-MA

エイブルアートジャパン

エイブルアートカンパニー

工房絵

【報告書】

ぬくもりのある日本、みんなが隠れた才能を持っている(平成20年6月障害者アート推進のための懇談会)

障害者の芸術表現による自立とその支援に関する研究(川井田祥子:大阪市立大学大学院)

II 商品としての市場

1 事例にみる障害のある人の商品市場の状況

全国には、さまざまな障害者施設がありそこから多くの商品が生まれている。障害のある人が、絵画や造形を制作し、それを元に商品化が行われている。

1995 年から始まったエイブルアートムーブメントによって、全国の表現活動を就労の形態とする施設が広く紹介され、交流が活発に行なわれた。その後、全国の地域に、アートを仕事とする新しい施設が多く誕生した。施設で生産されているアート作品は、その施設のある地域を中心として、展覧会やイベントで発表され、商品として販売されている。こうした商品がどのように作られ、どのように流通し、展開されているかを、全国的にも際立った活動で知られている、障害者福祉施設(障害のある人が、絵画、造形を就労として行なっている施設を中心として考察する。

奈良県奈良市財団法人たんぼぼの家、福岡県福岡市特定非営利活動工房まる、福岡県福岡市社会福祉法人福岡障害者文化事業 JOY 倶楽部アトリエラボオ、神奈川県平塚市社会福祉法人湘南福祉センター工房絵、大阪府大阪市社会福祉法人素王会アトリエインカーブ、5 施設と、障害のある人の作品を市場化していくことに取り組んでいるエイブルアートカンパニー、愛知県豊橋市：社会福祉法人豊生らばるかが基盤となり、福祉施設の工賃アップを専門とするコンサルティング会社株式会社ライフリベットの試みをヒアリング、調査することによって、商品化市場を考察する。

1 ■工房絵の試み

1992 年に設立した工房絵は、アートを仕事とする先駆的な施設である。

工房絵の商品は、毎日生産されている絵をいかにお金に変えていくかを考えた末に、安価なダンボールの枠にその絵をいれ、ポストカードサイズにして販売したのが、工房絵のグッズから始まった。この「ダンボール」という素材が工房絵の商品のアイデンティティといえる。1993 年ごろから作り始めた 300 円～500 円のポストカードや、ダンボールを主体とした商品は、そのクオリティの高さとユニークさが受けて、代官山のショップ OKURA をはじめとして、ピーク時には 40 店舗との取引があった。

2000 年にはいると、手作りして商品売っていくスタイルから、商品自体の販売から、絵の利用料として収益を得ていく方法を模索し始める。2001 年スターバックスコーヒー 200 号店の記念作家選出、キューピー 3 分クッキングの表紙採用など企業とのコラボレーションも行なった。

2003 年から年アパレルファッション業界の情報ポータルサイトアパレルウェブとライセンス契約を結び、著作権の管理を依頼し、その使用料を得ていくことに着手する。2009 年伊藤忠商事と協働で環境に配慮した新ブランド「KOUBOUKAI」を立ち上げる。

このように工房絵の商品化の変遷、グッズの制作、使用料としての販売、コンテンツづくりと、障害のある人の商品化の可能性を開いてきたといっている。しかし、現在利用者に支払われる給与は、月額 1 万円程度である。「商品売ること市場を開拓することはできたとしても、それを利益につなげていくことは難しい」と関根氏は語った。

2 ■アトリエラボオの試み

福岡市のアトリエラボオで設立から職員として携っている原田氏は、工房絵を見学に来て衝撃を

受けたという。アトリエラボが所属する社会福祉法人福岡障害者文化事業協会は、JOY 倶楽部という、障害のある人のアンサンブル音楽楽団を 1993 年から運営していた。8 人の利用者共に 2002 年にそのビルの3階でアトリエを構えるに至ったのは、工房絵のようにアートを仕事として行うことを始めた。しかし、制作された作品をどのようにビジネスにしていけるか、はっきりとした方策はなかったという。

アトリエラボが誕生して 2 年間、原田氏は、仕事が終わった後に、福岡中のカフェや飲食店を回り、ことあるごとに利用者の絵を見せ、話を聞き、ネットワークを築いていった。そうした中から、店内に展示したり、展覧会をやらせてもらったりといった交流が徐々に生まれていった。それを見た客がアトリエに遊びに来たり、絵の好きな友だちを紹介したり、知り合いの会社を紹介したりと、そこからテレビ局、デザイン事務所、広告代理店等を介して、ミニコミ誌のイラスト提供、企業イベントへの参加、企画会社からのウォールペイントに依頼、テレビ出演など、さまざまな仕事が舞い込んでくるようになった。

今では、月6万円～8万円の給与を出すほどにコンスタントに仕事を行なっている。アトリエラボ、地域、企業が回転することでさまざまな仕事が生まれている。

原田氏は、「仕事は絶対に断らない」をモットーにしてきた。どんなに忙しくても、納期には間に合うように努力する。その上で、こうした人たちの仕事のスピード、特徴をそのつど説明し、次回はそうしたことを考慮してもらうように頼むといったケアも、丁寧に行なってきた。それで、仕事が途切れることはなかった。企業の担当者はむしろ、そうした働き方をする人たちであることを知ること、よりいっそう、彼らの作品を深く理解していった。

原田氏は、仕事を通して、障害のある人たちまた企業との付き合いで福祉施設と最も違うことは、仕事のスピードだという。このスピードについていくことは、障害のある人には難しい。しかしそこも実績を重ねながら丹念にフォローしていけば、企業側の人たちも理解を示し、彼らにあうように考えてくれるという。

3 ■アトリエインカーブの試み

アトリエインカーブの商品開発の戦略は非常にはっきりしている。

商品は開発、デザインは専門性の高い施設職員が行なっている。また、その販路は美術館のミュージアムショップを中心として、その他は流通していない。販路を絞り込むことによって商品自体の価値を上げていこうとする戦略なのである。商品は、作品とは違い、その収益は、作品が収益のすべてを作家に渡しているのに対して、商品は登録者 25 人で分配している。現在、商品による一人当たりの収入は、月 1 万円程度で、これは決して多いとはいえない。しかし、市場をきちんと作りこむことによって、将来、その報酬をアップさせていこうとしている。

ミュージアムショップのみに販売するということは、ひとりのアーティストの商品として、障害のある人の商品というレッテルを張ることなく、1 つのアーティストの商品としてどれだけの売り上げ、反響を作っていけるのかを冷静に判断している。それは同時に、優れた多くの商品の中で、他のアーティストと互角に勝負しようとしている。そうした厳しい状況に身をおくことで、商品化のクオリティを高め、評価を作っていこうとする試みなのである。

4 ■エイブルアートカンパニー試み

エイブルアートカンパニーが誕生した背景には、2006年の「障害者雇用促進法」の改正と「障害者自立支援法」の施行にある。障害のある人たちが社会で働き暮らすための社会的基盤の整備が期待されながらも、職業の選択肢の狭さ、雇用環境の厳しさなどから、まだまだ就労の機会が限定されている。また、障害のある人の作品をデザインの現場で使いたいと思っても、交渉の窓口がなかったり、作家側にも、著作権や契約のことが解らないなどの、相互を結びつける機会がなかった。そうしたなかで、作家や作品の情報を一元化管理し、作品使用の窓口になる事業として、2006年にスタートし、実験事業を重ねている。

作家は全国から公募し、審査を通して、エイブルアートカンパニーに登録される。登録された作家とカンパニーは著作権の契約を結び、主にウェブ上に公開される。企業がその作家の作品を使用した時に使用料として本人に入る仕組みになっている。エイブルアートカンパニーではこうしたことに興味のある企業を探し、仲介する業務もある。

月間40万部の発行のカタログの表紙にエイブルアートカンパニーの作家の作品を表紙に採用したハーバー研究所は、その理由に「作品の持つメッセージ性が企業のブランドイメージにつながる」ことをあげている。エイブルアートカンパニーは、個人や施設単位ではなかなかつながりにくい企業(大企業)とをつなぎそこから、作品を通して、さまざまな仕事の機会を作り出すことを目的とした、社会的企業を目指している。

現在、事務所は東京(エイブルアートジャパン)、奈良(たんぼぼの家)、福岡(工房まる)におかれている。将来は、四国、中国、北陸、東北など、地域ごとの事務所が、その地域の仕事と施設をつなぐ役割を担いながら、おのおのの地域が連携していく形をとっていききたいと担当者は語っていた。設立して2年、大手とのビジネスも進んできている。しかし、現在、専任の担当ではなく、それぞれの地域の施設がそれぞれの業務を分担して行なっている。

5 ■たんぼぼの家の試み

たんぼぼの家は、「エイブルアートムーブメント」を推進し、障害者の表現の見直しを長年おこなってきた。

「まほろば楽市楽座」という奈良の古い町並みをつかった障害のある人のつくったアートグッズの展示販売会を10年続けた。その間にたんぼぼの家は全国の施設や表現活動をしている人たちとのネットワークづくりを進めていった。そうした実績から現在は、ネットワークを活かし「chirori」という全国の障害のある人たちがつくったグッズを集めて売るショップを奈良町で運営している。また障害のある人たちの表現活動の調査も継続的に行っており、様々な施設を若手デザイナーと周り、デザイン性を重視した商品化の企画を行なっている。

たんぼぼの家が最も重視しているのはネットワーク作りと言える。そのネットワーク作りを通して、アートの価値を高め、さらに流通させていこうというのが「エイブルアートカンパニー」であり、このように現在の活動につながっていった。

6 ■工房まるの試み

1997年、1人の障害のある人から始まった工房まるは、現在の登録利用者は24人、1日平均18人程度が利用している。木のマグネットの生産といったクラフトの仕事から始まったが、より楽しい、取り組みやすいことを追求して行く中で、アートへとシフトしていった。

まるの商品は、デザイン的である。カレンダー、Tシャツ、アクセサリ、マグネットなど、オリジナル商品をネットでも販売している。

施設長の樋口氏は、「アートは自己表現をしていくためのきっかけだと感じる。彼らの人とのつながりが狭くなってしまっていることが障害だと感じている。彼らと第三者のつながりがうまれにくい。そこをつなげていくことは実はわれわれの幸せにもつながっている」と語っているように、工房まるは、商品を通して、仕事を通して人とのつながりをたいせつにしている。

2004年福岡芸術振興財団と協働で「エイブルアート 可能性の芸術展」、を開催し、毎年、地域のNPOや福祉施設とともに展覧会を開催している。工房まるは、地域との結びつきを生かして、さまざまな仕事を生んでいる。たとえばDJの好きな利用者のために、ネット上でのラジオ番組を企画し、地域の企業スポンサーを得て実現させている。このように、地域独自のフットワークを生かして、さまざまな仕事を創出している。

2006年からは、たんぼぼの家と協働で、エイブルアートカンパニーを立ち上げ、福岡事務所として活動開始。2007年NPO法人を取得。あわせて、「人と社会」をテーマに、コミュニケーション創造事業を立ち上げた。2009年には、エイブルアートカンパニーにて、TAKEO KIKUCHIとのコラボレーションTシャツを展開するなど、地域を越えた企業とのコラボレーションも始まっている。

7 ■ラバルカの試み

ラバルカは、表現活動を主体とした施設ではない。2003年に障害者3名のベーカリー店オープン。2004年にNPO法人取得し、2006年年10月社会福祉法人取得しているが、今でもNPOは存在する。現在の利用者数は37名、職員数は、20名。仕事の内容と様子はパン製造、下請け、PC業務をおこなっている。

施設長の夏目氏は、都市計画を専門としたサラリーマンだった。ある機会で、「障害の人の給与が1万円」という事実に衝撃を受けた。まじめに毎日働いているのに1万円のはずがないと、調べてみると、それは事実であった。地域の施設を回ってみても、皆「仕方がない」と言う。「仕方がないのではなくやり方が問題がある」という思いから、自ら、福祉施設を立ち上げた。

ラバルカは、大手ベーカリー会社とライセンス契約を結んでいる。おいしい商品を作るためにはプロのノウハウは欠かせないと考えたからだ。この会社がこうしたことに取組んだ前例はない。最初は、断られたが、夏目氏の熱意とプレゼンによって成就した。特にメロンパンは地域でもさまざまなグルメ雑誌に特集されるほどでヒット商品だ。ベーカリーでは、店舗数が市内2店舗、市内1工場(直売あり)、定期外販・宅配事業を行い、ホテル用朝食パンの製造、給食パンの製造、メロンパンの移動販売、ベーカリーカフェの実施、飲食店への卸売、パチンコ店ワゴンサービスを行うと、障害者福祉施設というスタンスではなく、一つの企業として事業を展開している。現在、利用者には7~8万円の給与を支払っている。(現在は5万円程度)

ラバルカは、2008年に、株式会社ライフリベットを設立。福祉的就労業務の給与アップのコンサルタントを専門とする会社を設立した。ソーシャルオフィスといわれる事業を三井グループと共同で起こす予定である。障害のある人の働き方と、企業のニーズとをコーディネートしていく上で、障害のある人の表現活動にはさまざまな可能性がある」と指摘している。

2 商品をめぐる市場の状況と課題

①福祉施設の商品開発の課題

「女子高生にうける商品」「女子高生でも買える値段設定」を基本に、利用者の絵を商品化していた工房絵の手作り商品は、販売力のある有名ショップとの取引をきっかけに、40店舗へ提供していた。しかし、結果的には、こうした取引を中止した。その理由は、施設職員の負担の増大であった。施設は通常9時から15時まで、利用者の就労支援を業務として行なう。その後、商品制作を行っている。40店舗への商品納入にあわせ施設職員は連日遅くまでの残業となった。大量生産も考えたが手作り感が好評の理由であることから、そこからの生産が事実上間に合わなくなった。

ビジネスで考えれば、受注が伸びることは喜ばしいことである。しかし、利用者のケアをおろそかにしてまで、商品制作に従事することはできない。だからといって、人員を増やす決断までには至らなかった。工房絵の商品は手作り感が好評を得ているが、1つあたりのコストは非常に高い。つまり、作れば作るほどコストがかさむ構造になってしまっている。結果的に、売れてもあまり利益は伸びない。いい物を作れば必ず売れる。しかしそれを支える生産能力を向上させるための設備投資に見合うまでの収入が見込めなければ事業化は難しい。商品はそもそも、ある程度大量生産を行わないと収益には結びついてこない。

アトリエインカーブは明確な戦略の元、商品開発を行なっている。まずは商品の価値をあげていくことを目的に、市場を広げることなく、ミュージアムショップに絞り込んでいる。

また、工房まる、たんぽぽの家、アトリエブラボオなどの商品も、ロットを押さえるなど、初期投資をなるべく少なくしている。こうした商品は、対価を得ることを目的には、なかなか展開が難しい。

②社会的使命を負う商品

福祉施設で生産される商品、特にアート作品を元にした商品は、それを制作した作者の感性が色濃く反映されている。工業製品の生産と違って、一つ一つの商品に個性がある。今回ヒアリングした施設はさまざまな個性的な商品を生産しているが、そこには対価を得ていく方法としてだけでなく、さまざまなメッセージがある。

工房絵の関根氏が商品にこめる「“障害のある人の商品だから”ではなく、一般の商品と同等に扱って欲しい」という思いがあった。しかし受け手であるクライアントは、障害のある人の商品を扱うということで、社会的貢献の形をつくり、「自社のブランドイメージの向上」を図りたいと思う。企業の社会的貢献のメリットと、受けて側の施設の社会的なメリットが合致しないこうしたビジネスが成立しない。福祉施設で生産されている商品には、対価を得る方法としての手段だけではない、その商品を生産している障害のある人の見え方を変えたい、社会的に地位を向上させていきたいといった「使命」が込められている。障害のある人の商品には、「お金」だけでは割り切ることのできない、社会的使命が

ある。

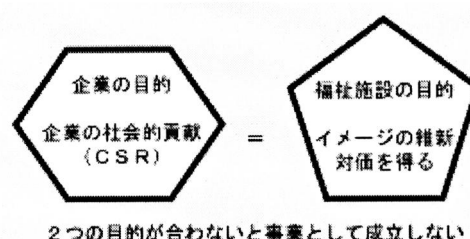
③商品のイメージと障害のある人のイメージ

工房絵では、大手広告代理店からも共同企画や、ブランド化についての問い合わせがある。しかし、プレゼンテーションまでは行なっても、仕事としてなかなか成就しないという。

その最大の理由は、障害者に対するマイナスのイメージは、ブランドを大切にしている企業にとって、信用性を担保できない。

地域の多くの企業には、障害のある人の商品を扱うことに躊躇する場合のほうが圧倒的に多い。

障害のある人の商品を扱うことが「偽善」と捉える企業も少なくない。障害のある人の商品には、普通の商品では考えられないマイナスのイメージを持っている。こうしたことを払拭する意味も商品にはある。



④全国を視野に入れた展開と課題

エイブルアートカンパニーの試みは、主に個人や地域の施設で生まれている作品と企業とをつなげていく事業である。同時に、地域で埋もれてしまっている作品を掘り起こしていく意義もある。

施設単位ではなかなか商品開発を行い、市場を広げていけない状況の中で、そうしたことを総括してマネージメントしていくことを業務としている。そこには厳しい審査があり、それに残った作品のみがウェブ上で公開される。また、ウェブ上に公開されても仕事に結びつくとは限らない。企業に使用される作品は限られている。

今後このシステムが円滑に活用されるためには、ただ公開しているに留まらず、登録作家一人ひとりをプロモーションし、企業に売り込んでいくことも必要であろう。今後ここに登録されている作家にどれだけの仕事が成立するかが、こうしたシステムの今後を課題だといえる。

⑤地域性を重視した市場づくりと評価

アトリエラボオの試みは 地域と企業とアトリエラボオの関係が輪を描くように回っている。ここで大切なのは、「人」が見えたつながりである。

企業は仕事を通してアトリエラボオのメンバーを知り、知ることによってまた仕事生まれている。仕事を通してつながった人々が、この人たちに何ができるか、何が合うか、こんなこともできるのではないか、といったさまざまなアイデアを持ち寄ってくれるのである。こうした循環によって、施設職員ではなかなか思いつかない仕事へと派生している。(地元ローカルテレビへのレギュラー出演、人を介しての他地域(北海道)の企業とのコラボレーションなど)

障害のある人は、いい意味でも、悪い意味でも、個性的である。アトリエラボオの利用者の個性が表れた作品は、地域にある企業に注目されて、その人たちを引き寄せる。そしてそこから、クライアントと作家といったことを飛び越えて人と人との関係が始まっていく。そうした「普通の関係」を構築していくきっかけを作品が作り出している。そして、一人の作家として、尊敬と敬愛のある人間関係を構築し

ている。

また、地域でも、ラバルカが設立した株式会社ライフリベットのよう、障害を取り巻く新しい社会的企業が誕生している。障害のある人の表現活動を主体とした仕事づくりを行うことは、地域に生きる障害のある人の環境を変え、地域の活性化にもつながる。十分、地域にも可能性はあるのである。

3 商品市場の可能性の整理

①それを制作している人たちのことを知ることができる商品

ヒアリングの中で、障害のある人をサポートしている人たちは、彼らの作品をどのように世に出していくかにさまざまな試行錯誤を繰り返している。障害のある人の作品の市場づくりには、対価を得るだけでなく、社会的にも障害の人たちの見え方を変えていきたいといった思いが強くこめられている。高度経済成長が完全に終わり、物が売れない世の中で、障害のある人の商品をただ単に売ろうとしても難しいことがよくわかる。

そうした時に、常にビジネスとしては弊害になっていた、それを作っている障害のある人の営みも同時に伝えていこうとする商品は、他の商品にはない付加価値として捉えることはできる。

②人と人をつなげていく商品

ヒアリングを行なった多くの施設では、クオリティの高い作品を作り、その施設や利用者が住む地域よりも一回り大きな市場へと打って出ようと試みているところが多かった。

それは地域の中では、「障害者」のイメージは固定化し、福祉的なバザーに作品を出品するといったことでしか市場を捉えられない価値観の中ではなかなか達成できない。もっと大規模な市場に向けてマネージメントを行なうほうが、より利益が大きいと考えるのは同然である。

しかし、アトリエラボオの試みのように、地域の企業、担当者、お客さんといった地域に住んでいる人たちから、商品を通して結ばれた人と人との関係の中から、新しいビジネスを生んでいく方法がある。

③コンテンツとしての商品

ポストカードやストラップなどの「モノ」ではなく、作品をコンテンツとして捉え、そこから派生するさまざまな可能性をビジネス化していく考え方が広まってきている。

障害のある人の作品は、コンテンツと捉えると非常に可能性がある。作品にさまざまなメッセージ性があるということは、それだけデザインやプロデュースの幅があるということでもある。

今までは、企業にとって、障害のある人の商品は、その制作履歴からも売りにくいものであった。今時代の流れとしては、その多義にわたるメッセージ性は、その商品の力になる。そのメッセージ性がさまざまな人をつなげ、新しいビジネスチャンスにも派生していくのではないかと。

参考資料

【HP】

工房絵(社会福祉法人湘南福祉センター工房絵)

アトリエラボー(社会福祉法人福岡文化事業協会 JOY 倶楽部)

アトリエインカーブ社会福祉法人素王会)

エイブルアートカンパニー

たんぽぽの家(財団法人たんぽぽの家)

工房まる(NPO 法人工房まる】

らばるか(社会福祉法人豊生)

【報告書】

ぬくもりのある日本、みんなが隠れた才能を持っている(平成20年6月障害者アート推進のための懇談会)

障害者の芸術表現による自立とその支援に関する研究(川井田祥子:大阪市立大学大学院)

第2章 静岡県浜松市におけるアート活動の実態

I・静岡県浜松市におけるアート活動の実態

1. 調査からわかるアート活動の実態

－アンケートとヒアリングからみる教育現場でアート活動の実態－

浜松市内の発達支援学級 72 校、浜松市内及び近郊の特別支援学校 6 校、計 78 校の学校にアンケートを配布、11 校より返答があった。またヒアリングその内に 4 校が協力していただきおこなった。アンケート・ヒアリング内容は学校の授業で行っている表現活動と授業外でおこなわれている表現活動またその必要性、今後の展望について質問をした。それぞれの学校で工夫され、独自で行っている活動はあるものの、そこに投じる予算はほとんどなく、外部からの持ち出しもしくはボランティアによって行われている現状がある。プロが入ってというケースがごくまれであった。またプロが入る場合もそのほとんどがボランティアとしてのかかわりとなっていた。

特別支援学級においては美術・音楽の時間は普通学級の児童との関わり場として捉えられるケースが多く、その中で授業のため、発達支援学級の児童の特性に合わせた内容とはなっていないという返答があった。また特別支援学校では、外部講師を招いた授業も多く取り入れられている。十分な活動が行われているかという問いに対してはほぼ半分はわかれ、不十分な理由として予算・場所(空間)・時間・人員の問題と答える学校が多かった。大局的にみて、発達支援学級と特別支援学校では、表現活動に対する位置づけが違った。普通学級を意識した指導がされている発達支援学級ではどうしても国語・算数といった教科に対する意識の比重が教員・保護者に高く、表現活動は余暇の時間であり、交流の時間とした捉え方であった。一方比較的に障害が重い児童の多い特別支援学校では、表現活動は将来に対する余暇という意識はありつつも表現活動に対する意識は時間的・内容的にみても高いのではないかと考えられる。

2. 余暇活動としての表現活動

やはり楽しみとしての要素が高い表現活動は余暇活動として意識されることが多く、アンケートやヒアリングを行う中でも多くの教員・保護者が将来、表現活動が児童の生活を潤わすひとつの要素になってくれるのではないという思いが強い。特別支援学校の教員は特にその意識が高かったように感じた。余暇活動の充実が、気持ちの安定や就労への意欲を高め、全体的にバランスのとれた生活へ繋がっていくと考えている。「就労＝大変なもの、ストレスを伴うもの」という感覚があり、大変な就労を継続していくためには充実した余暇が必要といった意識がある。そういった中では、子ども達のがのびのびと楽しそうに表現活動はどうしても余暇としての位置づけが強くなってしまいう傾向にある。

3. 表現活動が就労として扱われない理由

まず浜松市内においては表現活動を主体とした施設がないということが大きな理由のひとつにある。

既存の大型施設が多い市内において、障害者の就労像は固定的なものであり、その就労形態の種類はとても少ない。2でもあげたように「表現活動＝余暇活動」の意識が強い中で、保護者や教員の中には、障害のある人が表現活動を主体とした仕事をするとは彼らが働いているという意識を持つことが難しいのではないかとの意見が多くあった。障害のある人、ない人に関わらず「働き方・就労」のイメージが限られている現状がある中で自由でのびのびした印象が強い表現活動は就労として意識されにくい。しかし、その一方で、具体的なイメージがないものの、もしそういった施設がこの近くがあれば、障害のある人たちが楽しく仕事ができる場になるのではないかと答えた保護者・教員もいた。

4. 働くということ

「働くこと」に対する意識調査も同時に行った。施設職員の方の障害のある人の就労のあり方は、労働で達成感や自尊心を得ることが大切であるという意見があった。一般就労＝就労ではなく、個性・特性を理解した中で、対価を払うシステムが大切であり、彼ら自身を評価していく必要がある。その人がその人らしく輝いている事が何より大切。また就労により得た収入で安定した生活を送れることも大切だと仰っていた。ある施設の職員さんからは施設の中には「利用者に働かせてやっている」という考えがあり、この考えも問題であると同った。施設で働いて交通費・食事代を働いてマイナスになっているということが多くあるが、彼らは福祉就労とは就労している事実には代わりはない。マイナスになることなく、収入を得る仕組みを施設のスタッフが整えることが大切である。また他の施設の職員の方は障害のある人も社会の一員として、手を動かし、働くことで人の役に立ち、その中で認められ、尊厳や権利を手にするべき存在であると仰った。

働く意味を考えた時、障害のある人たちの場合、障害のない人の場合のそれとは異なることが多い。障害のある人たちにとって就労とは収入を得る手段でもあるが、それ以上に彼らの存在意義を認める場であり、尊厳、権利といったすべての人が持つべきものを彼らも持っていることを再確認する場であるとも考えられる。

そんな中、保護者からの意見として、福祉就労と一般就労というたった2つの選択肢しかない現状には問題があるといったものがあった。福祉施設は本人の能力比べるとその作業内容はあまり簡単なものが多すぎる。一方、一般就労となるとハードルが高い。その中間的な支援をしてくれる場が必要。頑張っ、一般就労に挑戦したものの、心身共に傷つき、就労を断念したケースの方も多。環境整備と配慮があれば、多くの人が生きて活躍できる場が増える。障がいのある人が様々な特性をもっているのではあれば、就労の形態も様々である必要がある。

5. 親の子どもの将来に対するイメージ

今回のヒアリングでは、学校・施設に合わせて、障害のある子どもを持つ保護者にもヒアリングをおこなった。7名も保護者にお話を伺った。当法人との関わりを長くもって下さっている方から、表現活動に対する関心が薄い方もいたが、多くの保護者に言えることは、就労をふくめた生活全般の子どもの将来像はとても固定的なものが多く、安定志向の方が強かった。大型施設が多くあるこの地域では「障害者像」がしっかりと出来上がっている。障害のある方の働く姿の多様性のなさ、限られた生活範

困を感じた。その中で子育てをされてきた保護者の方にはどうしてもそのイメージを払拭することが出来ないことは当然で、既存の福祉施設や既存の社会に当てはめて考える方が多くいた。それは、保護者の方の問題ではなく、大型施設の問題でもないと感じる。この風土の中で作り上げられたものだと言える。

6. ますます広がる就労への不安

障害のない人でも就労が難しい時代に入り、障害のある人の就労の場、特に一般就労の場がどんどん減っている。製造業が盛んなこの地域では施設の仕事のひとつとして下請けの仕事を障害のある人の作業内容のひとつとしている施設も多くある。その下請けの仕事もだいぶ減ってしまっているという話を伺った。一般就労に挑戦したいと考えていた保護者の方の中にも、社会情勢に左右されやすい一般就労の厳しさと難しさを実感し、他の道への選択を考える方がいた。就労に不安を感じているのは、収入だけの問題ではないように感じる。働くことで社会に参画し、人と人の関わりの中で生きていくという大きな意義があるからだと思う。就労の場を失えば、収入という生活基盤と社会参画の場を一度に失うことになり、その傷は大きい。それは障害のある人にもない人も同様にいえることだと感じた。

第3章

障害のある人のアート活動を普及させるための展覧会の実施と地域における市場開拓のためのアート作品制作

●目的と方法

今回の調査でも解るように、全国には障害のある人のアート活動を主体とした福祉施設があり、多くの、ユニークな作品や商品が作られている。そしてそのレベルは、美術の業界の変え、多くのインパクトを社会に与えていると言ってよい。しかし、静岡県浜松地域においてそうした活動は活発であるとはいえない。そして、障害のある人のアート活動は、障害者の余暇として捕らえられ、その作品展も、福祉的な扱いが多く、「アート」として捉えていく土壌が育っていない。

こうした状況を払拭していくためにも、今回、障害のある人の本格的な作品展を開催することとする。

また同時に、商品開発を地元企業と行い、作品展の中で展示を行う。

さらに、展覧会場とは別に、こうした事業の周知と拡大を図るためのサテライトを設ける。同時にアンケートを行い、こうした事業の成果を検証する

I 展覧会：ローリングコレクションレッツとカイの作品展

■展示のあらまし

今回調査も行なった、神奈川県平塚市にある湘南福祉センター工房絵の9名の作家の作品35点と、静岡県浜松市のNPO法人クリエイティブサポートレッツでアート活動を行なっている12名(いずれも小学生～高校生)の作品40点を展示する。

【効果】

①本格的な作品展の意義

今回は、日本の障害のある人の展覧会を数多く手がけてきたキュレーターであり、アートディレクターでもある、ホシノマサハル氏にディレクションを依頼し、展覧会を開催した。

会場は、静岡文化芸術大学の西ギャラリーで行なった。この会場は一般貸与はしておらず、大学の研究機関として、企画展、学術的な発表、学生の実験事業といった、市民ギャラリーとは違う、専門性の高いギャラリーとして知名度がある。今回の企画は、静岡文化芸術大学の文化政策学部芸術文化学部長鈴木滉二郎教授と、谷川眞美准教授の協力の元、実現することができた。静岡文化芸術大学としても、障害者の作品展は初めての試みであった。開催期間中、特に、多くの大学関係者、学生が来場し、効果があった。

②展覧会の構成と目的

今回、ディレクターの意向によって、工房絵とNPO法人クリエイティブサポートレッツとのコラボレーション展として開催した。NPO法人クリエイティブサポートレッツは、知的障害や、発達障害の子どもたちの表現活動をサポートするプログラムを2000年から継続して行っている。レッツは法定施設ではなく、任意でこうした事業を行っている。したがって、行政的な支援もない。今回ここに通っている12名の子どもたち(小学校3年生から高校3年生の知的障害、発達障害児)の作品が、工房絵のアーテ

リストと同時に展示することとなった。

工房絵の作品は、全国的にも注目されている作家の作品を中心である。様々なメディアで紹介され、美術館にも出品している作家たちの作品は、クオリティが高く、ユニークである。

同列に、レッツの子どもたちの作品を本格的に展示することによって、年齢、性別、障害の有無などに関係がない自由な表現の世界がアートであるといったメッセージを伝えることであった。「子どもの作品だから」「障害者の作品だから」といった視点を払拭する展覧会として、非常に意義のある展覧会となった。

③障害のある人のイメージの維新

アンケートを見てみると、障害のある人の作品を始めて目にする人が多かった。場所から、大学生が多かったが、文化や芸術を専門とする学生でさえも、障害のある人のアート活動を知らない、見たことが無い学生も多かった。イベントで行なわれている作品展と違った、本格的な作品展を目指したことで、障害のある人の作品のイメージの維新を図ることが出来たことはたいへん意義があった。

II アート作品商品化

■事業のあらまし

今回展覧会にあわせて、工房絵とレッツの作品の商品化も同時に行なった。これは、作品だけではなく、商品を通して、障害のある人の文化芸術活動を普及させることと、商品化し、販売することで、その市場の可能性を調査する意味があった。

制作した作品は、版画 2 点(川村紀子、生熊涼太)、T シャツ 8 種類、トレーナ 1 種類、作品展の作品を元に制作した絵本 2 種類(工房絵とレッツ)、カレンダー 1 種類である。

版画は、横 350mm、縦 630mm の原画を 560mm×740mm の額に額装したものである。定価は3万円である。(額を入れて5万円)

版画は美術作品にいちばん近い商品である。作家の個性を十二分に発揮し、商品というよりのアート作品として購入される場合が多い。今回の展示は好評であったがその値段設定から購入には結びつかなかった。T シャツの価格は、3000 円～4000 円。T シャツの価格としては高価である。工場発注ではなく、地元のシルクスクリーン工房と提携し、受注販売とした。

絵本は、今回の展覧会のカタログもかねて、言葉と絵を重視して制作した。こうした商品を展覧会会場とサテライト会場に展示、販売した。特に版画は、商品を紹介するチラシも制作した。

今回、展覧会にあわせての制作であったので、こうした商品の意識を来場者にヒアリングすることが出来た。展覧会を通して、こうした作品を制作している障害のある人を知り、商品を通して親近感を抱き、工房絵やレッツにさらに興味を持つといった来場者も多かった。

【効果】

① コミュニケーションツールとしての商品

障害のある人の施設等につくられるこうしたアート商品は、収入を上げていくための手法よりも、その商品をつくっている障害のある人、施設などの存在を、商品を通して、購入した人々に伝えている。また、それを手にした人が、商品を介在して、障害のある人やこうした人たちを支える社会(施設、場、など)に興味を抱ききっかけとなっている。その商品が、ユニークで、オリジナリティに溢れ、クオリティ

の高いものであれば、障害のある人の「見え方」を変えていく、ツールともなる。

商品は、有効なコミュニケーションツールであるといえる。障害のある人の商品には、こうした強いメッセージ性を、発信できるものであることが、商品化の実験を通して解かった。

III サテライト：たけし文化センター

■事業のあらまし

展覧会にあわせて、展示会場から徒歩 20 分、浜松駅から徒歩 10 分の、空き店舗、旧文泉堂書店(昭和 39 年築)に、サテライト「たけし文化センター」を設けた。

ここは、展覧会会場とは違った作品の見せ方とともに、作品、商品の販売、カフェの運営を作品展開催中(2008 年 11 月 22 日～12 月 7 日まで)行なった。

期間中に、ここを会場として、トーキングラウンジ(座談会)(4 回)、ワークショップ(2 回)、コンサート(1 回)、ポエトリーリーディング(1 回)、サークル活動(1 回)を動じに行なった。

■たけし文化センターのコンセプト

NPO 法人クリエイティブサポートレッツ(以下レッツ)は、障害のある人の表現活動の支援と、その活動を通じた社会との接点の形成方法を模索し続けてきた。その中で、いわゆる障害のある人の制作物への理解は少しずつではあるが深まってきていることは感じられる。

しかし、その一方で完成品では見えてこないプロセスの部分や、日常の中での人とのやりとりのおもしろさといった点への理解は、普段彼らに接する機会の多い施設職員、関係者の中ですらもまちまちであることがある。強引な要求・欲求の伝達、盲目的な好きなことに対する衝動、奇声、毎日、繰り返す、繰り返される遊び、奇異な言葉選びが際立ってしまう会話。しかし、そのどこを見ても大真面目で真摯な態度が浮き上がってくる。多くの場合日常生活に支障をきたす問題行動と捉えられがちであるが、自分の想いに忠実なその姿は、作品を作り出す時のアーティストの姿としばしば重なる。

鑑賞者への潤滑な伝達のためにメディアを選んだり、コンセプトを伝える意図的な仕掛けはあまり見られないが、感覚をまっすぐに押し出すという点は、アートの範疇であると考えられる。そして、その視点の導入として障害者とアーティストが共に過ごす時間、場の存在を大事にしている。

2000 年から活動してきたが、レッツのそういったアートを通してながらも成果主義に偏らない現場視点からの理解は、社会にも、福祉の中にも、あまり広まってきていない。

障害への理解不足から、社会の中では煙たがられることがしばしば起こる。その要因には、彼らと出会う機会のなさが第一に挙げられる。そういった場合は、十分に理解へのきっかけの役目を果たすと考えられるが、人のそのままを認めるという行為は、健常者同士の間でも難しく、そこに端を発する事件はあとを絶たない。

そんな想いから、私達はアートの持つ「人をつなぐ力」に期待し、人と人が様々な違いを認め合い、つながるきっかけを作り出せる場としてのアートセンターの設立を目指している。そして、障害者達の真摯な姿を、日常生活レベルで目にし、関わることは、時には人間形成に役立ち、時にはなごみの対象ともなりえ、共に楽しみ、学びあえ、豊かな関係社会を築けるとの考えから、私達はその中に障害

者施設を、その核として組み込みたいと考えている。

今回の展示のメイン会場(静岡文化芸術大学・西ギャラリー)では、完成度の高さをひとつの基準とした作品展示が行われる運びとなっている。それを踏まえ、サテライト会場では、作品からは必ずしも伝わりきらない過程の部分、日常の中での出会い、そこでの関係性、障害のある人のありのままの姿といった点へ焦点をあてたいと考えた。

そして、普段の私達の活動の意図するところ、目標とするところ、また私達の目指すアートセンターの考えを、空間デザインによって表し、伝えることに重点を置くこととした。多少突飛な空間の中で来場者が違和感を持つことが、障害者といかに向き合うかというテーマへと繋がるような仕組みとして、ひとりの障害のある人に合わせた空間を作ることを考えた。

久保田壮(たけし)は、現在 12歳で、レッツの代表である久保田翠の長男であり、重度の知的障害を持ち、久保田がレッツを興すきっかけとなり、原動力となってきた。

ここで大事なことは、久保田はレッツの代表であり、たけしの母親であり、たけしは特別支援学校でその障害の重さから問題児扱いされているということである。

レッツは特定個人のための活動ではない。しかし久保田の障害のある子供の母親としての個人的な経験はレッツの活動を支える大きな力となっている。そして、久保田は、たけしを受け入れることが可能な場であれば、どんな知的障害者をも受け入れることが出来得るとの見解を持っている。レッツに深く関わっているアーティスト、臨床心理士、スタッフ、レッツ利用者の父兄などと話し合いを重ねた結果、表面上では個人的な活動と誤解を受ける可能性はあるが、ひとりの利用者としてたけしを徹底的に受け入れていくことが、レッツがこれから今まで以上に「他者を認めあう」という理念を実現させていく上で大変重要であるとの答えを得た。また「誰でも」のそのままを認めていくために、個人的な関わりという入口は必要不可欠であり、それは久保田がたけしに対する母親としての関わりを突き詰めていくことが、レッツにとって避けて通れないということを表している。

その姿勢はレッツがアートセンターという公共施設の形を考えていく際、その許容範囲を拡げ、障害だけにとどまらず、年齢、性別、国籍、性格、嗜好、外見、どのような違いも認めていくという基本的な指針を示すことにつながっている。言葉を変えれば、本当の意味での「公共」を実現したいとの願いがあり、このサテライト会場を「たけし文化センター」と公共施設らしい名前と呼ぶことにした。そして、たけしが自由にいられる空間を、コンセプトに特化して形作ることにした。

この場合の「たけし」とは、たけし個人であり、障害者であり、差別を受けやすい立場にある人間であり、個性のある人であり、日本人である12歳の男である。

一見たけしを甘やかしているかのようにも見える、たけしが自由にしている空間をつくるという事は、「人を受け入れる」ことのわかりやすい表明であり、具現化でもある。そこでは、全ての設計が「たけし」を軸に考えられていて、商品や、来場者の使用するカップや、展示物などの所有権が別の人にあるものは、たけしが手を触れられないように仕組まれている。その反面、たけしの触れられるものは、全てたけしが自由にできるようになっている。裏返すと、一般の来場者にとっては不便な箇所も多々あるであろうし、来場者は度外視されているような感覚を受けるかもしれない。しかし、そこに「たけし」という明確な説明があることで、来場者は「たけし」を意識することができる。

たけしは会期中、母親と会場に可能な範囲内で常時滞在する予定になっているが、もちろん不在の時間もある。そんな時でも来場者は、その特異な空間により「たけし」を経験することができるのである。そして、その場は多くの「たけし」や来場者を受け入れ、人と同じく常に変化していくものとなる。

■パンフレットより抜粋

たけし文化センター(たけぶん)は、重度の知的障害のある「久保田壮(たけし)」という個人を全面的に肯定することを出発点に、コンセプトを作り上げた公共文化施設です。カフェがあり、創作スタジオがあり、ワークショップの場があり、コンサート会場があり、基本的な機能は他の文化センターと同じです。公共に開かれた施設という所でも、他の施設と比べて何ら変わりはありませんが、さまざまな人たちを受け入れるという点は、常時最優先事項としています。しかし、すべての機能が「たけし」基準で設置してありますので、土台のところで「普通の公共施設」のルールとはすべて異なります。そのルールの多くは明言化することはできません。なぜならば、そうしたルールは個人個人それぞれの関係や、願い、利用方法によるところが大きいからです。

たけし文化センターは利用する皆さん方すべてのための施設です。まったりくつろぐのもよいですし、ここでなにか始めてみたい、発表したいという希望に応えることもできます。たけし文化センターでは、是非、あなた自身にそれがそのままであることを納得していただきたいのです。

■事業の内容

たけし文化センター内に、カフェ、ショップ、ギャラリー、スタジオ(アトリエ)を設けた。(90坪)

●カフェ

軽食も用意したカフェを設ける。その理由は、たけしが自由に空間を走り回ったり、遊びまわったりしても、お客は好きなのところに移動して御茶を飲むことができるように、テーブル等をセットせず、すべてお客さんが移動、可動できるスタイルを作った。

●ショップ

工房絵とレッツのオリジナル商品を展示販売。今回制作した商品も展示、販売した。普通のショップにたけしは行くことができない。それはあたりかまわず、商品をつかんだり、口に入れたりしてしまうからである。しかしたけし文化センターでは、彼は商品を気にすることなく、お客さんだけが商品を見ることができるのである。

ショップもカフェと同様に、すべて可動式のケースに商品が収まっている。これは普通の商品の陳列よりも客にとっては不自由である。しかし、客は、自分の好きなのところで、商品を手に取り、この不自由さを楽しんでいた。

●ギャラリー

レッツと工房絵の作品展示。たけし文化センターで来場者が作ったものを展示した。(作品点数20点)

●スタジオ(アトリエ)

来場者が自由にもものを作ったり、楽器を演奏したり、のんびりしたり、交流するスペース。スタッフは来場者と積極的に交流した。

●イベント

《トーキングラウンジ》

①「Talking Lounge ローリングコレクション 5年構想」

(関根幹司(工房絵施設長)ホシノマサハル(アートディレクター)西村隆彦(デザイナー)久保田翠(NPO 法人クリエイティブサポートレッツ代表)

②「文化政策と CCD セミナー・アフタートーク」

加藤種男(アサヒビール芸術文化財団事務局長)立木祥一郎(NPO 法人 harappa 理事)播磨靖夫(財団法人たんぽぽの家理事長)

③「はこの話～浜松の・みんなの・アートセンター考」

(鈴木洸二郎研究室)

④「即興からめーる団さん、お話ししようよ。～うたのすむ家と、みんなアートプロジェクト～」

赤羽美希(音楽家)正木恵子(打楽器奏者)鈴木一郎太(アーティスト)深澤孝史(アーティスト)谷川眞美(静岡文化芸術大学准教授)

《ワークショップ》

①ワークショップ「できるかな？」高杉悦生(アーティスト)

②ワークショップ「怒られることやって、作品にする」深澤孝史(アーティスト)

③「うたの住む家 IN たけぶん」(アーティストインレジデンス)

赤堀美希(音楽家)、正木恵子(音楽家)

《サークル》

①第1回「仮称たけぶんサークル」(中学生から大学生までの文化サークル)

②第2回「仮称たけぶんサークル」

《その他》

①ポエトリー・リーディング「グロッタリーピリン系」前原本光、マサ・ホシノ・ハル

②コンサート「うたのすむ家 in たけぶん」赤羽美希、正木恵子

【効果】

①障害のある人の文化芸術活動と地域

今回のたけし文化センターは、障害のある人の見え方をアートによって変える場となった。それはたけしという子どもと、それを取り巻くスタッフ、来場者との関係が、顔見知りでないにも関わらず非常に近い印象を与えた。障害の子どもがそこにいることによって醸し出される空気感、場の雰囲気、さまざまな展示、来場者も含めてそこにいる人たちが、何かしなければいけないという目的をあまり抱かないで、お茶を飲んだり、絵を描いたり、楽器をさわったりしながら、それでいて「孤立しない」(誰かが自然に関わってくる)場が、あったからだろう。

障害のある人が作り出す時間軸と空気は、予想以上に、多くの、一般客を魅了し、こうした場を欲している人が実は多くいるのではないかと予感させた。そして同時に、地域のコミュニティの中核になることも可能であることを示唆した。

②地域資源としてのたけし文化センター

障害のある人たちの作品や商品の市場は、そこには対価を得るだけではない、障害のある人の存在を認知してもらうことや障害のある人の見え方を変えていくツールとしての役割も大きい。

商品を通して、多くの人たちの障害のある人の存在を伝え、理解を深めることにも大いに役に立っている。しかし、反面、これは商品自体に独創性やクオリティが高くしないと、逆の効果にもなってしまう。(障害者はこんなものしか作れない、かわいそう)

アート系の施設には、さまざまな設備(陶芸、織り、クラフト)や、食堂、講堂、などが付帯しているところも多い。しかし、その存在は、近隣の人たちに広く知られているわけではないし、地域の人たちが、こうしたところを利用できるようにはなっていない。

今回の「たけし文化センター」の試みは、障害のある子どもを象徴として、「障害」を全面的に肯定した場を中心市街地の空き店舗で行ったことに意味がある。つまり、最初から開かれた空間を目指して作ったのである。商品や作品のだけでなく、障害を「コンテンツ」と捉え、アートによって、読み替えていくことで、「地域のコミュニティの中核となる」、「地域の文化をつなげていく場となる」場を作り出していく。地域資源としての福祉施設のあり方の可能性を今回実験することができた。

③市場としてみるたけし文化センターの意義

今回は 2 週間の期間限定の事業であったが、こうした場が常設的にあることによって、さまざまな人たちが障害のある人の認知を変えていくことはもちろんであるが、市場としても成立していく可能性は十分にある。その理由は、ここに多くの人たちを集めることによって、ショップ、カフェ、といったビジネスが成立する可能性がある。また、さまざまな施設で作られているアート商品を紹介販売する場としても、有効であろう。こうした場を通して、地域の企業、人たちが、障害のある人の触れ、作品に触れることで、新しいビジネスチャンスが生まれる可能性がある。

第4章 提言

I・障害のある人の美術作品市場開拓への提言

項目	課題	提案
①評価づくりの必要性	<ul style="list-style-type: none"> ・美術品としての評価基準の曖昧さ ・福祉的考え方との混乱 ・日本独自の評価づくりの必要性 	<ul style="list-style-type: none"> ●障害のある人の美術にかかわる専門家の議論の必要性(シンポジウム、会議の開催) ●評価を定めていく検討会議の必要性
②美術市場を取り巻く環境の整備	<ul style="list-style-type: none"> ・障害のある人の作品を美術品として扱う市場の狭さ・多くの障害者アーティストが参入できる市場がない ・優れた作品の海外への流失、劣化の問題 ・福祉施設単独での参入の難しさ(人的、経済的) 	<ul style="list-style-type: none"> ●美術業界との連携による作品の普及(美術展、展覧会へのてこ入れ) ●メディア等への働きかけ、マネジメント ●優れた作品のアーカイブ化(保存、収蔵、データー化) ●著作権等の整備と保管
③国レベルでのサポートの重要性	<ul style="list-style-type: none"> ・福祉施設単独での管理、運営、マネジメントの限界 ・市場ができていない ・障害のある人の芸術活動はまだ全国的には広がっていない 	<ul style="list-style-type: none"> ●評価づくりのための研究、調査機関の推進 ●福祉施設でのマネジメント事業への補助 ●行政発行書籍等への障害者アートの活用 ●人材の育成(学芸員等専門家の養成、サポートする人材の育成) ●福祉、文化、教育を横断した支援 ●保存、収蔵、著作権整備の支援 ●国レベルでの市場づくりの推進 ●展覧会、作品展への支援

●障害のある人の作品に関するシンポジウムの提案

今回の調査において、障害のある人の美術品の市場を育てるには、障害のある人のアート活動を多くの国民、市民に周知することと、美術品としての評価についての議論を行なう必要性を感じた。

そうしたことを、国民文化祭、あるいは障害者芸術祭を活用して行なってみてはどうか。2009年に静岡国民文化祭(10月24日～11月8日)その直後に、静岡県障害者芸術祭(11月

10 から 2 日、18 日～21 日)が開催される。全国の注目を集めるこの催しの中で、こうしたシンポジウム、講演会を展示と共に行うことで、障害のある人の美術作品の周知と評価への意見を集約する。

■障害のある人の作品評価についてのシンポジウム案

目的	日本の障害者アートのスペシャリストを招いて、障害のある人の美術市場の可能性と、評価作りの課題について議論し、提言を行なう
パネリスト(案)	<p>播磨靖夫氏(エイブルアートジャパン理事長)</p> <p>今中博之氏 (アトリエインカーブ施設長)</p> <p>はたよしこ(ボーダレスアートミュージアム NO-MA)</p> <p>美術関係者</p> <p>コーディネーター (学識経験者、その他)</p> <p>①障害のある人の美術作品の市場の現状報告</p> <p>②障害のある人の美術市場の課題</p> <p>③障害のある人の作品評価作りの課題と検討</p> <p>④提言</p>

II・障害のある人の商品市場開拓への提言

項目	課題	提案
①福祉施設を主体としたアート商品ビジネスモデルの確立	<ul style="list-style-type: none"> 福祉施設を運営しながらの商品開発の難しさ 社会的使命のある商品の性格 障害のある人のイメージが重なる商品 「モノ」ではない、障害のある人のアートの活用 	<ul style="list-style-type: none"> ●商品開発およびマネジメントを行う専門スタッフの確保(内部留保あるいは外部委託) ●他専門機関との連携による商品開発(美術大学、行政) ●地元企業等とのネットワークの構築 ●企業の社会的貢献をターゲットとしたビジネスの検討 ●コンテンツとして捉えた市場開発
②地域に焦点を充てたコミュニティビジネスの開発	<ul style="list-style-type: none"> 社会とつながるための障害のある人の商品 人と人をつなぐことのできる障害のある人の存在 アートとしての障害のある人への注目 	<ul style="list-style-type: none"> ●地域の間人関係から派生するビジネスの検討 ●地域のコミュニティを重視した市場づくり ●福祉施設としての社会資源の活用(地域のコミュニティの中心となる)

③作品のクオリティを高めること

ある程度のレベルに達成していなければいけない。これは障害のある人の問題ではなく、それを支えるスタッフの問題。専門性の高い、またはそこに興味のあるスタッフが、その作品をどのように商品

化していくかを真剣に考えていくことが大切であり、これが前提条件となる。

④地域にある市場にアクセスしてみる

福祉施設の枠組み(福祉バザー、関係者に向けた販売)の市場に留まらずに、地域のショップ、商品開発をしている企業、商工関係など、普通に商売をしているところとつながっていくこと。

ヒアリングした施設のほとんどは、ファッショナブルな商品を作り出しているところが多かった。そうした商品は、地域のファッションをリードしている、ショップ、カフェ、デザイン会社、広告会社などの、そうしたことを求めている人たちをターゲットとして、プレゼンテーションしていくことによって(つながっていくことによって)ビジネスチャンスをつかんでいた。

⑤情報の収集

地域の中で何があればいいか、何を求めているのか、どんな人がいるのかなど、2 の市場とのやり取りの中で人と人のつながりを作っていく。

⑥ファンを増やしていく

細かな仕事を積み上げていくことで、施設や利用者のファンを増やしていく。また、商品を買った人や、仕事を紹介してくれた人たちが、レポートしてくれるためには、作品展やイベントに招待するなど、細やかな人間関係を大切にしていく

⑦仕事の幅を広くする

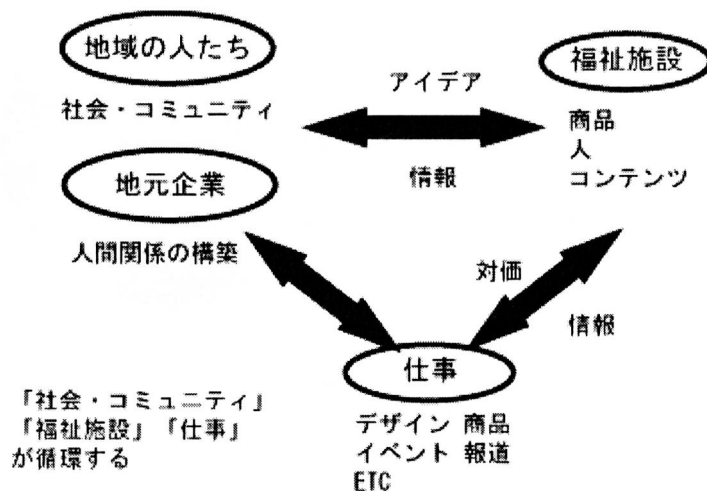
「私たちはこれしかできない」のではなく、障害のある人の作品にはさまざまな可能性がある。それを施設で限定してしまうのではなく、むしろ、地域の関心する人やファンがいろいろと展開していけるように幅を、施設自体が持つことが大切。

⑧コンテンツとして捉える

障害のある人そのものをコンテンツ(中身・素材)と捉えると、可能性が広がる。障害のある人の作る作品だけでなく、それを作り出している人そのものをコンテンツと考えると、新しいビジネスの発想が生まれてくる。こうした考え方を施設職員が持つことが大切。

その先のコンテンツをどのようにビジネス化していくのかといったところは、施設の中で考えていくよりも多くの協力者と考えていく。その時に地域にいるファン、客の中の、ビジネス、マネージメント、クリエイター、デザイナー、アーティスト的感覚のある市民と一緒に考えていく。

コミュニティビジネスの可能性



Ⅲ・地域における市場開拓への提言

①コミュニティの中核としての福祉施設	<ul style="list-style-type: none"> ・ 遠隔地にある福祉施設 ・ 迷惑施設となっている福祉施設 ・ 地域からは閉じている福祉施設 ・ 安定した運営ができる半公共施設 	<ul style="list-style-type: none"> ● 地域の中心となることのできる福祉施設 ● 障害のある人たちを中心に、地域のコミュニティをアートによって作っていく場 ● 創造都市の新しいコンセプトとなる障害のある人、拠点
②地域資源としての施設	<ul style="list-style-type: none"> ・ さまざまな設備が充実している（広いスペース、造形活動が行なえる設備完備など） ・ 半公共空間（建物の維持管理、設備、など） 	<ul style="list-style-type: none"> ● 情報の受発信、人々の交流、障害者以外のサークル活動のサポート、など公民館的な要素を織り込んだ福祉施設 ● 地域に開かれた場としての検討
③コミュニティの中核を担う障害のある人	<ul style="list-style-type: none"> ・ 作品や商品としての障害のある人のアートの活用 ・ コンテンツとしての市場開拓の検討 	<ul style="list-style-type: none"> ● 障害のある人をコミュニティの中核に据えることで見えてくる新しい社会のあり方 ● 人と人をつなげ、新しい創造力を呼び込む人々
④障害のある人の新しい働き方	<ul style="list-style-type: none"> ・ 障害のある人がいることに生まれる空気感、時間軸 ・ 障害のある人の存在をコンテンツとして捉えた仕事の検討 ・ 専門就労としての仕事の可能性 	<ul style="list-style-type: none"> ● 障害のある人がいることによって成立する文化センター（アートセンター） ● 障害のある人が基軸となる文化センターの仕事 ● さざまな人をつなげる仕事 ● 今までにない仕事の捉え方（地域の中核、地域の資源を支える仕事）

⑤コミュニティの中核を担うたけし文化センター

障害のある人の文化芸術活動は、今回、調査したように、美術品や商品といった「モノ」として流通している。しかし、モノが売れない不況の中で、それらの販路が躍進するには多くの課題があることが解った。

静岡県浜松地域に、障害のある人の文化芸術活動を仕事として本格的に取り組んでいる施設はない。文化芸術活動は余暇活動として位置づけられて、障害のある人の専門就労として捕らえる風土は育っていない。このように障害のある人のアート作品の市場はさまざまな厳しい状況を抱えている。

その中で大いに注目できるのは、障害のある人そのもののあり方や、健常の人たちにはない、彼らの内発的なエネルギーを文化芸術活動のコンテンツとして捉え、それを通して新しい価値や流通を作っていくことである。

今回実験を行なったたけし文化センターは、障害のある人がいなければ実現しなかった場である。

障害のある人を基軸にしながら作り上げていった場合は、さまざまな人と人の交流を生み、カフェ、展示、物販、ワークショップなど、さまざまことが可能な場となった。そして、こうした場を支えていく人として、障害のある人は欠かせない。すなわち、その見え方に工夫をすれば、障害のある人が中心となった先進的な文化センター(アートセンター)を作ることが可能なのである。そして同時にここは障害のある人の仕事場としても成立する。

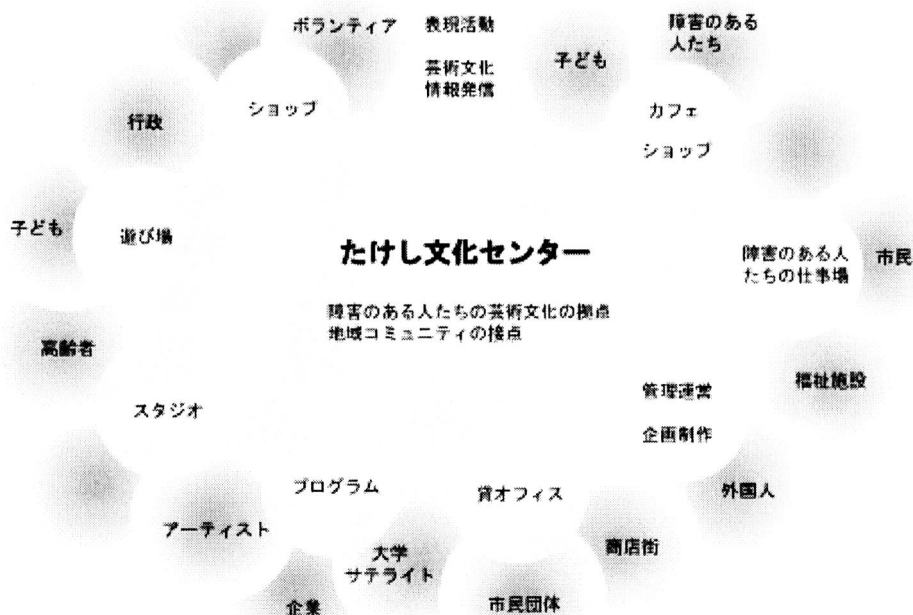
さまざまな人を結びつけ、来た人をもてなし、そこから多くの情報やを発信し、クリエイティブなものが生まれる空間を実現するためにも、障害のある人の存在が必要であり、それをアートと捉えることによって、クリエイティブな場を作っていく可能性がある。

このように、障害のある人の文化芸術活動は、こうした地域コミュニティの中核となり、文化センター(アートセンター)として位置づけることができる。

創造都市を目指して日本の都市はさまざまな試みを行なっているが、こうした位置づけで、アートセンターを作っているところはない。

アートが社会を変えていくことに関心の高まりの中で、障害の人たちのアート、生きることそのものがアートと捉えられる人たちの可能性は、無限に広がっていることを感じている。

たけし文化センターイメージ図



⑥たけし文化センター常設化に向けての事業

今回の調査を受けて、NPO 法人クリエイティブサポートレッツでは、2008 年末に行なったたけし文化センター（アートセンター）を浜松市中心市街地に作ることを計画したい。

今回は 2 週間の期間であったが、実験事業を続けることによって、障害のある人たちもまちの人たちとともに自然とそこにいられる文化センターの可能性を引き続き検証していきたい。

こうすることによって、アートによる障害のある人の捉え方を行なうことで新しい、専門就労のかたちを模索していきたい。あわせて、こうした施設を福祉施設としてあわせて検討していきたい。

事業の目的

浜松の人や物などの地域資源を活用した芸術文化活動を通じて、障害のある人の自立と社会参加をさらに促進するために、彼らのあり方の見直しを行いながら、浜松の文化芸術の発信基地ともなる地域コミュニティ文化センター（アートセンター）を創設し、福祉施設や、市民団体、大学サテライトなどと連携しさまざまな分野の人や団体が交差し、文化活動に主体的に参加、発信できる土壌をつくる。同時に、文化センターの機能と運営を担う、障害のある人の文化活動を通した新しい就労モデルの検討を行なう。

事業の背景

平成 20 年度に、11 月 22 日から 12 月 7 日に、障害のある人のアート作品を本格的に紹介する、「ローリングコレクションレッツとカイの作品展」のサテライトとして、「たけし文化センター」を、中心市街地の空き店舗で行なった。

ここは、重度の障害のある子どもを、コンセプトの基軸にすることで、誰でも来ることができる空間、プログラムと、さまざまなものごとの見方を変えていく場としての可能性があることが解った。

障害のある人の営みや、表現活動が、多くの人たちの固定した価値観を変化させ、さまざまな見え方や、感じ方があることを示し、一人ひとり個人の中にある、感性を呼び覚ますきっかけとなる場を作ることができた。

それは同時に、障害のある人が、場の中心に据えることで、さまざまな人たちがつながり、本当の意味での「文化」が生まれる空間が実現できることがわかった。

平成 21 年度は、こうした場を再興し、継続して運営することで、障害のある人の新しい見え方を創造し、社会的な地位の向上と可能性を模索していきたい。

また、こうした地域のコミュニティを担う「文化センター」を就労場所のひとつのモデルと捉え、障害のある人の新しい就労形態を模索し、今後実現させていきたい。

事業内容

①浜松市中心市街地に障害のある人の文化芸術活動を基軸にしながら、地域の文化芸術の発信基地ともなる文化センター（アートセンター）設立と実験

- 様々な人がつながれるフリースペースの展開
 - ・ フリースペースの機能も踏まえた模様替えプロジェクト（アーティストを招聘）
 - ・ 定期的な地域文化芸術振興会議を開催
 - ・ さまざまな人や団体との連携の調整
- 障害のある人、さまざまな人々が参加できるオープンスクールの実施
 - ・ 講師を招き、アート系、福祉系、多文化系等様々なジャンルの講座を開講
- 障害のある人の作品展の企画、グッズの展示、販売
 - ・ 文化センター内に、全国の障害のある人の作品、グッズを紹介、販売する
 - ・ また個人ではなかなか発表の機会を得られなかったり、既存のフォーマットでは発信しにくい人たちの作品展などを企画
- さまざまな人たちが利用できるカフェ・バーの実施
 - ・ 文化センター内に、音楽、演劇などのライブ公演も可能なカフェを併設させ、フリースペースの一層の充実と発展を図る
- こうした事業を紹介、検討、発展のためのシンポジウム、イベントの開催
 - ・ こうした広く発信するためのシンポジウムを行う。創造都市のひとつのあり方として、全国に提示していく

②地域の文化芸術の拠点でありながら、地域のコミュニティの中核となる障害のある人の就労形態の可能性調査と実現に向けての検討

文化センターの中で障害のある人の新しい就労のモデルを検討する。文化センターの基軸に重度の障害のある人の据えることで、障害の程度とは関係ない新しいあり方や、新しい仕事の可能性を検討していく。

- 地域の文化芸術の拠点でありながら、地域のコミュニティの中核となる障害のある人の就労形態検討委員会の発足
 - ・ 大学（福祉関係、文化芸術関係）、特別支援学校、福祉関係者、行政関係者（文化、商業、福祉、市民協同）、街づくり関係者、商店街、商工会議所(CSR担当者)、アート関係者、NPO関係者などの専門家による検討委員会を発足させ、事業の評価と検討を行なう
 - ・ 6月・第1回委員会（5～6回）

- 文化センターにおける就労形態のモデルづくりと実験
 - ・ 文化センターの職員、ファシリテーター、アーティストスタッフとしての障害のある人の新しい就労のモデル考案し、文化センターの実施を通して検討していく
 - ・ 5月～9月 モデルの検討
 - ・ 2010年3月～ 文化センターでの試験導入

- コミュニティの中核となっている福祉施設の事例調査
 - ・ 全国で地域のコミュニティの中核となっている福祉施設の事例調査と研究
 - ・ 4月～12月 全国2～4ヶ所、見学ヒアリング

- 専門機関へのヒアリング
 - ・ 可能性を調査するために、専門機関（特別支援学校、文化関係機関、福祉関係、商工関係、街づくり関係、その他）、企業CSR担当者等にヒアリングをおこなう。
 - ・ 4月～12月

- シンポジウムの開催
 - ・ こうした事業を普及と、障害のある人の新しい働き方を問題提起していくシンポジウムを開催する
 - ・ 2010年1月～2月
 - ・ 広報活動に力を入れる

- パンフレットの作成
 - ・ こうした事業の普及を図るパンフレットを作成する
 - ・ シンポジウム時に配布する

③報告書の作成

- ①、②の事業をまとめた報告書を作成し、関係機関に配布する

■資料

資料1:先進事例施設 ヒアリング

①社会福祉法人素王会アトリエインカーブ

1. 障害の人の表現の市場づくりについて

7年前に知人の美術館学芸員に作品を見せて評価を仰いだ
が、その作品に歴史性や派閥等
がないと、価値付けを断られる。
障害の人たちの本来の作品に
着目がいかないということで、本
当に作品そのもので評価されな
いのかと、今度はニューヨークの
ギャラリーに作品の資料を送っ
て反応を確かめた。障害の人の
作品も扱うフィリスカインドギャ
ラリーに見出され、ターニングポ
イントとなる。



まずアウトサイダーアートのフェアに出品して完売する。しかしアウトサイダーではなくもっと市場の大きい現代アートとしてもっと出していきたい。

2. 日本には市場があるか？

障害者表現の分野は4つある。1つ目はエイブルアート。これは市場はない。2つ目はアウトサイダーアート。市場はニューヨークにしかない。3つ目はアールブリュット。これも市場はない。4つ目は現代アート。アートバブルがはじけて以前の3分の1くらいにはなったがそれでも高額な市場がある。

3. 作品、商品の売り上げはどれくらいか？

25人の利用者の中、アーティストとしてデビューしているのは5人。この5人の収入は作品一つが200～300万円。諸経費抜いて売り上げはすべて作家に渡すので、作家自身の収入は半期で700万円という人もいる。

商品市場開拓という目線では考えてはいない。企業化すれば商品などもっと流通するが、国が運営する福祉施設であるという特徴から、初期投資ができないのと、今は作品の格付けを優先しているため、売り場も拡大せずミュージアムショップなどに限定している。そのため商品の売り上げは一人の利用者に対して月に一万円程度となる。作品にしても自分たちではアーティストの作品に評価は絶対



せず、外部に任せることで正当で価値のあるものとして認められる。

クライアントを生かすも殺すもスタッフのハンドリング次第。5人はもう自立できるので、現在もっとも大事に考えているのは残りの20人。

4. 市場にのることは一番の命題か？

クライアントが25人いれば25通りの幸せがある。作品を売らないという人の作品は絶対に売らないし、作らなくなった人にも強制はせず、「冬眠」と呼んでそのまま見守る。

障害のある人たちの就労に関して言えば現状の世間の視点はあまりに狭い。障害のある人にも「専門的就労」の可能性を広げることが大事。

5. 外部とつながらずに孤高の活動をする理由は何か？

小さいところではやれることが限られるから。経験上周りと絡むと不純物が増え角が丸くなってしまふ。

また内部的にはデザイン事務所的な側面と生活介護の側面の両輪で運営しているが、外部にはデザイン事務所の側面だけをあえて出して、インカーブの考えを外の人たちに届きやすくしている。

インカーブのような施設をもっと作って欲しい、という依頼も絶えないがすべて断っている。なぜならば、1つは自身の体力的な問題。もう1つは建物だけつくっても、業務をこなせるスタッフがない。業務を拡大しようとは思わない。小さいところには大きい企業とは間逆の戦略が必要。複雑なことは無理。あとあと絡まってしまふ。やることはひとつにしぼる。ただインカーブの真似をするのは大歓迎。こういった仕事をこなせるデザイナーやマネージャーが国立大学から育つように、クライアントを講師として美術大学に派遣するなど大学教育と連携している。

地域とはいっさい絡みがない。社会のシステムを改変していくのに、草の根的にやっていっては大変。決定を下す上層部に直接働きかける。



6. 社会福祉法人である理由は何か？

国民の最低限の幸せを保証する仕事は公金を使って国が行う仕事だと思っているから。だから個人からの寄付はすべてお断りしている。企業は公であるから CSR は歓迎。また NPO 法人は運営費、人件費の面からおすすめしない。

社会福祉法人である以上、クライアントの幸せが一番。25人全員と一緒に幸せになることを望む。

絵を描くことなどは、付加的な事業だと特に福祉の側からいわれる。社会の目線ではそういう風にか障害者を見ない。福祉ではお金をすることに罪悪感を感じたり、知的障害者は低収入であるべきという判断が暗黙にある。こうした状況で成功するには、格付けと企てが必要になる。また福祉ならプロでなくていいのではなく、本当に社会の中で評価されるにはプロになることが重要。

1 成り立ち

現在、社会ではさまざまな雇用
の問題がある。イタリアの働き
方、協同組合、共同労働があ
る。色んな人が色んな質でい
い形の生活ができることを目指
すものである。エイブルアートカ
ンパニー（以後カンパニー）も
似ている。ゆるやかに全国に障
害のある人がつながり、そこに
登録することにより仕事を得る
可能性を持つこと出来るネット
ワーク型のもをを目指した。自
立支援法で障害程度区分1か



ら6区分され、その中で利用できるものと出来ないもの出てきた。障害の種類と程度によって利用できるものが変わることがおかしいと感じた。表現は障害の重さとは関係ないと思う。そこに表現の根源的な大切さがある。表現活動を工賃・ものづくりに反映させなくてもやっていたものが、自立支援法後、表現活動の作業場をやめる施設が多く出た。法律をのっとらなくてもやれる方法を構想する中でカンパニーが出来た。

障害のある人、基本的に個人がカンパニーに登録している。カンパニーが社会のユーザの声を聴き役目をしている。例えば、著作権・契約が分からない等の総合のニーズの解決するためにデジタルデータを管理したり、使用窓口として貸すことでお金をアーティストに払っていくという骨格作りを行った。1年半いくつかの先行事例を行なった。

母体は財団法人たんぽぽの家である。現在は様子を見ている段階である。3つの事務局をもち、それぞれは東京 関西 福岡にある。カンパニーの仕事は作品作家の情報公開、デジタルデータの貸し出し、著作権の管理等である。料金ガイドをも作成した。フォーラム・HP・メディアによりカンパニーの存在はひろまった。企業にはパブリックなものがうける。公益事業であることが大切だと感じている。カンパニーどこかひとつではない。全国 32 人の作家が登録しており、公募により作家が決まる。この公募であることが重要だと感じている。一年目はたんぽぽの家、ぽれぽれ、まるから作家を選出した。これは実験段階だった一年目は顔の見える相手を対象にして、カンパニーとしての安定を図る必要があったためだった。二年目は公募が始まった。現在、毎年 100 人の応募がある。専門の業界の人で審査が行っている。商品は印刷物・エコバック カレンダー等がある。企業からの作品のオーダーもある。作家を希望する場合もある。またそうゆう出会いをつくるためのプロモーション事業も行っている。ワークショップ等の企画もある。メディアで幅が広がった。

2. 現在の経営状況は？

助成金で400万頂く、事業収益は1500万規模30-40%を次年度にストックしている。1年から2年目はたんぼぼの家のスタッフが完全ボランティアで行った。今後、経営としてなりたつかを考えていき、事業として自立できるかを考えていく必要がある。理事のコンサルの方に協力をもらい、仕組みとしてはおもしろいと評価を得る。

社会的企業をキーワードに行った。アートレンタルは労力のわり需要がない。厚労省で助成金をもらいながら、どうしたらデータベースを管理できるかということでITのコンサルタントをいれて、デザイナーがプランを作っている。

3. 作品を使いたい人・お客はどうみつけていくか？

営業は専従できない。たんぼぼのいえやHANAからシフトさせておこなった。以前からの付き合いでおこなっていることある。ただ、一企業の規模が大きいので収益は年1500万になっている。まだ課題のひとつである。

4. 登録・審査について

エイブルアートは作家とまるごと契約。作家の変化や期待値も含めているため作品での契約は行っていない。選考会でしぼりこみ、その後事務局で他のとの契約はないかと調べる。これは作家にとってさまざまな場面で不利益が出ないかを確認するために行っている。結果的に作家に不利益がないとなった場合、作品提出・プロフィールの提出、作品の撮影を行う。一月に選考会、3・4月撮影準備、5月から新規作家追加行う。

5. 収入について

個人契約のときはそのまま本人に全額が手渡される。施設にいれば施設内で相談していただく。契約書は本人がトップに書かれ、施設の中にいれば第三者が契約書にのることもあるが、基本は本人が主体となる。

6. デザイナーの仕事について

現在は、デジタルデータを貸すだけで商品は相手方で作る。基本的にたんぼぼの家はデザインしない。ただ、小さな会社等は別途お金をもらってデザインをすることもある。その場合はたんぼぼの家のスタッフまたは外注で行う。ただ、問題は出方のイメージのコントロールではできないことである。作家にはそのことは了承を得ている。ただ、あまりにも本人の作品が変わることがあれば、たんぼぼの家から企業に申し出るが、ゆるやかなデザインの変更はあることを本人に了承を得ている。

7. 企業にとってこの事業は社会的貢献であるか？

アパレルは社会貢献はつかわない。絵がいいから使うという単純な理由が多い。ノベルティに使う人は社会貢献の意味がある。現在はその二者いる。両方いいと感じる。絵本位で、その絵に魅力を感じて使っている会社があったが、社員が作家に興味を持ち、そこからつながりをもち作家とのかかわ

りを持つ会社も出てきた。そういう変化をみていることは嬉しいし、楽しいことだと感じている。

8. 今後の事業計画的は？

来年度は仕事の事業規模をのぼす。収益2000万ぐらいに引き上げる。それが専従職員運営費なると感じる。営業したい。地方事務局をふやしたい。企業との付き合い方にも地域性がある。社会的企業とは事務局がそれぞれ自立できることが大切であり、カンパニーも全国にゆるやかにつながり、現在ある事務局以外のはざまの地方地域に事務局をおきたい。地方の事務局が増えれば、組織のネットワークのバリエーションも増える。お客さんも選択が増え、楽しくなる。5年後に8箇所の事務局ができればと思う。

9. 経営の仕組みは？

契約料金の30%が作家、70%がカンパニーがストックして運営事業にまわす。年間2回に収支を決算。あまった場合は次年度に繰り越す。今後、収益があがり、現在は、事業が安定するなかで、作家に払う収益の率を少しずつ上げていきたいと考えている。

②-2財団法人たんぽぽの家 理事長 播磨 靖夫

1 現状について

まず、厚生労働省に釘をさしたい。障害者アートの市場開拓、チャンスを広げるのは大事なことだが間違っているとんでもないことになる。障害の人たちはずっと訓練の歴史だった。一生訓練。そんな中でアートはようやく彼らが手にした自由である。それを市場に出し売れるようにすると、その自由はなくなってしまう。間違えてマーケットにしたがって売れる絵を描くようにす



すめたら、売れる絵をかけない人は蹴落とされてしまう。現にアトリエインカーブのような現状がある。売れる絵を描ける人には大きな絵を描かし、優遇されるが、売れない人は排斥されてしまう。そこは難しい。

カンパニーを作ったときも、売ってしまって消費されるのではなく、アートとしてきちっと見せていきたい。そして二次使用で収入を上げていく。この二つをしっかりと見ていかないといけない。

世界中のことを考えていけばコレクターはいる。そういう人たちは買うけど、一般の人たちには、何百万という値段では買えない。アメリカなどあちこち見てきたけど、多くの場合はコミュニティが支えている。市がオーダーし、市のフラッグに採用されたり、コミュニティの若手のアーティストが手頃な値段で購入したりする。こういった取引は特にインテリ関係の人はものすごく自慢する。こういうコレクションを持っていますよと。特別アートフェアなどにだして高い値段を出して買うということは長くは続かない。その辺を分析した上でマーケットをどうするかとかんがえていかなければならない。

2 これまでの経緯

我々がやってきたことは、1995年からエイブルアートムーブメントということで障害者のアートの見直しをずっとやってきて広げてきた。たまたまトヨタ自動車がバックアップしてくれて、7年間全国67カ所で種まきをしてきた。まず、障害者アートの見直しをしていこうという活動をし、次にそれを支える人を育てようと、福祉のアート化セミナーをやった。それで、今全国でおもしろい活動をしている福祉施設の作業所はだいたいこのアート化セミナーの出身者。その人たちがそれぞれの面白い展開をはじめている。例えば九州でいえば、工房まるや、アトリエブラボオなどみんなここでアート化をどうするかと議論してきた連中が育って、それぞれの道を開拓して障害者アートが生まれてきている。もちろん一方で自立支援法以降、彼らの収入や就労を上げるというのが大きな課題となっていて、そこをつなぐために仕組みをつくる必要があるということでエイブルアートカンパニーを立ち上げた。作品の流通、維持、普及を目的としており、今は3カ所くらいとつながっていて、ゆくゆくはどんどん増やしていきたい。例えば大企業と話していくには、単に「ローカルにがんばっていますから」、というのではなくて、多様性とメニューのバラエティと量を確保するということが必要だと考えている。

まほろば楽市楽座という奈良の古い町並みをつかって障害者のアートのいいグッズを売るというプロジェクトを10年続けた。その10年の間にもものすごくネットワークをつくっているわけ。その調査に今年まわるということなのだが、福祉関係の人間だけで行わず、若手のデザイナーと一緒にまわるようにしている。やっぱり製品にはデザイン力が必要だから。いろんな手だてをしながらエイブルアートフォーラムで蒔いた種を少しずつ育てていく。そういう状況である。



3 エイブルアートカンパニーの目指すところ

エイブルアートカンパニーにもいろいろバリエーションがあつていいと思う。代理店みたいなもので、施設も利用者も企業も望んでいるし、いっぱい今作品が生まれてきているから、エクステンジができる。そういうことはネットワーク上でやっていった方がいい。作品をそのまま売るのもいい。それをどう適正な価格で売るかということはカンパニーが権利保護の立場に立って、アドバイスしていくということも大事なこと。2次使用の仕方もいろいろあるのでその場その場でエージェント

として調整していく。障がいの人や福祉の人たちのできない部分をカンパニーが代行してやっていく。当事者と福祉施設の権利が守られ、収益も上がるような取り組みにしていく。

あと、日本だけがマーケットとして捉えず、アジア、太平洋、アメリカなどもターゲットにしていく。現代は人の行き来も激しくなっており、企業そのものも多国籍になっていっている。マーケットを広く捉える視点でいく。

企業もパブリック度がないと動かない。たんぼぼ一組織を応援するよりも、ネットワークの数を増やし、それ全体の方が応援しやすい。

4 収益について

収入が低い。40人くらいのメンバーも2万円くらいしか得られていない。少し具体的な根拠のある計画を立てないといけない。自立支援法でだいがきられている。自由に使える金をだいがもたないといけない。自分の意志で自分の人生を選択するという考え方。それが幸せという考え方。それは自由ということ。自由度が広がればよい。自分の人生を自分で選ぶことが大事。そのためにはある程度稼がないといけない。そのための努力は必要。レーガンから始まった新自由主義は失敗した。ヨーロッパは第3の道、社会民主主義という社会的な公平を持ちながら、競争原理も入れるというミックスしたあり方を模索している。日本の経済のあり方は所得の再分配であり、それが今いきづまっている。僕らが言いたいのは、可能性の再分配をしてくれということ。機会の平等が必要だといっている。その中で、どれくらいの収入が入るのかというのが頭をいためているところ。

アートセンターの企画を考えてパーティーとかをやるというのも賃金が払われる。それには障害のある人とアーティストとの合意が必要になる。何もできない人、ものを作り出せない人は収入がないというのではなく、参加していくということからでもありうると考えている。

5 アートについて

アートもいろいろあるが、これをどう評価していくのか。どういう風に見せられるのかというテーマは出している。

面白い例として、絵が描けない人たちは書で表現。単なる書の愛好家集団だったのを、看板や、墓石や、商品化につなげて売れる書にしている。

絵を描けなくても書とか、陶芸、演劇、音楽、などいろいろ可能性がある。

施設側が豊富なメニューを用意していく。アート化セミナーで育った連中はこだわらない。いろいろなアイデアをだしている。額縁台座の世界じゃない。実験的にアニメをつくっている。新しい分野もいろいろできてきている。いろいろなものに関わって彼らの才能が引き出されていく。

金やものになるかはわからないけど、そういったものが可能性の再分配だと考えている。みんな、障がいなどをネガティブなものとして捉えているけど、いっぱい可能性はある。我々がひきだせていないだけ。悪いものばかりみるのではなく、プラスの面をみていく。そういうことをスタッフに投げかけていっている。

存在と生活のアート。一例を上げるとえいこさん。彼女はなにが好きかというとお漬け物が好き。そこから「お漬け物プロジェクト」をはじめた。キュウリの種まきから収穫、お漬け物パーティーまで企画。これも立派なアート。えいこさんが水やりするのを見ていたが、えいこさんがまいた種だけがぴゅって育

って、あとは全部だめだった。もう愛情が違くとみんなが関心していた。この不思議さ。植物に愛情が伝わっているところの面白さ。そういった出来事を、写真や映画などでドキュメントして行って、こういうことで売れるぞということを我々は考えなきゃいけない。これこそえいこさんの存在の生活のアートだという。そこで国の市場化というのを全面にだして行ってしまったら、そういったものは全部捨てられてしまう。そこは気をつけなければいけない。

周りの人の感性の問題や、それをアートとしてどれだけみせられるか。アートというのは見る度合いと見せる度合いの交差する所である。つくるだけではアートにはならない。見る側との交差する部分がアートとして成立していくところ。中身で判断するようにならないと変わっていかない。付加価値でものをみないようにする。アールブリュットやアウトサイダーとしてではなく、自分の感性で選んでいくようにしていきたい。

③ボーダレスアートミュージアム NO-MA アートプロデューサーはたよしこ

ボーダレスアートとは、障害のある人の表現活動の紹介に留まることなく、一般のアーティストの作品とともに、並列して見せることで、「人の持つ普遍的な表現する力」を示し、「障害者と健常者」「福祉とアート」「アートと地域社会」などの様々なボーダー(境界)を超えて行こうとする取り組みである。



ボーダレスアートミュージアム NO-MAは、2004 年に滋賀県社会福祉

事業団が運営している。(運営部の一部は県の福祉の予算)近江八幡重要伝統的建造物保存築の町屋を改修し、ボーダレスアートギャラリーNO-MAを開設し、その後、博物館相当施設として認められたことにより、ギャラリーからミュージアムへと改名した。設立準備時に、滋賀県社会福祉事業団から話があったときには「障害のある人が自由に使えるギャラリーを作りたい」との話だった。はた氏は、違った方向性のものをつくる事を提案。福祉ではない美術関係者で、運営委員会を作り、何を作ったら面白いかを議論した。そして、障害のある人の表現と現代アートを同列に考えたギャラリー、NO-MA が誕生した。オープニングで行った展覧会、「私あるいは静かな燃焼系」は、美術そのものをやっている人から多くの共感があった。

NO-MA は年間13~14本の展示を企画している。その中で年 1~2 本、大規模な展覧会を任されている。1991 年から月2回ペースで、兵庫県西宮市のすずかけ作業所の「すずかけ絵画クラブ」を続けている。

障害のある人のものの表現には、たくさんのインスピレーションがあり、アートとしてのエネルギーを感じる。すずかけ作業所の人たちの付き合いから、表現の根源が見えてくる。それは表現の原点であり、

障害者アートと言うくりを必要とはしない。

障害者アートはどうしても、特殊化されてしまう。障害があるとかないとかではない「表現」「アート」として、見て行きたい。2000年に横浜、東京で展覧会を実施。多くの反響がある。そこが転機となった。

ボーダレスアートミュージアム NO-MA の意義

滋賀県は伝統的に障害のある人のアート活動が盛んな地域。多くの児童施設が年度を使って、美術教育を行ったのがきっかけ。粘土、陶芸が盛んな地域。粘土はどんな子どもでも関わることができる。自分の思ったものを形にする。そうした施設が多くある。NO-MA は普通の民家をミュージアムにしているが、温度管理や採光など不利なところ多いが、アーティストには好評。ここでしかできない表現がある。近江八幡は古い町並みが残っているが随分寂れていた。事業団の理事長のところに観光課からどうにかできないかの相談があり、民家をギャラリーにすることにした。展覧会を企画すると若いアーティストや福祉に関係ない人が結構訪れてくれる。ここが起爆剤になって、カフェや雑貨屋なんかもできてきて、地域の活性化にも少しは貢献できたと思っている。

NO-MA は企画を公募して展覧会もやっている。来年度、文化庁の支援を受けて国立美術館の学芸員が NOMA で展示する。ボーダレスアートの企画として、現代アートの作家やインサイダーアートの作家にも出てもらおうと思う。

水戸美術館で2006年に行なった「LIFE 展」は、現代アーティストだけでなく12から13人のいろいろなジャンルの作家が出て、その中で障害の人も入っていたがとても面白かった。国立美術館の学芸員でもそうしたことにもっと興味を持ってくれるといい。随分と学芸員の人は注目してくれている。NO-MA にも随分と多くの学芸員さんが足を運んでくれている。アウトとかインの壁を取り払っていきたい。特に若い学芸員さんはとらわれていない人が多くなった。いい動きが始まっていると感じている。NO-MA では、毎年「ING 展」を行なっている。県内の施設の美術担当者が集まって展覧会を行っている。大体美大を出ている。でも施設の中ではなかなか共感を得られない。活動としては細々とやっている。抵抗にもあっている。そんな人たちが自分たちの施設の作品を見せ合ったり、勉強したりしたいところから始まった。展示の専門家を呼んで勉強会をしている。その作品のよさを引き出すためにはどうしたらいいか。現場の人たちは制作者が多いので、展示のノウハウや研修することですぐレベルが上がっていることを感じる。

こうした動きは、いろいろな情報が集まってとてもいい。美術大学の学生さんもたくさん見に来る。これもNO-MA があることのメリット。集う場所があるというか。すずかけ作業所に通って思っていたことは、施設の中だけの活動は閉じてしまいがちで情報が広がらない。福祉の特長ともいえる。NO-MA はいろんな人が入って気安い。でも批判されることもないことはないが。

ボーダレスアートの企画展は、自分がより強く出る場になるとアーティストたちにも好評だ。障害のある人とのコラボレーションはアーティストとしては結構緊張する。負けられないという思いが強くなるようだ。作品の価値というか、自由な座標軸にいるかどうかかわかるようだ。それだけ障害のある人の作品は強い。

日本の市場とアーカイブかの必要性

作品を買う人は日本にはあまりいないと感じる。欧米のように、プライベートに絵をたくさん飾る習慣

は日本にはない。絵を買わない。市場のメインは欧米にしかないだろう。今回企画したアートブリュットとの合同企画展「交差する魂」では、この展覧会をきっかけにアールブリュットに収蔵された作家が 8 人。ここに収蔵されたというのがお墨付きになって、作品の値段が、今までただみただったのが何十万という値にすぐに跳ね上がる。こうした情報を聞きつけて、世界からギャラリストが買いに来ることもある。すずかけのアーティストでもそうした人がいて、年 1 回の展覧会をすると作品がすぐに高値で売れてしまう。作品数の多い人ではないので今は非売品にしているが、施設や個人に直接交渉しに行ってしまう場合もある。施設や個人はそうしたことに頓着がないから、ただ同然で渡してしまうこともある。

今必要だと思うのは作品のアーカイブ化。日本のいい作品がこのままではどんどん海外に流出してしまう。施設では価値がわからないし、管理できない。また、いい作品を制作している障害のある人は全国にたくさんいると思う。そうした作品や人をアーカイブして、守りたいと思っている。本当にきちんとしなければいけない時期に来たと感じている。これは、アールブリュットの関係者からも指摘された。そうした基盤整備が重要。NO-MA でも、著作権についての講演会や研修を始めた。

④社会福祉法人湘南福祉センター 工房絵

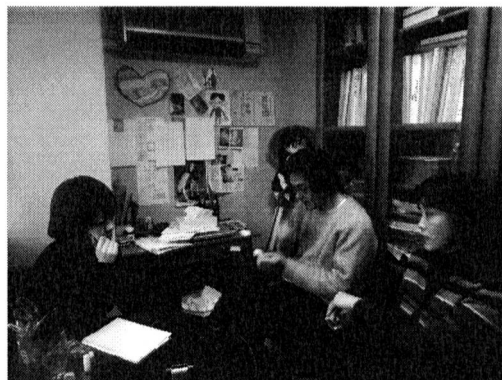
1. 工房絵の歴史

創立 18 年

自立支援給付金以外の主な収入源…… オリジナルグッズ、著作権販売(著作権管理会社委託)

グッズ販売と版権の割合…… 50:50

売り上げ概算…… 年間 600 万円



設立当初

- ・ デザインフェスタ※に出展。売り上げがまったくなかった。
商品:ポストカード、オリジナルの絵画、一点もののカレンダーなど
中高生の女子からの反応が多く見られたため、この年代が購入できる値段にしたいと考えた。
※デザインフェスタの出展品の傾向として、年々クラフト中心となってきた(衣類、アクセサリや陶芸など)。その理由として、売り上げのよさがあげられる。また、この頃の他の出展場所としては、福祉祭りやバザーなどが中心。

4 年目～5 年目

- ・ グッズの販売に移行。
- ・ 渋谷にある人気雑貨店OKURAでのグッズ取り扱い(年間売り上げ 600 万円)をきっかけに、全国版のファッション誌に掲載されはじめる。その後、ネームバリューに牽引され、全国の雑貨屋などからの注文が急増。最終的に委託提携先は40店舗ほどになる(6 年目)。

- ・ 独自企画の展覧会を始める。それに伴い、オリジナル 作業風景
絵画の販売を進め、直筆のポストカードを印刷に
移行した。その結果、ポストカードの売り上げは落ちた。

6年目～

- ・ 著作権販売を始める。
- ・ 社会貢献との考えからマージンが発生していなかったOKURAでの販売をやめる。その理由としては、作業所で作られる商品によく見られる、障害の人達への情を煽る文句を入れず、そういった部分に頼らず、あくまで対等の取引を目指して立ち上げた施設であったため。
- ・ 多くの委託提携先を抱えた時、利用者にはいままでと変化はなかったが、職員への負担過多となったため、提携先にそれまでの委託を買い取りへと変更してもらう事を打診した。結果、取引先は半分に減少。

8年目

- ・ 主にファッション業界のブランドライセンス事業を行う会社と提携。
- ・ グッズでは少量生産と手づくり感を大事にしたいと考えた。
- ・ グッズを外注する場合、ひとつのデザインに対し大量の生産を行うため、商品のバリエーションが減ること、外注を前提とした商品開発での利用者の関わりやすさを危惧した。販売経路やそのノウハウも問題点。

13年目

- ・ パン屋を始める。

14年目

- ・ 茅ヶ崎駅から徒歩5分の場所で、工房絵の商品をメインに扱う雑貨店を始める。月間売り上げ10万円ほど。オリジナル商品単一では商品とならなかった。

16年目

- ・ 雑貨店を閉める。

現在

- ・ 平均月1回のペースで展示会を行い、物販も同時に行っている。

2. 美術作品としての価値と、絵画作品の市場について

- ・ 絵画を所有する文化、市場自体が成熟していない。知らない誰かの本物より、有名人のレプリカを選択する傾向がある。成熟には10年はかかるのではないか。美術作品としての価値付けを目指しているアトリエインカーブですらも、現時点ではアメリカの市場頼みであり、逆輸入されてから全体的な市場の底上げがはじまるのではないだろうか。
- ・ 商品の価値が使用材料と比例している部分があり、材料が限定されてくる。

3. イラスト、デザインとして

- ・ クライアントがひとりのイラストレーターに長期間に渡り仕事を頼むことは少なく、プロジェクト毎に違ったスタイルを求めることが多い。そのため、大きな仕事をしているイラストレーターでも、一本や

二本の仕事で食べていくことは困難。

- ・ 健全の世界を見ても、イラストレーターは大勢いる。
- ・ 著作権管理会社を通し、最終のプレゼンまではいくが、決定に結びつかない。そこには、企業側に、障害者(制作者)が犯罪をおこすのではないかとの危惧がある。
- ・ 社会貢献の一環としてなら企業も扱えるが、同等取引となると、障害者を食いにしている等といった企業イメージのダウンにつながる恐れがあるとして、敬遠されがちである。

4. 利用者の「仕事」意識について

基本的に衣食住に関わる役割分担で、そこに対価が生じるものを「仕事」と考える。障害者、老人、子供は、「仕事」という枠で捉えられない人達であり、その存在をサポートするところから福祉が始まっている。そして、福祉は、助け合わないと生存が困難な場所で活性化するため、裕福な日本ではなかなか伸びていかない。日本では社会が障害者を支える力を高いレベルで保持しているために、障害者は「仕事」をしなくてよい側になっている。

絵を描くことを「仕事」としている工房絵だが、利用者の中にも、部品作りなどの下請け仕事が、本当の意味では「仕事」だと捉えている人もいる。



5. 自立について

自立は、自発的に関わるコミュニティの数や範囲の広さに表れる。ゆえに経済的に社会に関わる事が自立ではなく、コミュニティとのつながりを持つ事が自立につながる。

⑤社会福祉法人 福岡障害者文化事業協会 知的障害者通所授産施設

JOY 倶楽部プラザアトリエラボオ

1. アトリエラボオについて

福祉・アート・社会の三つがきちんとまわるように大切にしている。アートの支援と福祉の支援、両面から行うが大切だと考えている。現在は、アトリエラボオは 8 名。現在のアトリエには適正な人数はだといえる。自閉症が多いため、トラブルが絶えない。状況によって キヤスター付きの棚が移動し、部屋を完全に区切ることなく、緩やかに区切りをつけることで状況対処している。完全な分断は彼らの社会性の低下に繋がる可能性があると考えている。また彼らのすべて作品はデータで残す。原画を売ることもある。購入される方も多い。陶芸はスケッチをしてから形成する。作品は福祉的バザーには出さない。彼らもスタ



ッもプライドを持ってやっている。技術を作家さんから教えてもらうことも多い。作家さんのお友達も利用者の中には多く、利用者の友達や理解者をふやすことはスタッフの役割だと考えている。利用者の保護者の許可をえて、食事をしたり、お酒のみに行ったりしている。もちろん、利用者のファンも増えている。工賃は6万～7万を平均している

2. アンサンブルについて

アンサンブルのメンバーは3万～4万円。音楽・アートをやることで彼らの道を開きたい。アンサンブルは1000人規模のコンサートもあり、単独講演がほとんど。夏川りみさんと一緒にツアーを回ったこともあった。もともと音楽をやっていた子ばかりではないが、小さい頃から音楽やオーケストラが好きな方多い。あくまでもメンバーさんたちの音楽であり、職員は弾かない。指導者は、音大卒2人で音楽療法の専攻者もいる。5人でパーカスだけで即興音楽も行う。職員がMCも行うが、クライアントから注文があればMCを外注することもある。年間50回ほど講演。自主コンサートは年に1回ぐらいでほとんどが委託されたもの。アトリエブラボオのメンバーとアンサンブルのメンバーの同時イベントも行う。

基本的に仕事内容は問わないと考えている。アートや音楽だけが彼らに適した仕事だとは思わない。下請けでも、清掃でも、パン作りでもいい。ただ、やっている人がその仕事にプライドをもつこと、好きなことを仕事にすることが大切だと思う。障害者だから安く出来る等の考えではなく彼らがやるときれいにやってくれる、丁寧であるという理由が委託する側にあるべきだと感じる。

3. 宿泊訓練支援について

あくまでも自立ためにおこなっている。親がなくなったからも必要となる力になる。アンサンブルのメンバー、アトリエブラボー共に海外公演や遠征もあるので行っている。ホテルの使用が多いため、ユニットバスを利用。基本的に年間に一人一回行う。ベッドメイキング等も行う。さまざまところで役に立つ。体力作りと称して散歩を行っているが、外で集団で動くときのために練習を近くの公園に出掛けることもある。スケジュールは個々人に合わせて作る。自閉傾向の強い方がいる。昼食時間にこだわりがあった。親御さんから昼食の時間をずらして欲しいとお願いがあった。わざと遅らせる。最初は10分。20分といまは時間がずれても怒る事はなくなった。訓練していった。また遊びによく行く。絵をかいたための材料をさがすためでもあるが生活支援である。スタッフに何が出来るかを考える。障害が障害でなくなる社会を作りたいとおもう。

4. アート作品が市場に出ない。売れない現実があるが、解決すればいいか？

アートと商品で迷った。出し方が大切だと思う。分けて行った。原画の展示もおこなっているが、商品も行っている。地ビールのラベルのデザインとして採用された。ただ、できあがったものは作品なので作品として販売もした。

5. ケアとデザインとの分業はおこなっているか？

現実的に職員は増やせない。利用者10人に職員1人が福岡市の配置人数。涉外・デザイン担当があれば職員の負担は少なくなり、フットワークが軽くなると感じるが、現在は出来ていない。すべての

職員がケアとデザイン両方に回る。企業との打ち合わせをするが、スピードが速さを痛感。スピードは現在の課題。

6. デザイン事務所を施設とは別に設けるのはどうか

施設によって種別がちがうのが難しい。A型だと工賃を起こす必要がある。質がひきあがらないと工賃が上がらない。現実的に難しいと感じる。デザイナーを外注した場合はメンバーの工賃からはらう。原画のままの大きさをやりたいが、寸法が違うので比率に合わせたり、ロゴをいれる必要もある。絵がじゃませず、文字もしずまないように仕上げる必要がある。出来上がったときはデザイナーさんが企業と打ち合わせしてくれる。最近は今まで繋がった人の中でデザイナー・カメラマンがいるのでおてつだいでいてくれる。メンバーとも繋がっている人達で彼らのちからは大きい。

7. 地域・福祉・アートの3つを大切にしているとのこと。地域では主にどんなことを？

地域は仕事で繋がっている部分もたくさんある。アンサンブルは小学校でコンサートをすることもあり、施設内でするイベントではコンサート・ギャラリーもする。来場者も多い。壁画では自治会長さんともつながった。壁画を通していろんな人があつまる。地域との関わり増え、自治会によんでくれる。炊き出し等も当日には行われた。地域のイベント会社との関わりもある。どっちも大切。

基本的にどんなことにも不可能はないと考えている。説明をすることを大切にしている。他の人に伝える事で、その人が福祉の現状を伝えてくれる。やはり地域が大切で、お仕事も福岡から始まっている。障害のことや福祉の現状を知ってもらいたい。その伝える手段としてたくさんの人があつまるカフェで展覧会始めた。ギャラリーで展覧会をするとアートの好きな人だけが集まり、伝える人が限定する。ブラボオには出合って、動いて描いてという流れがあった。福岡にはカフェ文化があり、いろんな種類のカフェがある。仕事としておこなうことでつながり、続く。職員がどう周りに伝え方でそのこと自体が利用者への生活支援と変わる。

雑貨屋さんと協同で商品を作った事もある。その中で大切にしたのは店舗に並んでも他の負けないものを作る事。いい物をつくること。商品としてなりたつことが絶対。市場調査もする必要がある。現状を探ることも職員の一つの仕事。現在の年間の売り上げは1400万円。4500部ずつのカレンダーもほぼ完カレンダー。それでも売ることの感触をつかむ事は難しい。ただ、何かしら話をもってきてもらえれば、仕事として成立すると考えている。基本的にすべて断らなかった。間に合わなかった場合には施設側の難しさを相手伝える。1日4時間の作業の中でどこまでできるかを理解してもらうことはとても大切。

そんな中で、クライアントが仕事を断ったときに逆に福祉や障害を伝えられるチャンスだと考えている。

社会とどうつなげるかが職員の仕事の意義だと感じる。前例がほぼない施設運営。難しい事はたくさん在る。ただ、大切なのは今いる8人の特色を見つけること。どこに重きをおくかを見極める事。仕事としてのアート活動なのかどうか、8人にとってどうすることがよいかを考える事が大切で、何ができるかを追求する。丁寧にできるのでメンバーを増やさないとよさがあると感じている。ただ、もしメンバーの中の誰かが絵を描きたくないといったら転職すればいいと思う。好きだからという理由で続けて

欲しい。お金だからという理由は寂しい。また利用者には仕事をしたいというあこがれがある。社会人をはかっこいいと感じてスーツを着てくる方もいる。他者からも見え方も大切。どう見られるか。アンサンブルのメンバーは衣装もある。ジャージをきている施設があるが、ここではジャージの出勤は禁止。あくまでも働く場としての意識を持ちたい。

8. 利用者さんの工賃は上がっているが職員は上がらないのではないかと？

正直、現実には厳しい。退職を考えたことがある。どこまで想いがつづくかと考えたこともある。それが切れたときに、人材がいなくなる。特に男性がいなくなる。福祉の高校、大学は定員割れ、男性がすくない。きついため保護者がいかせない。次の担い手がいないと引き継げない。問題だと感じている。福祉は楽しい世界だと知ってもらって、魅力ある人材を育てたい。現状維持をするしかない福祉の世界があって、世代が代われれば地域もはじめからやり直しという事態が50年間繰り返されている。

9. 作品を市場に出していくには人が必要だと思うが、限られた状況の中でどうすべきか？またどこがその問題に取り組み、解消すべきか？

仕事をして、稼いで、自立するという基本的な考え方がある。稼ぐためには入口を広げて行く必要があり、作品を出していく必要がある。売り方も大切だし、どういうことをしていきたいかを明確にする必要がある。ただ、売れる物を作るための支援が必要だと感じる。そこに国からの支援が必要だと思う。自助努力には限界がある。今後は施設同士も競争していくことになる。ただ、どう競争するかが大切だと思う。

利用者を一人増やしても職員一人分は出ない。人数入れてもかわらない。大きな箱をもっていないし、さまざまな面で限度がある。利用者を増やせば生産性があがらないし、結局、質がおちる。国から支援は必要になってくると思う。

10. 入りたがる人がおおいのではないかと？

多い。余暇活動で絵をやっているところは多い。年一度行われる展覧会では現在10箇所の施設が参加している。以前は4箇所だった。表現活動の広がりを感じている。ただ、全部が全部アートをするのは間違っている。どのスタンスでやるのかは大切で、障害者だからアートとみんながやるのはおかしい。

11. どんな企業とのかかわりがあるか？

福岡の企業がほとんど。北海道の行政とも関わりがある。お弁当箱の絵をデザインをした。お弁当箱がすべてメイドイン北海道で北海道行政が販売を応援。地場と他県とつながりが現在あることになる。福岡は繋がっている。街の大きさが丁度いいと思う。カフェもギャラリーもたくさんある。他県には仕事がないところがたくさんある。逆に東京だとひろすぎて、焦点がしぼれない。東京はまちまちで客層がかなり違う。地区によりちがいが多くある。今後東京へも進出したいが東京のどこでやるかの調査は必要だと思う。作品だけいくはだめ、メンバーも行きたい。自分達の作品がどう展示されているかを知るのも作家の責任。すべて、メンバーと職員の意見で調整していく。新しい仕事にはかならずみんな

なでミーティングをする。

12. 夢・理想は何か？

まだまだ スタート地点。福祉概念を知った上、どうするか、楽しみをどう生み出すかは大切。また時代とどう共生するか。基本的に夢は実現すると思っている。活動を全国に伝えていきたい。いろいろな人に伝えていきたい。4月またメンバーが提示してくるようになると思う。メンバーさんの思いに答えていくことが夢をかなえることになると思う。障害が障害でなくなる世界をつくること。手を差し伸べる人が増える社会であって欲しい。

⑥特定非営利活動法人 工房まる



現在

登録利用者 24 人 1 日平均 18 人ぐらい利用

1. 施設の設定と経緯

97年以前 スタッフの吉田さんが大学の卒業制作で障害のある人の写真を撮るために施設・学校に通う。彼らの社会との関係性や世界観の狭さに疑問を感じる。まるの前身施設におおぞらに通って卒業制作を作っていた。そんな中、おおぞらは認可が下りて法人の施設を経ち上げることになったが、無認可として施設を別に残して欲しいという意見があり吉田さんが施設運営をやることになった。一年目は利用者 1 名と吉田さん一人。

97年 工房まる開始。養護学校から 8 名の利用者がはいる。まるは彼らの世界を広げたいという想いのもと、始まった。その当時、福祉施設の仕事のほとんどが下請けや清掃といったものだった。工房まるを魅力的な場にして障害のある人の仕事の選択肢を拡げたいと感じた。翌年から樋口さんも共感して一緒に施設運営をおこなう。始めの仕事は時計作りと木工を主体に行う。利用者は、8 人で役割と工程をもち横のつながりをつくった。マグネットの値段は 600 円～700 円だった。高いと言って福祉

バザーでは買ってくれない。いい物はいいと自信をもって、福祉という枠に甘えないで普通の雑貨屋さんで売り始めて、一般の人が評価してくれた。買った人がまるに集まってきた。メンバーにあいたいという思いで来てくれ、メンバーもうれしい。3年ぐらい続けた。マグネット・時計の注文がはいるようになり、作業は忙しさを増す。メンバーにも給料がはらえるようになった頃、一人の利用者があきたといった。続けてきた作業だったが、実際はみんながやりたいことは違っていた。

99年 そこで、週一のアートデイをはじめ。絵、陶芸、散歩と思いついた事をする。のびのびと楽しく行く。もっとしたいと声がある。これを仕事にできればいいとその時感じた。とびかん、エイブルアートに参加。たんぼぼの家とも交流を持つ。その中で絵を描いた物をどうやって仕事にしようかと思った。自分にアート感がないが、彼らの作品が面白いと感じた。彼らの描きたい、見せたいという物語を大切にしたいと感じた。そこからマグネット制作から表現、クラフトからアートとシフトした。まずはイラスト・デザインとしては始めるTシャツ・ポストカード等のワンポイント、商品化を行う。

アートは自己表現をしていくためのきっかけだと感じる。社会との接点、やってきたことへの実感をしてほしい。彼らの人とのつながりが狭くなってしまっていることが障害だと感じている。彼らと第三者のつながりがうまくいかない。それをやっていきたい。それは彼らのためだけでなく、自分達のためにもなる。お互いの役割を大切にしている。それは人間として当たり前で、彼らを外に出して生きたいと感じていた

2007年 コミュニケーション創造事業をつくる。「人と社会」をテーマに行う。外部の人と交わって行っている。いい街にしたいと感じている人と繋がって、福祉がいろんな人に伝わる。障害のある人が街の中に当たり前にする感覚を育ていきたい。まるがやっていくことは外に伝える必要がある。近所との関わりも大切にしているが今後もより広めて生きたい。また2007年にNPO法人格取得。NPOの認知度が低い為、その認知度をあげたいと感じたのであえてNPOをえらんだ。他のNPOにも刺激を与えたいと考えていた。ただ、NPOを始めて、「行政の人もしらない」「社会的信用がない」という現実今感じている。社会福祉法人になるかもしれない。スタッフの働く環境を整えたいという思いもある。

2・障害者のアートの市場が何故出来ないか？ 打開する為は何をしているか？

アートと福祉の敷居の高さがある。豊かにどう生きるかを考える事が福祉だと思う。社会とどう関わるかを考える必要がある。まるがアートをやっている理由は、アートを楽しめるには心に余裕が必要と考えるからだと思う。感じる・感動するにはゆとりが必要。それが現代にはなさすぎる。コミュニケーションも希薄である。そんな中、アートは想像力を沸かせる。自分の中に余裕をつくらせる。アートは理屈なしで感動や楽しみをおこしてくれるものだと感じる。今の日本に遊んでいる余裕の感覚やもてなしがあってもっと欲しい。せわしさに追われている現状がある。ゆとりと余裕がない現代社会がある。ただ、アートといってもいろんな分野があるが、やはり障害のある人の絵が好き。彼らの作品には懐かしさ、ずっと入ってくるものがあり、足元から来るものがある。それぞれの作品に意味があり、のびのび書いて

いる。うらやましくもある。そういったことを感じさせてくれるものがある。その絵をみて感じたことはその人のフィールドの中で生かされるし、そういった影響を与え続けていきたい。ムーブメントを起こして生きたい。その中で柔軟性のある社会を作って生きたい。まるもそうでありたいし、アートは柔軟性がもともとあると感じる。

3. 作品を売るということについて

売る方法と場所の開拓が必要。ハード面の必要性は絶対だと言える。マーケットの確立も必要性。ただ、施設の中でそれを考える事が厳しい。施設をやっているとビジネスに対して甘えることがある。ビジネスは判断とスピードが速い。我々は待つことが仕事だった。その中でビジネスの先に出していくことは至難の技。ビジネスをする人たちと一緒に関わりながらやっていく必要がある。アプローチとアイデアが必要。そこにはブランディングも必要。著作権の管理をする必要もある。社会にどうアプローチをしたいのかを大切にし、何ができるのか楽しみにされるような団体を作る必要がある。

今後、エイブルアートカンパニーは原画を売ろうとしている。デザインが現在は重視のため、アートの要素が強い人は選考ではねられる。原画販売は来年から開始して、再来年度から本格化しようとしている。原画を売る事も必要かもしれない。

4. 商品と作品どちらが彼らの良さを伝えることができるか？

どちらも言えないと思う。我々はアートの日常化を目指す。アートで高い評価を目指すのではなく、彼らがいろんなことを表現でき、実感できることが大切。生きる＝アートということを示すことができる手段をみつきたい。アートをビジネス化することが目的ではない。例えば、作品をデザインとして 2 次使用し、社会貢献もしくはイメージアップとして企業が使うとさまざまな反応がある。彼らの作品は人を惹きつけ、いろんな人を巻き込むことができる。会社が元気なり、企業側がすべき事に気づく。いろんな人視点が変わり、奇跡をおこす。何かを伝えたいという原動力を起こす力がある。

自立支援法が始まってお金を稼がなくてはとしてではなく、社会を変える必要性、変えたいという思いがあった。そのためには常に何か利用する必要がある。アパレルとコラボするブランディングをした。企業を利用して、本質的な部分を中身から作っていく。企業やブランドと話をしても共鳴する事はたくさんある。それがビジネスになる。でも流行になってはいけない。それは結局すたれてしまう。草の根的なのびをすることが大切。目立つ事をするのではなく本質的にいい物をつくる。続けられることに意味があり、続ける事が大切。新しいことをしていく中で次の課題を見つける必要があり、外を見るのも大切。うけたい・売りたいわけではない。でも、伝えるために売れる・うけることをする必要があると考えている。

5. 企業の理解は？

稼ぐことも大切。実績を作る事も大切。想いを伝えることも大切。一度きりのお付き合いもある。ただ、その後、結果的に作品が繋がりをつくる事がたくさんある。だから、可能性を増やすことはしていきたい。理解してくれていない部分もあるが、自分達の中でソフト面しっかりつつある。だから、企業側の出方が間違っても本質的な部分では崩れない。自信をもってやっている。ビジネスと割り切って

やることもはじめてもいいと感じる。

仕事はその人の役割をみいだすこと・生き様をみいだすことだと感じる。仕事がなくなることで金銭的な損失よりも社会との関わりがなくなることが辛い。仕事は自分の存在を認識する手段であり、自分のやっていることを実感する場でもある。彼らの作品を通して障害者観・障害者の仕事観を変えて生きたいという想いは常にある。

6. まるは地元をベースにやっている理由は？

福岡の中でまずやりたいから。現在はいろんなところとさまざまな問題を共有できている。地元・地域のレベルでやっていきたい。それはどこでもまねできる。他の人がまねできるところからやりたい。まるだから出来るのではなく、他のでもできることをしたい。まるもいろんなところと繋がってやっている。それと同時に家族を連れていきたく感じている。そうでないと自分達のしたいことが伝わらない。特別なことをしているわけではない。障害者の生き方を変えるには周りが変わる必要がある。周りや地域に施設の事を知ってもらうことが大切で、そのことが福祉の底上げをする。働いているスタッフが特別なところで働いているという意識を持たないこと。そのことが極めて大切。初め5年間、利用者の親とも戦った。親はひっそりと生きる事をのぞむ。自分達は社会に迷惑をかけると感じている。だから外には連れ出して欲しくない。アートを何にするのか？という問いも親からあったが、5年待つと伝え、5年経ったら子ども達が友達を家に連れてくれるからと伝え、5年後、実際そうだった。その後、親はまるに対して何も言わなくなった。ただ、それは親を攻めてはいけぬ。そこまで追い詰められている事実がある。福祉は行政に頼りがちだが、行政に頼るのではなく、地域の人達に伝える事のできることは実はたくさんある。今後は教育の場でも伝えたい。教育の分野も変えていきたい。福祉は専門ではない。人が生きる事が福祉であるそう感じている。

7. 国からの支援はどの施設も変わらないのにまるのようにすべてを施設の中でやるのは難しいのではないかと感じる。どうゆう支援があればいいと思うか？

かなり努力しないと出来ない。何で出来るのかも自分達にはわからないが、やらないといけぬと感じてしまう。でも、スタッフには真似してほしくない。家族を大切にしたい。現在、利用者の工賃は1万5千円。少ないと感じる。施設の中から営業がない。いるかいないかは大分違う。展開がうまくいっていないと感じる。福祉サイドも変わる必要があるが行政も変わる必要がある。とにかくスタッフは社会と彼らのつなぎ役。その意識を持つか持たないかかなり違う。外に発することが大切。そのためにも意欲のある人を作っていきたいと感じる。施設のプロデューサー的な人が必要。そこは周りにも伝えている。スタッフ次第で施設と社会のつながりが変わる。施設の無駄の事を省いて営業マンを雇うという意識・努力も必要。そういう人が施設内にいないことは問題。やはり施設として何かを社会に残していくという意識で施設をやる必要がある。施設も自立する必要がある。行政から支援に甘んじた福祉施設にも問題はある。施設は外からのニーズ+利用者のニーズ+地域のニーズに応えるに答える必要がある。あくまで自分達がやりたいことをするために制度を利用するという姿勢が大切だと感じる。

⑦社会福祉法人豊生ラパルカ

1利用者数・職員数

利用者 37名 職員数 20名

2.施設の歴史

平成15年3月 障害者3名で開始

平成16年7月 NPO 法人取得 障害者15名へ

平成17年10月社会福祉法人取得 今でもNPOは存在する

平成18年2月 ラバルカ 開所

現在、知的授産所 就労移行支援 A・B 型を利用予定。

3・仕事の内容と様子

パン製造

下請け

PC 業務

4障害のある人の就労のイメージと目的、実態

一緒にやる企業の課題を解決するための事業を行いたい。障害者の労働力の新しい見方をつくり、民間と福祉の共同事業をおこしたい。新しい労働力が民間企業にとってコストダウンになり、会社が障害者に対してその対価をきちんと払うこと。ソーシャルオフィスといわれる事業を三井グループと共同で起こす予定である。障害者が働く場所は彼らの地元とし、働きやすい環境を整える。現実的に働くことが難しいと言われていた重度障害者が就労の可能にすることができる。就労は難しいという社会観を変えていきたい。ソーシャルオフィスはいつでもどこでも設置可能。ソーシャルオフィスには障害者、管理者がおり、彼らの給与は企業より支給され、社会保険もそこに加入する。会社からの直接雇用者となる。法定雇用を枠の利用した就労のあり方で、企業にとってのメリットも大きい。福祉側の役割を果たし、福祉の強みを生かすことも大切だと考えている。施設とソーシャルオフィスは常に連携することも大切。

また企業にとってストレスとなっている業務は沢山ある。たとえば、パチンコ会社のラミネート作業。単純作業だが、必要なもの。正職員・アルバイトがそこに時間をさくことはあまりに無駄が多く、作業も煩雑になりがち、そこを授産施設が請け負う。会社のストレスを軽減することで、社会に対する障害者への意識も変わる。働くことは人の役にたつ時間・瞬間を指すと考えている。すべての人が社会に参画し、余暇をもち、当たり前のライフサイクルを持つべきだと考える。

福祉は社会のクリエイター。安定して暮らせるのはよい社会であると考え。人として当たり前のライフスタイルをもつことがどんな仕事でも大切。

資料2:学校アンケート集計

「障害のある人のアート作品市場開拓のためのモデル事業」アンケート調査 —厚生労働省助成 平成20年度 障害者保健福祉推進事業—

1. アート活動について

①美術・音楽の授業の実態を教えてください。文化科学省のカリキュラム以外に学校が独自に行っているアート活動はありますか？

例:外部講師をまねいているなど

- ・小学部 リミック:外部講師を招いてリミックの学習を各学年年間6~10回行っている。(浜特)
- ・中学部 音楽:和太鼓演奏、外部講師を招いて授業を行う予定。(3回)(浜特)
- ・生活単元学習で絵手紙を描く活動を取り入れている。(浜北北部中)
- ・図工…絵手紙に外部講師を招いた →発達学級独自ではなく通常学級で一緒に参加
- ・音楽…合唱に外部講師を招いた 同上 (曳馬小)
- ・美術…行事に合わせて絵や工作等を実施
- 音楽…学年単位で実態に合ったものを実施(北星中)
- ・外部講師 浜松子ども館→粘土教室(年4回)
HONDA 環境ワゴン→木工(1回)自然の素材を使っておもちゃ作り(朝霧分教室)
- ・特になし 音楽は基本的に普通学級の児童と共に参加している。図工は発達学級のみで行っている。(菟丘小)
- ・今年度から県の子どものかがやき事業として、静大から美術の講師を招いて高等部の生徒がその授業をうける計画があり、今年は年1回。小学部では年6回人材活用の講師を外部から招いてリミックを行っている。(西部特)
- ・年1回外部から招いた方々の演奏を聴く音楽鑑賞会という行事がある。(赤佐小)
- ・2月に学習発表会という行事があり、その中で音楽(合唱、合奏など)を発表することが多い。(赤佐小)
- ・放課後のファンアーレバンド部の部活動がある。通常学級児童4年~6年、30名ほどで活動している。年に数回校外での発表の場がある。また校内の行事の折に発表している。指導者は校内の教員数名であたっている。(中ノ町小)
- ・音楽・図工を年間52時間(2週間で3時間)のみ(北小)

②美術・音楽などの表現活動が十分に行われていると感じていますか？

はい 5・ いいえ6

その理由・改善等を教えてください。

はいの方

十分とは言えないが、教育活動全体を通して創る活動内容、機会がある程度提供されていると思う。生徒は興味・関心があればいろいろ取り組めると思う。ただ、教える側はその道のプロではないので生徒の可能性を全面開花できずに終わっているかもしれない。専門的に行うほうがよい時と楽しみ重視

の方がよい時いろいろだと思う。(浜特)

生徒たちが生き生きと活動していて絵画などはのびのびした作品が多い。音楽は歌声コンクールやアルトリコーダー・ベル・トーンチャイム等通常と比べても劣らない力を発揮している。(北星中)

教育課程の中で美術・音楽は時間が限られているので各教科とも週1回程度である。しかし、音楽、美術的な制作活動は他の授業でも取り入れている。中学・高校生は限られた時間があるので、十分に自己表現する姿が見られている。(西部特)

特別支援学級では、個々の実態が様々で個別支援とはいいいながら、それぞれのニーズに合わせて授業をすることは難しい。さらに音楽は国・数などの教科に比べ定型発達児との関わりも時間としやすいため交流の授業とすることが多く、十分その子達が表現活動しているとはいえない。(赤佐小)

いいえの方

分教室という狭い空間(2階のみで本校より狭隘化が進んでいる)でなかなか思う存分とはいかない。時間も荘との関係で週当たりの授業数が少ないためなかなか取れない。(朝霧分教室)

発達支援学級では、時間割編成で週に図工1、音楽1設定しています。他の教科や活動、子どもたちの教科交流を考えて編成しているので、1時間ずつになる。(中ノ町小)

指導する時間が少ない(北小)

③学校での表現活動が就労に結びついた例があれば教え下さい。

ある・ない 11

ある場合はどこですか？

④学校では放課後になんらかのアート活動を部活動等の形でされていますか？

はい2 1高校 2中学部・いいえ6

その活動をどのくらい続けていますか？

中学部 アート部今年度より月一回実施。美術部月・木 15:10～16:05 年始めに募集案内して、途中入退部自由となっている。長い生徒は3年間続ける生徒もいる。部活になって2年目。それ以前は同好会として活動し合わせて6～7年になる。(浜特)

美術・茶華道部へ3分の1の生徒が入部し、3年間続けている。(北星中)

7年目(西部特)

4年生なので今はじめたばかり(金管部としては本校は何十年も前からある)(赤佐小)

どのような活動内容か教えて下さい。

画用紙を前に好きな画材(色鉛筆が多いです)で好きな題で描く。アニメを描く生徒もいるが生徒自身が楽しめるようだったらよしとしている個々に相談にのったりアドバイスしている。昨年度から南区役所で年に2～3回発表機会としている。もちろん校内でも作品を展示している。(浜特)

美術…絵画 茶華道部…お茶の作法・生け花など一週間交代で実施(北星中)

中学部・高等部の部活動・バンド部(西部特)

コンクールや演奏会、発表会に向けての曲作り(赤佐小)

活動に対して先生方の考え方・目的等を教えて下さい。

目的 興味関心のある美術的表現活動にじっくり取り組み、表現活動の素晴らしさを体験することが出来る。また、表現活動を通して、日常生活での美術工芸品や自然事象の美しさを感じる心を育て

るとともに、自己表現により自己自信を育てて生活意欲を高めることができる。(浜特)
通常の部活動に入っているものは自己選択のもので 3 年間みんな一緒にできればいいと思っている。
(北星中)

将来の生活に向けて、余暇の活動を広げる(西部特)
特別支援学級在籍の児童の参加に関していえば、友人作り、コミュニケーションスキルを高める場と
いうことである。(赤佐小)

生徒・保護者の方からのご感想・ご意見等わかる範囲で教えてください。

生徒は南区での作品展を楽しみにしていて、それを目標に創作に励んでいる生徒もいる。保護者は、
形の整った一般的に上手な絵が描けるといいなあという声を聞く。

アニメではなくもっと違うものが描けるといいのだが(浜特)
レッツに入ってよい作品が書けるようになって大変嬉しいとのこと(浜北北部中)
通常の生徒と一緒に活動ができてよいと思っている。(北星中)

継続しての活動を希望している(西部特)
教員に賛同して頂いている(赤佐小)

「いいえ」とお答え頂いた方へ

行われていない理由があれば教えてください。

各担任は、それぞれ通常の学級生徒を対象とした部活動指導があるため(浜北北部中)
特にそうゆう部活動の希望がないため(曳馬小)
放課後は荘で過ごしているため(朝霧分教室)
小学校で時期に合わせて水泳部、陸上部、金管バンド部が放課後行われている。発達学級の児童
も水泳部、陸上部に所属した児童がいる。(萩丘小)
本年度は現在、在籍が 4 年生までになっており、放課後はすぐに保護者お迎えで帰宅している。学
校の部活はファンファーレバンド部があるが、現在の発達支援学級児童 2 名はその活動は無理。(中
ノ町小)

校内での部活は運動部しかない。本学級所属の児童は水泳部、陸上部に参加した(北小)

⑥障害のある子どもたちの表現活動がさかんに行われるために必要だと思われる社会的整備は何だと思えますか？下記よりお選び下さい。

- 必要な順 1 A1 B6 D2 H1(本人の気持ち)
2 A5 B2 E1 F1 H1(周囲の理解)
3 A2 B2 D3 E2 G1

A 予算 B 人材 C ボランティア D 設備 E 上司の理解 F 親の理解
G 文科省の理解 H その他

⑦障害のある子どもたちの表現活動について何かご意見があれば、ご自由にお書き下さい。

発達学級だと通常学級の子に追いつけ追い越せと保護者が考えていらっしゃる方が多く、どうしても
教科の力を伸ばしたいという希望が多い。また子どもたちも通常学級の子の作品と自分の作品を比
べて劣っていることに気づいている子もいて表現活動全般において苦手意識を持っている子もいる。

家庭で音楽教室などへ通っている子もいるが、お金を出してまでと思っている保護者もいらっしゃると思う。(曳馬小)

体育で北星ソーラン、エーサーの踊りを取り入れているが、みんな頑張っていて形が出来ている。時間と手間をかけてやれば出来ることは多くなると思う(北星中)

本校の発達支援学級(知的)はまだ設立して2年半ほどで普通学級から入級した児童が多いのが実態である。そのため読み書き計算のような学習は個々に応じて行っているが、表現活動でも可能なものは普通学級の児童と共に行っている。(4年生も市の合唱コンクールに学年集団で参加)障害も個々の程度があるのでそれに応じた準備や環境が必要だと思う。(菟丘小)

将来の余暇活動に結びつくといいなあと思い、進めている。また定型発達の子と一緒に出来ることも多く、交流の場としてもっとうまく考えられるといいなあと思う。将来的なことを考えると土日長期休業などで親と一緒に楽しめる場も必要だと思う。(赤佐小)

以前にエイブルアートの講演を浜松で聴いた。障害のある方の作品を一人の作家の作品として世に出していくことは、大変素晴らしいと思った。小・中学校の教育の中では限られた時間や人員要求される課題の多さなどのため美術・音楽などの表現活動を充実させることは難しい現状である。小学校の教員の場合は専門性がない。東京では専科教員が配置されているようである。厚生労働省助成ということで予算がおりて、外部の方が年に1回でも指導して下さる機会があればありがたいことだと思う。(中ノ町小)

よい指導者がいて時間的に可能であれば取り入れたい。表現活動は障害のある子ども達の隠された才能を伸ばすことが出来ると思う。また情緒的にも落ち着くと思う。(北小)

アンケート用紙発送数

浜松市内発達支援学級 72校

浜松市内及び近郊発達支援学校 6校

計 78校

回答校 11校

資料3:市内・近郊特別支援学校、市内施設、保護者ヒアリング

1. 学校

1①浜松市立特別支援学校

1. 生徒数 小学部 110名 中学部 73名 高等部 175名

教員 小学部 48名 中学部 29名 高等部 48名

2. 授業

小学部

◆時間割内に単独にはない。生活単元学習内で行なう。

音楽 歌・手遊び・ダンス・リミック・鑑賞

図工 粘土・衣装作り・プレゼント作り・野菜スタンプ・折染め・書初め・行事の絵を描く・絵本作り・ランプシェード・年賀状作りを行なう。

中学部

◆生活単元学習・作業学習の時間に図工を行なう。

またそれとは別に教科としては美術・音楽は週2時間、1回ずつある。

音楽 歌・合唱・コンサートを開催・和太鼓・リズム音楽・鑑賞

グループ学習にわかれて行なう。

図工 木版画・スチロール版画・カラータック版画・紙粘土・掛け軸・コラージュ等を行なう・

高等部

◆音楽・美術からは遠のく。

1年生 美術か音楽を週2時間を本人または教員の選択で行なう

2～3年生 週2時間の枠があるが 英語・理科社会・情報 PC・美術・音楽の5つから選択する。

そのため、表現活動に全く関わらなくなる生徒も多い。

音楽 歌・リズム打ち・楽器・手話の歌・弦楽器・外国語の歌・鑑賞

外国語の歌を歌う授業はゴスペル部に発展。2～3年生で構成され、持ち歌は3・4曲。年一度校外で発表会を行なう。

図工 立体・絵画・デザイン・粘土・貼り絵・絵手紙・人物画・絵カルタ・コラージュ

配慮事項:いいところを見つけて伸ばしていく。楽しいと感じることをし、生活の中で楽しみ、生活に生きていくものを行なうようにする。

3. 外部講師

小学部:リミック、年内計画に入る 講師に謝礼を支払う

中学部:和太鼓 年3回

高等部:11・12月に美術専科の先生に来てもらい、先生への指導。県の事業

年に一度、地域の書家に来ていただき。指導。部活動内の活動。

4. 発表の場

外部の発表に力を入れており、学校祭では全員の作品を展示。学校で自主的に行なっているものは3回あり、南区役所、喫茶店ギャラリー響、浜松美術館にも年1～2回。合同連盟にも参加し、

外部からの要請で行うこともある。教員の中に作品展を担当するものをおり、広報は HP、新聞、親御さんへの声掛け、学年便りなどで行なう。生徒も出展を楽しみにしており、励みになっている。

5. 休日・放課後の過ごし方

習い事に通う子もいる。ピアノ、エレクーン、書道、公文、絵画教室

部活動

美術部 12名 在籍

内容:好きなものを描く。えんぴつ・色えんぴつが主。アニメ、花、図鑑を参考に。

自分で卒業後も続けていける内容をするように心がける。

備考:部活動を通して、絵を描くようになり、ほめられることが増えることが多くなった子が絵をかく喜びをしり、自信をつけ、生活・表情が変わった。

6. 今後について

画材がすくないので、充実をはかりたい。教員自身も作品作りをして技術をあげたい。生徒たちとより多くの作品をみにいきたい。本物を見せてあげたいと感じる。表現活動を通して、生活・物の見方が変わっていき、沢山の楽しみを見つけてほしい。本人のやりたいという気持ちを大切にしたい。

7. 表現活動を主体とした施設化について

夢があると思う。仕事としては捉えにくいと感じる。ただ、デザインとして上手く使うことは可能だと感じる。

1②浜松特別支援学校 朝霧分教室

1. 授業

学校での表現活動の授業としては図工・美術と音楽を行っている。図工・美術は週2時間、音楽は週1時間おこない、生活を中心に季節ごとの作品作りを行い、小学部は遊びが中心となり、中学部は作業的な内容で決まったものを作成することが多い。学習指導要領のしぼりはほとんどなく、自由に授業ができる。授業を行なう上で問題となるのが場所。校舎・運動場ともに十分な広さが整っておらず、活動内容が限られ、資金的なものも含め、素材も少ないことが現状。

2. 外部講師

◆子ども館

年6回子ども館の事業としておこなっている授業があり、内容は粘土あそび。大量の粘土を用意し、感触を楽しんだり、形をつくって遊ぶ子もいるが、ほとんどの子が感覚遊び的な活動となる。費用はすべて子ども館も持ち出しよって行なわれており、去年より始まった出張サービス。年6回のうち3回が小学部、もう3回は中学部が受講する。

◆わざチャレンジ

県の事業で職人さんや技能士さんが学校に出向いて指導してくれている。タイル職人さんや料理人の方が来られた。これは一般の学校でも申請することができる事業。費用は県が負担。

◆環境ワゴン

HONDAの事業を利用。10人ほどの指導者が来て工作教室を行なってくれる。費用はHONDAの負担。年に一度だが、4年間利用している。

◆個人

教師の知り合いがボランティアでバイオリンの指導を行なってくれた。一年間ではあったが、なんとか来校し、演奏と指導を行い、学んだ子ども達の自信につながった。発表の場としてコンサートも行った。

3. 卒業後

中学部を卒業後は自宅より浜松特別支援学校の高等部への進学か入所施設へ入り、職業訓練を行なう子どもが多い。進路は児童相談所と保護者、本人が相談の上決める。朝霧壮は、本来は知的障害児入所施設ではあるが、現状として知的レベルが高い子どもも多く、発達障害児とよばれる子ども達の在籍率も高い。児童養護施設的な役割していることは否めない。保護者の力(経済力)があまりないケースが多いため、生活の基盤＝入所という形を取らざるを得ない子どもたちが多い現状の中で、卒業後はなかなか地域に戻ることが難しい。児童相談所や地域支援センターとの連携が大切になっている。

1③曳馬小学校 特別支援学級 ヒアリング

1. 生徒数 一年生 1人 4年生 1名 5年生 3名 6年生 1名

教員 1名 ヘルパー1名→平日 AM 8:00～12:00のみ

2. 授業

音楽 週2時間

内容:リトミック、鍵盤、タンバリン、リコーダーを使用。保護者の意向もあり、全体として音楽や曲になるように指導する。リズム遊びも多い。手遊び歌も行なう。

配慮事項:基本的にみんなうたが好き。聞くことが特に好きな子が多く、気が向かないと歌わない。音楽は専科の教員が担当してくれおり、子ども達も楽しんでいる。

図工 週2時間連続授業

内容:行事の絵を描いたり、工作、立体物の作成、紙粘土作り等を行なう。先生が素材を探してきて行なう。キット製品を主に利用することが多い。

配慮事項:やりたいと思えるようにする。下手だと感じている子どもが多く、話すことは普通に出来ても手先は不器用といったアンバランスの子もいる。気分でやらない子もいる。基本的には本人の意思に任せている。一人、表現活動が得意な女の子がおり、授業の時間以外もやっていることが多い。写して描くことが得意だが、想像して行なったり、立体物を作ることは苦手。全体としてクラス内にやる気・技術面等のバラつきがあるため、授業としてクラス単位で行なっていくことが難しい。また、音

楽・図工に関しては本人・保護者の希望で出来る子は交流として普通学級で授業を受けることが多い。

3. 外部講師

音楽→普通学級に混じって一緒に外部講師の授業を受け入れる子もいる

図工→絵手紙の講座を行なってもらった。元教員で、現在公民館等で教えている。ボランティアで指導。

年間で計画を立てる中で調整は可能だが、基本的にボランティアにお願いする。予算の枠は特にない。

4. 放課後の過ごし方

基本的に家で過ごす。子どもの体力的なものを考えても放課後に習い事は厳しい。兄弟が多い子も多く、また自営業も家庭もある。中には小さい頃から大手の音楽教室に通っている子も多くはない。

5. 今後について

鑑賞会等を行ないたい。子ども達の実態にあったものを提供したい。演劇等もみせてあげ、本物に触れる機会をより多く作っていききたい思いはある。

6. 表現活動の仕事を主体とした施設について

むいている子はいるとは感じるが、保護者は否定的であると感じる。まだ小学生であるため、将来は企業就職を期待している。特別支援学校とはちがい、保護者は教科の力をつけることを求められる。期待は強く、子どもの障害を認められない保護者が多くいる現状がある。

1④中ノ町小学校 特別支援学級 ヒアリング

1. 生徒数 一年生 1名 2年生 2名 3年生 2名 4年生 2名 計7名

教員 1名 ヘルパー2名 4時間ずつ →主に交流学級への付き添いを行なう。

2. 授業

音楽 週一時間

内容:専科の先生が授業を行なう。各学年で必ず習う歌「うみ」「ふじさん」等は授業の中で指導する。歌うことが好きな子多い。リコーダー・打楽器を活用。フルートを吹ける教員に演奏してもらい、聴く時間もある。本物に触れてもらいたい。

配慮事項:揃えること。みんなに合わせて行なうことの大切さを伝える。

図工 週1時間

内容:担任が授業を行なう、1～2年生の教科書にある教材を利用する。絵画・工作・版画等その子に応じて対応。2～3時間で完成させる。絵本を作って国語の授

業とミックスしておこなったこともある。キット製品の活用、リサイクル工作、はさみ・ボンド等の道具の使い方の指導も行なう。教員独自のものもある。

配慮事項：個性を伸ばす場として捉えている。描き順、色の順等の技術的な指導も行なう。繰り返しやることでできるようになり、本人の自信につながり、上手になる。失敗経験はあまりよくない。

生活単元学習→週7時間割り当てがある。テーマをつくりいろいろなこと出来る時間。作品作りをしたり、グループホームの交流事業にむけてのプレゼント作りや歌の練習もこの時間に行い、比較的自由に調整ができる。年始めに調整をすることで専科の先生が授業を担当してくれることもあり、今年は3人の先生に授業をお願いしている。

3. 外部講師

今年はない。去年は年二回ボランティアさんをお願いしておこなったが、表現活動に関わる内容ではない。調整する時間が難しく、予算もとれないため、基本はボランティアさんで行なう。

4. 発表の場

こども市展に年1回、出展。公民館祭りや天竜公民館自治会の展示会にも参加。学習発表会では劇・うた・合唱を披露。

5. 放課後の過ごし方

家で過ごす子もいるが学童保育に特別に通っている子もいる。絵画教室に月に2回ほどかよっている子もおり、夏休み等の休みには施設が企画する造形教室に参加する子どもいる。余暇も含め、いろいろな意味で整っていると感じる。

6. 今後について

人の役に立てる人に育って欲しい。地域の人とのふれあいを通して、子ども達の存在をアピールしていきたい。

7. 表現活動の仕事を主体とした施設について

特別支援学級の場合、保護者の期待が非常に高いケースが多い、まだ小学生であるし、今後にとっても期待している。福祉的就労を考える親は少ないと考えられる。

2. 近隣施設

2①特定非営利活動法人トータルケアセンター

1. 利用者・職員数

利用者 42名 職員 15名

2. 仕事の内容と様子

カレーショップ・喫茶が主たる事業。カレースパイスの製造・販売もおこなっている。

畑 1800坪を借りて農業にも力をいれる。週2回陶芸も行なう。利用者さんの一人が陶芸家。

グループホームも運営。

ほとんどの作業所が NPO に移行している。社福に身売りすると理念がぼんやりしてしまう危険が

ある。

精神・知的・身体障害の方が在籍。西部養護学校とのつながりを強くもち、先生が教え子をランチにつれてきてくれる。身体障害者が増えてきた。食事介助のときなどは知的障害者ができることを手伝うこともある。

3. 障害のある人の就労のイメージと目的、実態

企業に就職することが就労という国の考えがある。しかし、働くことは労働で達成感や自尊心を得ることが大切。一般就労＝就労ではない。個性・特性を理解すること、また対価を払うシステム作りが大切。評価をしていく必要がある。その人がその人らしく輝いていることが大切。一般就労で壊れたり傷ついたりする人が多いので、必ずしも一般就労が正解とは言えない。一般就労でやっていることをやっていないのが福祉の現場。また、社会的企業の存在も大切。

また施設職員の中には「利用者に働かしてやっている」という考えがある人がいる。この考えが足をひっぱり、マイナスになっている。現実的に交通費・食事代をとると工賃はマイナスというところは多い。トータルケアセンターでは手当をつけて、マイナスしないようにする。お昼は支給しているが、送迎費は徴収している。

また入所に関しては、本人が希望している場合は基本的に断らず、受け止める。実習は積極的にうけ入れている。そのため、制度の枠を超えて、様々な人たちがいて、様々な過去を抱えた人が集まり、その中でいつも問題が起こる。ただ、宗教をベースにした考え方があるため、その考え方が今のトータルケアセンターを支えている。

4. 表現活動を仕事としていくことへの意見

見えない付加価値が芸術。商品売るためには流通を作る必要があり、商品を欲しい人の発掘とネットワーク化が必要。市場化し、ビジネスを行なう必要がある。芸術を評価することの難しさを感じる。陶芸といった製品をつくるのであれば分かりやすい。個展・イベントをすることも大切だと感じる。

5. 利用者・保護者の施設へのニーズは何か？

工賃をあげること。10～15年後を考えると居住空間を整えることも必要。グループホームを作り、個々の貯金もする必要がある。

6. 今後、利用者の仕事としてやってみたいことはあるか？あればその内容。

陶芸・農業の発展。今後は第一次産業が大切になると感じる。オーガニックで安全なものを作る。農作業に向いている利用者は多い。

7. 利用者の休日・余暇時間の過ごし方は？

お休みの予定は良く分からない。教会に来る人もいる。

2②社会福法人ひかりの園浜松協働学舎根洗寮

1. 利用者数・職員数

利用者 130名

入所 40名 定員(現在43名) 通所 19名 あおば 51名 工房めい 28名

工房だん 26名 ケアホーム 3箇所 20名

職員数 104 名

2・仕事の内容と様子

クッキー作り

パン作り

焼き物 陶芸 平成 5 年より ←みんなができることを考えて生まれた。

農産物・卵仕入れ販売←卵のパック詰めは利用者の好きな仕事。丁寧にやっている。

おせんべい作り

ハンガー作り（現在、やっていない） 20 年前

下請けの仕事はまったくない。

2. 障害のある人の就労のイメージと目的、実態

彼らがいることで支援するという仕事が生み出される。人をケアするときには人は自立する。相手に心を傾けることが人間らしい姿であり、支えあっている。それが福祉施設の役割だと感じる。また街に出ることも大切。障害のある人も手を動かし、働くことで役に立ち、認められ、尊厳、権利を手にすることが出来る。儲かる仕事・お金を生み出す仕事を考えることは職員の仕事になると思う。

3. 表現活動を仕事としていくことへの意見

アトリエが必要。常時活動できる場があるといい。利用者は感受性も豊かで色彩感覚もいいと思う。

ただ、現状として場所がなく、なかなか商品がお金にかわらない。市場がない現状がある。また自閉症の方は突然やめる。全くやらなくなった方いたが、理由は分からない。本人がやりたいことをやるのが大切であり、満足してもらうことで、作るものもかわってくる。

・額縁を作る作業がある。2500 点を県に納品。間伐等を利用したり。遠州縞を使用したりもしたい。おしゃれな額縁も必要。

4. 陶芸は表現活動の一つとして捉えているのかそれとも訓練なのか？

商売としてやっている。基本的には好きなものを作る。市場が評価してくれれば続ける。職員が手を加えないものが売れている。表現活動としてよりは作業として行なう。利用者の満足感も高い。

5. 今後、利用者の仕事としてやってみたいことは何か？あればその内容

食品の開発。安心・安全なものを作る。おせんべい、おからクッキー、ダイエット食、全県でレシピを共同開発。共同でやることのメリットは大きい。

6. 利用者の休日・余暇時間の過ごし方は？

買い物個別外出、旅行、カラオケ

スポーツ協会のイベントに参加

育成会のイベント

帰宅する等

3. 保護者

3①Aさん 高校3年生男子 母親

1. 表現活動を主体とする仕事があったら就労させるか

工房絵はうらやましい。利用者さんが楽しんでいる。現在の一定の枠を考えた時、企業に行くことは無理だと思う。工房絵の中で一生過ごすことが出来れば幸せだとは感じるが、福祉施設に入ると社会に出ることは難しいという現状も否めない。福祉施設の中で一生いることに違和感がある。少なくとも今ある既存の福祉施設は違う。ただ、工房絵ならいいかもしれない。

2. どうゆうものが仕事のイメージか？

支援があれば一般就労できる障害のある人は沢山いる。ただ、現状としてジョブコーチの認識も低い。所属学校によっては、一般就労は無理。しかし、一般就労が成功はいえない。ただ、福祉施設の中で能力を高めることなく、そこにただいるだけなはどうかとを感じる。今は福祉就労と一般就労の差が激しい。中間支援があればいいと思う。特例子会社はあるが枠がとても少ないし、会社はお金にあった働きをもとめる。それは、彼らにとってとても厳しい。そういった中で障害のある人は仕事が限られる。自閉の方なら支援と会社の理解があれば出来る仕事は沢山ある。また、周りの理解と同時に本人の働く意欲も大切である。小さい頃から教える必要がある。自分のことが出来るのと社会に出るときに出来ることは違う。正直、就職には運もあると思う。

息子さんに対して

・一般就労にとってもこだわっていた。発達段階ごとに出来るが増える中、たまたま浜名学園に見学にでかけた。そのとき、ここで彼を働かせたくないと感じた。ジョブコーチをしたいこともあり、支援をしていたら、働くことも可能な子どもいることが分かった。可能なら自分の子も感じた。伸びを期待していた。障害のある子を受け入れる場が少なく、隔離されることが嫌だった。社会の中で生きていけることが当たり前だと感じていた。ただ、今の段階で本人に働く意欲ない現実もある。

3. 障害のある人にとって理想の仕事・生活スタイルは？

週2回は仕事、1日余暇、1日休息 余暇が充実しないと生活が安定しない。安定しないと仕事が出来ない。本人が楽しく過ごしてくれることが大切。

4. なぜ表現活動は仕事としてのイメージをもてないのか・その理由は？

親は子どもを過大評価も過小評価もする存在。親としてそこまで自分のこどもに才能があるとは思えない。絵はのびのびと描いていてとてもよいと思うが仕事なるかは疑問がある。

5. 障害の程度

療育手帳 AとBの境

3②Bさん 高校2年生女子 母親

1. 表現活動を主体とする仕事があったら就労させるか

企業就職を考えていたが、不況もあり、企業よりも工房絵のような施設は魅力的だとは感じる。普通の作業所のように工賃1万円以下だと二の足を踏む。障害を出さずに売れるもの売ることが大切だと思う。

1. どうゆうものが仕事のイメージか？

本人には接客は難しいと思う。黙々と作業をこなすことは得意。部品の組み立てとか出来ると思う。アートを就職先の一つとして考えてはいる。

2. 障害のある人にとって理想の仕事・生活スタイルは？

本人が、苦がなく、楽しめるもの。通うのが楽しい、生きることが楽しい日々であってほしい。無理なく、余裕のあるのんびりした生活がいい。フルタイムは難しいと感じる。幸せに過ごして欲しい。

3. なぜ表現活動は仕事としてのイメージをもてないのか・その理由は？

イメージを持つことは出来るが、一般的には余暇活動に思える。本人に少し負荷がかかるのが仕事という認識が社会にある。

3③Cさん 中学1年生男子 母親

1. 表現活動を主体とする仕事があったら就労させるか

できれば、好きなことをしてほしい。あればぜひ入りたい。本人の気持ちはわからないけど、彼自身が何かに無理はしないとと思う。

2. どうゆうものが仕事のイメージか？

小学生から将来ことを考えたことはない。正直、まだ仕事のイメージはない。工房絵のような場所だったら、いいと思う。休息できる場があって、描きたいときにやりたいときやるといったスタイルで過ごせるところはとてもいいと思った。

3. 障害のある人にとって理想の仕事・生活スタイルは？

地域の人に見守られて過ごしたい。祖父母とともに過ごしたい。彼を知っている人がまわりこいて、集まってくる場が欲しい。

4なぜ表現活動は仕事としてのイメージをもてないのか・その理由は？

今は近くに場がないから。近くに場があれば考えやすい。

表現活動を仕事として捉えられる。障害者の施設だから、お仕事として捉えられる。

5障害の程度

自閉症

3④Dさん 高校2年生女子 母親

1表現活動を主体とする仕事があったら就労させるか

正直、わからない。一日落ち着いてすごしていられるか疑問である。彼女自身が絵を描くことがそこまで好きではないと思う。また、人の出入りが多い場では、事前に彼女に伝える等の彼女に対する職員の配慮がとても必要になる。事前に伝えてくれれば大丈夫だと思う。そういったことまで気を配ってくれるかが気にかかる。

2どうゆうものが仕事のイメージか？

今は学校がとにかく嫌いなので、安定して通ってくれることが大切だと感じる。そのためにはスタッフ・利用者さんとの関係が大切で、作業内容としては単純作業が本人は好きだと思う。そういった意味で、下請けの作業は向いていると思う。ただ、実習で陶芸をしたが、10日間の実習で8

個を制作した。分かりやすい作業で基本があり、単純作業に近く、とても集中して行なえた。いろいろと挑戦してみることも大切だと感じた。

3障害のある人にとって理想の仕事・生活スタイルは？

色々な人が通える場所。(ただ、そこで本人が安定できるかは別だと感じるが。)健全者と障害者が一緒にいる空間がいい。公共交通機関等を使い、一人で通い、外のつながり、地域とのつながり、社会とのつながりを持ってほしい。福祉施設では車の送迎がほとんど。今まで苦労してバス通学をしてきて培ってきたものを大切にしたいという思いはある。

また人間らしい生活を送ってほしい。今まで本人の意思を尊重してきた。本人の意思はきちんとあり、訴えもできる。環境によってそれが抑圧されてしまったり、上手く伝えられなくなるのは残念だと感じる。

4なぜ表現活動は仕事としてのイメージをもてないのか・その理由は？

仕事というより居場所といったイメージが強い。余暇的なものだと感じる。彼女の絵の質もまだまだで、それを仕事にすることが出来るのかが分からない。

5その他

本人の思いが大切だと思う。きっかけを与えてあげたい。

お金と物の結びつきが出来れば、働く意欲もわくかもしれない。お買い物が好きなので、働けばお給料をもらえて、それで好きなものを買えるといったことが理解できるようになれば、働くことに対する意欲もわくと思う。お金で結びつけることがいいことかどうかは変わらないが、手段の一つにはなると感じる。

3⑤Eさん 中学3年生男子 母親

1表現活動を主体とする仕事があったら就労させるか

わからない。それで生計が立てることが出来れば考える。絵を描くことは嫌いじゃないのでやらせたいという思いはある。ただ、それと同時にそれでいいのかという思いはある。工房絵をみていると彼と障害の程度が違う。彼のレベルの子どもが集まればやらせたい。そういった中で、どこにも行き場がない現状がある。企業は難しいが、福祉にはもったいないと思う。中間支援が欲しい。グレーゾーンの人の対象のアートの仕事があればよいと思う。中核センターのようなものが欲しい。就職・住居・市役所関係との架け橋になり、個性を知ってもらい、心のケア等、包括的な支援をしてくれる場が欲しい。

2どうゆうものが仕事のイメージか？

具体的なものはまだない。こつこつやる反復作業は得意。それがその子にとっていいと感じることならなんでもよい。また、本人の可能性が親にも分からない。

3障害のある人にとって理想の仕事・生活スタイルは？

親と離れた生活を送ることが大切だと思う。他人が入っても生活が出来、自活できることが必要だと思う。お金の管理、生活管理ができればよりよい。

4なぜ表現活動は仕事としてのイメージをもてないのか・その理由は？

難しくない。グレーゾーンの子が活躍できる場あるならばそこで働いて欲しい。

5障害の程度

B 一般就労もできる。

3⑥Fさん 高校3年生 母親

1 表現活動を主体とする仕事があったら就労させるか

お金の余裕があればいいが、それで生活ができるとは思えない。本人しては楽しいことかもしれないが、いざというときに自立していく、生きる力を少しでもつけて欲しい。厳しい社会の風を受けることは必要。現実とのバランスを考えても自立に近い道を目指したい。

2 どうゆうものが仕事のイメージか？

何をできるかやってみないとわからない。ただ、やっていることがむなしいことは嫌だと思う。福祉施設では何のためにやっているのかよく分からない作業を利用者にやらせることがある。そういったことは彼女にはして欲しくない。収入になり、人の役にたち、本人に合っていることをして欲しい。

3 障害のある人にとって理想の仕事・生活スタイルは？

障害を持っていてもごく自然に働くこと。隔離されたり、障害者だけですごすのはいいことだとは思えない。多くの人と自然につながって欲しい。自然な接触が大切で、普通に生きて欲しい。

4 なぜ表現活動は仕事としてのイメージをもてないのか・その理由は？

難しい。アートは好みがある。コストもかかる。仕事としてお金に換えていくことが難しい分野だと感じる。

3⑦Gさん 成人女性 母親

1 現在の仕事の状況

通所授産所えくらんに通所。

えくらん → 生活介護 20名 B型 10名

立ち上げ時は10名で開始。23年にグループホームを立ち上げ予定。4月より就労継続B型で20名、生活介護で30名を受け入れ予定。

◆えくらんを選らんだ理由

お世話になるならえくらんを考えていた。実習は一般就労に挑戦。浜松惣菜で洗上げの仕事をしたが難しかった。特に対人関係が難しく、断念。人が好きなので、職場の人とのお話に意識が向いてしまい、どうしても仕事への集中力が下がる。また本人が仕事内容を理解しているのか、していないのかが周りが分かりづらかった。経験としてはよいものになったと感じている。働く先に支援してくれる人がいるのといないとでは違う。ベースがある天竜厚生会にも行って見たが、仕事内容が高度で難しい。現在は生活介護のほうでお願いしている。しかし、将来的には一般就労できたらいいと思う。少しずつステップアップし、就労継続へつなげていきたい。

2 どうゆうものが仕事のイメージか？

授産品、生産性のあるものを仕事として捉える。えくらんは、いろんな取り組みをしてくれて、作業に集中するように配慮してくれている。一人ひとりに合った支援を行ってくれ、見てくれているという安心感がある。その方の本質を見ようとしてくれる。

3障害のある人にとって理想の仕事は？

与えられた仕事は短時間、集中して行なえる。新しいことに挑戦をさせる必要もあるが、その後のフォローも必要だと思う。いまは特定のものは考えにくい。一つ一つ挑戦していく中で出来ることを見つけて欲しい。今はタオルたたみが好き。習得していく意欲もあるが、環境によっては出来ないこともある。

4なぜ表現活動は仕事としてのイメージをもてないのか・その理由は？

本人が仕事としての意識がもてないと感じる。遊びの場。表現活動は余暇活動だと感じる。生活を潤わせるためのものだと思う。仕事という概念は分かっているが、本人が表現活動を仕事と考えるかは分からない。またお金をもらえることも大切。本人に使わせる勉強もしている。お金の価値観を日々の生活の中で伝えることが必要だと思う。

3⑧Hさん成人女性 母親

1現在の仕事の状況

通所授産所えくらんに通所。

生活介護 家からも近く、歩きまたは自転車で通所。学校時代とくらべ運動量が低下しふとりやすいため、自転車を活用。月2回、土曜日働いている。

◆えくらんでの様子

こまごまとした仕事は出来ると感じる。農作業もいきいきと行っている。えくらんさんは本人の能力に合わせた仕事を行ってくれる。工賃は意欲・能力を点数化して行う。現在は月に4000円頂いている。夏・冬にはボーナスもある。あわせて3万円程度。もらった工賃は本人に使わせて何か買うようにしている。施設からもそのような声掛けがある。現在は安定して通っている。寄付金等の行為はなく年会費を年に5000円支払う。施設から要求されることは少ない。

2障害のある人にとって理想の仕事・生活スタイルは？

◆仕事

創造的な仕事は難しい。髄膜炎・発作のため右麻痺がある。アンバランスな部分がある。細かい作業も比較的苦手。単純作業はなれば、長時間でも可能で根気よくやることは得意。集中力はある。正直、今でも理想の仕事は分からない。何がすきなのか親でも分からない。出来る範囲を広げてあげたいと感じる。例えば、草取りは出来るが、任せることは難しい。雑草と農作物の違いを自分で判断することが難しい。

仕事の種類が多いわけではないので、農作業でもいいと思う。達成感・充足感を本人が持てるような仕事をして欲しい。現在は仕事を意識してえくらんに出かけている。本人が仕事を意識できるように仕事の工程が多いものを選んだ。一般就労が成功とは限らないし、一般就労はストレスも多いし、無理をさせると体調も悪くなる。出来る範囲でやらせたい。一般就労には限界があると感じる。

◆生活

見守っていることが必要。自分で判断できないことも多い。ただ、家にいるといつまでも自立でき

ないと感じる。週の半分ぐらいはグループホームで過ごす等して自立に向けた動きも必要かもしれない。アットホームな中で生活して欲しい。現在は出来るだけ外に出して親以外の人とのかわりを持たせる。

3なぜ表現活動は仕事としてのイメージをもてないのか・その理由は？

能力のある人はいいかもしれないと感じる。自分自身も出来ることがあれば違うかもしれないが、自分の得意分野ではないのでよくわからない。楽器・歌・太鼓は好き。合唱はいいかもしれない自分が何か出来るという立場になることは大切なことだと感じる。自分で感じること。色んなところに連れて行き、体験をして、色んなものを見せて感じさせて、一緒に楽しみたい。充足感を味わって欲しい。

4障害の程度

A 3区分

Ⅱ たけし文化センター

①「Rolling Collection Vol.1 レッツとカイの作品展」 「サテライト:たけし文化センター」報告書

「Rolling Collection vol.1 レッツとカイの作品展」

サテライト「たけし文化センター」

報告書

NPO法人クリエイティブサポートレッツ

I 概要

1 企画趣旨

障害のある人、浜松に多く住む南米系の外国人、高齢者、子どもたちなどを主に、そこに関わる人たちの表現活動を支え、そうした活動が人々の関係を繋ぎ、「創造都市浜松」の土壌を豊かにしていく、アートセンターの立ち上げを目的に昨年度より「浜松アートフォーラム」を展開している。

エイブルアート（障害のある人のアート）を本格的に紹介する展覧会と、サテライトとして障害のある子どもと、カフェやスタジオが共存し、「何かおもしろいこと」が生まれる場「たけし文化センター」を、中心市街地にある空き店舗に設け、市民一人一人の目的意識からつくりあげる公共文化施設（アートセンター）についての実験をおこなっていく。

2 今までの経緯

2008年3月には「地域にアートができること」をテーマに、世界的にも著名なアートプロデューサー、北川フラム氏をお招きしての講演会シンポジウム、展覧会、音楽会、カフェを、歴史的建造物でありながら取り壊しがささやかれていた、鴨江別館で開催した。これによって、鴨江別館の保存運動が進展し、この建物の見直しへとつながっていった。その成果として浜松市が保存を決め、文化施設として活用することを明言する運びとなった。

2007年から月1回、「地域にアートが出来ること」をテーマに、様々なゲストを招いて、「トーキングラウンジ」を開催している。

2008年7月から8月には、引き続き、鴨江別館と向かい側にある旧銀行協会にて、「浜松的アートセンター構想@鴨江別館・サマーアートセンター」を行い5つのイベントを行った。

2008年度に、「あなたがいて、私がいて、みんながいるプロジェクト」という、新しいアートプログラムを立ち上げた。これは障害のある人がいる家族にアーティストがレジデンスしながら作品を作る「家族アート」と、障害者施設にアーティストが通いながら作品を起草し、地域の人たちとともに作品を作っていく「みんなアート」2本の新しいプログラムをスタートさせた。来年度以降に作品を発表していきたいと考える。

3 事業の位置付け

i 展覧会

2008年11月22日から12月7日まで、障害のある人のアートを浜松に広く紹介する本格的な展覧会「Rolling Collection vol.1 レッツとカイの作品展」を静岡文化芸術大学西ギャラリーで開催する。

ii アートセンター実験

同時に期間中サテライト会場として、浜松市中心市街地、ゆりの木通りにある、戦後まもなく立てられた店舗（文泉堂跡）に、「たけし文化センター」を開館、カフェ、作品展示、商品販売と、様々なゲストを招いてのトーキングラウンジ、アーティストによるワークショップを行ないアートセンターとしての実験を行う。

iii 文化政策講演会

2008年11月24日には、芸術文化がコミュニティに果たす役割について議論する「文化政策とCCDセミナー」を、海外からの専門家、国内の専門家を招聘し、講演と議論を行なう。

II 事業の内容 I

① Rolling Collection vol.1 レッツとカイの作品展

■目的

障害のある人たちのアートを本格的に紹介すると同時に、それらの作品の商品的価値また商品化の展望について来場者からの声を中心に調査する。

また全国各地にある表現活動をおこなっている障害者施設のネットワーク強化も同時に図っていく。

■事業の経緯

9月	コンセプト決定
10月	準備開始
11月	出展者出品作品決定
11月22日	オープニングレセプション
12月7日	終了
12月8日	搬出

■事業内容

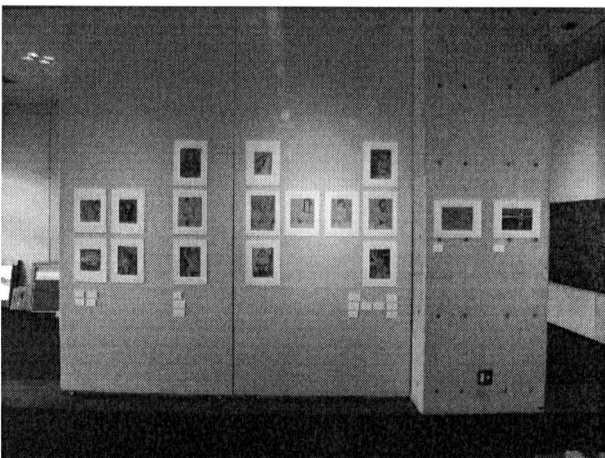
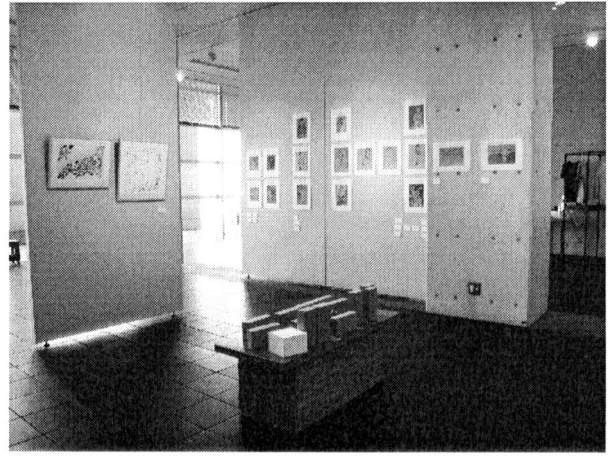
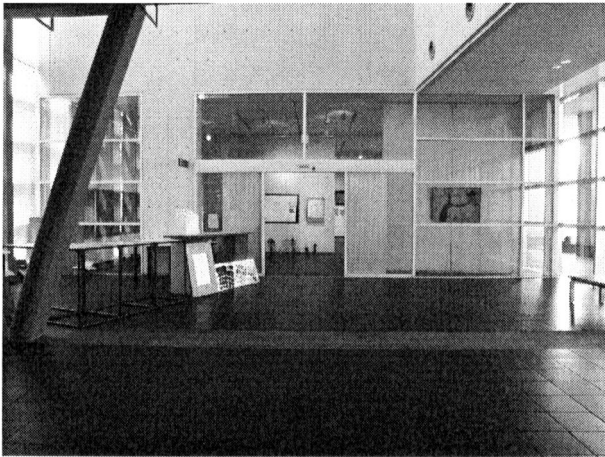
①展覧会

静岡文化芸術大学西ギャラリーにて、神奈川県平塚市の工房絵と静岡県浜松市のNPO法人クリエイティブサポートレッツで制作された作品の展覧会を実施。

- ・ 作品数 75点
- ・ 出展者一覧

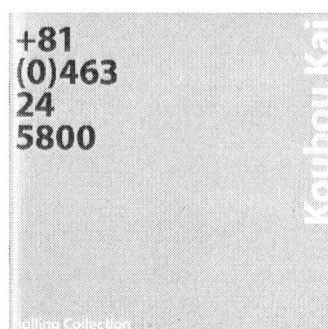
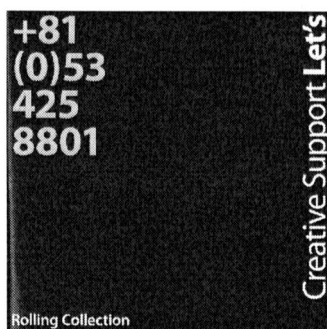
レッツ	カイ
竹内玲音	川村紀子
なるや	伊賀高史
池谷和樹	山本頼子
原田宗太郎	清水壮一郎
高橋舞	赤司寛和
日比みずき	池田 justine
太田礼香	今込いず美
太田啓一	寛純爾
山内真	水野貴男
山口紗葵	
涼太	
寺田寛之	

・会場風景



②カタログ作成

作品展のカタログをレッツとカイそれぞれの作品の絵本として製作。



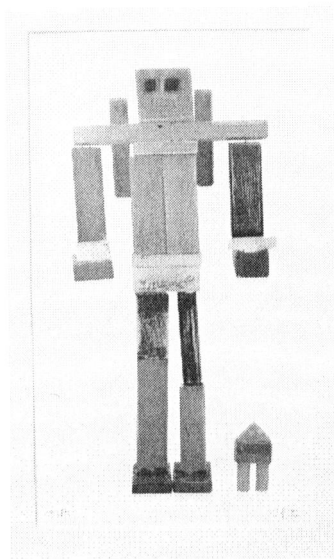
- A5版 28p 2冊セット
- 発行部数1000部
- サテライトにて販売
- 展覧会以降も販売を継続

③商品展開

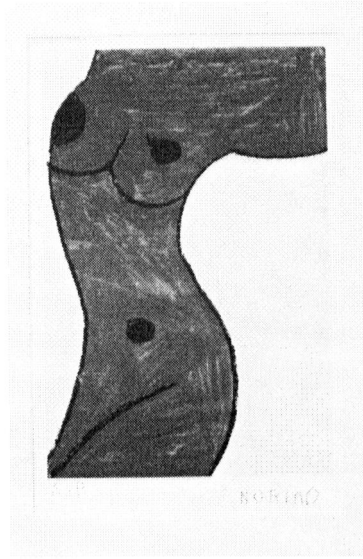
展覧会に合わせてオリジナルグッズを製作。展覧会会場に展示。商品を通して、障害のある人や子どもたちの存在を同時に知らせていく。商品の流通を通して工房絵及び、レッツのことを知ってもらう。作品とは違う「コミュニケーション」「伝え方」を模索してみる。

■製作した商品一覧

- 版画作品 2点

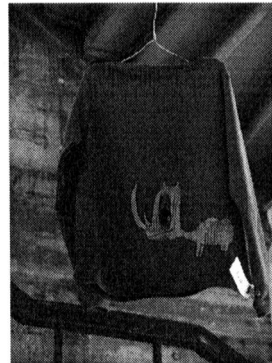


「親子ロボット」 涼太



「はだかんぼ」 川村紀子

- Tシャツ 8種 トレーナー 1種



④アンケートの実施

i 展覧会について

- アンケートの結果から、ほとんどの来場者の方に展示作品について関心を持ってもらえたことは大きな成果であった。障がいの人の表現が、質が高く、とてもおもしろいものであるということが万人に伝わるものだとすることを改めて感じさせてくれた。
- 作品に対する個別の感想からも、「素直さを感じさせてくれる」、「力強い」「安らげた」「みていて幸せな気持ちになる」等、人間の本質的な部分に強く訴える力があることがわかった。
- 運営に対する意見としては、目録やプロフィールを展示してほしい、もっと駅の近くなどわかりやすい場所でやってほしいなど、今後の展開に参考になる意見を頂いた。
- 展覧会全体の感想としては、障がいの有無に限らず表現することはすばらしい、とても自由な印象なのでもっと身近に感じてみたい、多種多様で面白いなど、表現の素晴らしさとともに、障が

いの人たちのもつ印象自体もよいものとして捉えてもらえたのは意義のあることだった。

ii 商品展開について

- 販売した商品についても、「オリジナリティがあり、おしゃれに仕上がっていてよい」「自由でかわいい」など好評を頂いた。
- どんな商品がほしいか、またどんな場所に置くとよいかというアイデアも多数頂いた。簡単に分類分けをすると、ステーショナリー系、食器、キッチン用品系、ファッション、アクセサリ系など日常的に使えるものが圧倒的に多く、他にも、小物や、モバイル、作品そのものなど、家に飾ることを考えたアート系、携帯の待受画面などコンテンツ系などがあり、企業とタイアップしたらどうかという案などもあった。
- 販売場所についてのアイデアも多数頂き、やはり、カフェや雑貨店など、雰囲気重視で、デザイン性を見てくれる場所という意見が多かった。他にも、書店、大学、ミュージアムショップ、ネット販売という意見も頂いた。

■事業の評価と課題

1. 障害のある人やハンディのある子どもたちの作品を多くの人に見ていただくことができた。
2. 会場を静岡文化芸術大学で行い、本格的な展覧会として行ったことで、障害のある人、ハンディのある子どもたちのマイナスなイメージを払拭することに貢献した。
3. 福祉的な見せ方ではなく、アート作品として、評価に値する展覧会が出来た。
4. こうした作品に触れたことのない静岡文化芸術大学の学生に多く見て頂けた。
5. 学生から多くの反響があった〔アンケート参照〕。
6. 初めて障害のある人の作品を見た人も多かった。
7. 障害のある人、ハンディのある子どもたちの作品の持つ力が多くの人に伝わった。
8. 絵本のようなカタログを製作したが、どんな人たちが描いたかを、展示の中の案内で伝えることも必要だった。

主催	NPO 法人クリエイティブサポートレッツ
共催	—
協賛	財団法人文化・芸術における福武地域振興財団、ファイザー株式会社、フィリップモリス株式会社、財団法人浜松市文化振興財団
後援	浜松市、中日新聞東海本社、静岡新聞・静岡放送
協力	社会福祉法人湘南福祉センター工房絵、静岡文化芸術大学
助成	厚生労働省 平成20年度障害者自立支援調査研究プロジェクト
その他	総括プロデューサー：久保田翠 アートディレクター：ホシノマサハル デザイナー：西村隆彦(チラシ・ポスター・カタログ)

② たけし文化センター

■目的

重度の障害のある子どもを基軸にしながら、さまざまな人々が交流する場「たけし文化センター」を、浜松市中心市街地にある、旧文泉堂書店(昭和39年築の建築:空き店舗)にて、展覧開開催中に行なう。中心市街地にある文泉堂跡に、サテライトを展覧会期間中に設けることで、展覧会会場とは違った作品の見せ方とともに、作品、商品の販売、カフェの運営、という形体でのサテライト会場設置を行う。市民一人一人の目的意識からつくりあげる公共文化施設(アートセンター)についての実験をおこなっていく。

展覧会の目的である、障害者アート商品の市場調査の一環として、販売を行いつつ、来場者、お客さんの反応を調査する。(場合によりアンケートをとる)

サテライトで「トーキングラウンジ」(さまざまなゲストを招いての座談会、ワークショップ)を企画し、広くは浜松のアートについて、文化についての談議が行われることを期待している。

■事業の経緯

9月	コンセプト決定
10月 初旬	旧文泉堂にて設営開始
11月22日	オープン
12月 7日	終了
12月 8日	搬出

■コンセプト

NPO法人クリエイティブサポートレッツは、障害のある人の表現活動の支援と、その活動を通じた社会との接点の形成方法を模索し続けてきた。その中で、いわゆる自閉症の人の絵画への理解は少しずつではあるが深まってきていることは感じられる。しかし、その一方で完成品では見えてこないプロセスの部分や、音楽などの造形以外の活動、日常の中での人とのやりとりのおもしろさといった点への理解は遅れているように思われる。言葉でのコミュニケーションを持たない人からの欲求の伝達、涙ながらの訴え、耳をつんざく奇声、毎日、繰り返し、繰り返し行われる遊び、言葉上のおかしさが際立ってしまう人との会話、どこを見ても大真面目で真摯な態度が浮き上がってくる。それらは、多くの場合は日常生活に支障をきたす問題行動と捉えられがちであるが、自分の想いに忠実なその姿は、作品を作り出す時のアーティストの姿としばしば重なる。人によりうまく伝達するためにメディアを選んだり、裏を読ませるための仕組みを考えたりといった戦略はあまり見られないが、感覚をまっすぐに押し出すという点は、アートの範疇であると考えられる。

そういった事への理解を広めようと活動を繰り返してきたが、理解を広めるには至っていない。理解不足から、社会の中では煙たがられることがしばしば起こる。その要因には、彼らと出会う機会のなさが第一に挙げられる。そういった場合は、十分に理解へのきっかけの役目を果たすと考えられるが、人のそのままを認めるといった行為は、健常者同士の間でも難しく、そこに端を発する事件はあとを絶たない。

そんな想いから、私達はアートの持つ「人をつなぐ力」に期待を持ち、人と人が様々な違いを認め合

い、つながるきっかけを作り出せる場としてのアートセンターの設立を目指している。そして、私達はその中に障害者施設をその核として組み込みたいと考えている。彼らの真摯な姿を日常生活の中で目にし、関わることは、時には人間形成に役立ち、時にはなごみの対象ともなりえる。

今回の展示のメイン会場（静岡文化芸術大学・西ギャラリー）では、完成度の高さをひとつの基準とした作品展示が行われる運びとなっていた。それを踏まえ、サテライト会場では、作品からは必ずしも伝わりきらない過程の部分、日常の中での出会い、そこでの関係性、障害のある人のありのままの姿といった点へ焦点をあてたいと考えた。

そして、普段の私達の活動の意図するところ、目標とするところ、また私達の目指すアートセンターの考えを、空間デザインによって表すために、それらコンセプトを伝えることに重点を置くこととした。場所の中で来場者が違和感を感じる事が、障害者への理解へと繋がるような仕組みとして、ひとりの障害のある人に合わせた空間を作ることを考えた。

久保田壮（たけし）は、現在13歳で、レッツの代表である久保田翠の長男であり、重度の知的障害を持ち、久保田がレッツを興すきっかけとなり、原動力となってきた。ここで大事なことは、久保田はレッツの代表であり、たけしの母親であり、たけしは特別支援学校でその障害の重さから問題児扱いされているということである。レッツは特定個人のための活動ではない、しかし久保田の障害のある子供の母親としての個人的な経験はレッツの活動を支える大きな力となっている。そして、久保田は、たけしを受け入れることが可能な場であれば、ほとんど全ての知的障害者を受け入れることが出来得るとの見解を持っている。レッツに深く関わっているアーティストや講師、臨床心理士、スタッフ、レッツ利用者の父兄などと話し合いを重ねた結果、額面上個人的な活動と誤解を受ける可能性はあるが、ひとりの利用者として「たけし」を受け入れていくことが、レッツがこれから今まで以上に「他者を認めあう」という理念を実現させていく上で大変重要であるとの答えを得た。

それは、レッツの目指すアートセンターの形にもリンクしていくため、それが本当の意味で公共的な場であって欲しいとの願いもあり、このサテライト会場を「たけし文化センター」と名付けた。そして、たけしが自由にいられる空間を、コンセプトに特化して形作ることにした。

一見たけしを甘やかしているかのようにも見える、「たけし」が自由にしてい空間をつくるという事は、「人を受け入れる」ことのわかりやすい表明であり、具現化でもある。そこでは、全ての設計が「たけし」を軸に考えられていて、商品や、来場者の使用するカップや、展示物などは「たけし」が触れられないように仕組みられている。その反面、「たけし」の触れられるものは、全て「たけし」が自由にできるようになっている。裏返すと、一般の来場者にとっては不便な箇所も多々あるであろうし、来場者は度外視されているような感覚になるかもしれない。しかし、そこに「たけし」という明確な説明があることで、来場者は「たけし」（＝障害のある人）を意識することができる。たけしは会期中、母親と会場に常駐する予定になっているが、もちろん不在の時間もある。そんな時でも来場者は、その特異な空間により「たけし」を経験することができるのである。そして、その場は多くの「たけし」や来場者を受け入れ、姿を変えていくものとなる。

■会場風景



■事業内容

浜松の中心市街地に仮設のアートセンターを期間限定で開館する。展覧会会場の補完的位置づけとしては、コミュニティスペース、ショップとして機能し、同時に様々なイベントを通して、文化芸術に対する意識の向上や、人々の交流を図る。

●カフェ



「たけし」とともにあるカフェを目指しカウンターが2mの高さにあったり、それに合わせた席を用意したりした。

●ショップ



場所の変化を想定して移動式のボックスを設置。他にも、カイのグッズやTシャツをディスプレイする。

●ギャラリー

壁を様々な展覧会のポスターでつくった、車輪付きホワイトキューブを設置。また文化センターのいたるところに作品を展示。



●スタジオ兼フリースペース

来館者が自由に制作したり、楽器を奏でたり、遊んだりできる場。



●イベント・ワークショップ

様々なトーク系のイベントや、たけし文化センターの枠組みを独自の視点で捉えることのできる若手アーティストを招いたワークショップを開催。

①「仮称たけぶんサークル」

13歳から24歳までだけが参加できるお話の場。文化、将来、進路、まちなど議題は集まった人たちが思い思いに真剣に話す。

第1回 11月21日（金）

参加人数：18名

第2回 12月7日（日）

参加人数：9名



②ワークショップ「できるかな」

自分が、その場でできることを考えておこない、参加者とともに募金箱を設置した。

11月23日（日）

高杉悦生（アーティスト）

参加人数9名



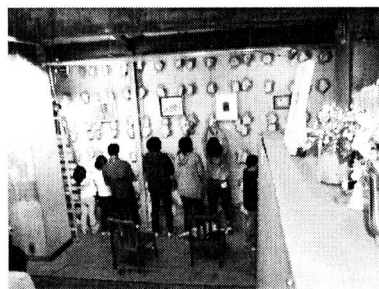
③ワークショップ「怒られることをして作品にする」

怒られるけど必要なことを集団行動をしながら作品にした。

11月30日（日）

深澤孝史（アーティスト）

参加人数8名



④ポエトリー・リーディング 「グロッタリー・ピリン系」
2階の闇の中ポエトリーリーディングを行った。

12月 6日 (土)

前原本光

マサ・ホシノ・ハル

参加人数 23名



⑤Talking Lounge (詳しくは別項参照)

●第12回 11月22日 (土)

「ローリングコレクション 5年構想」

●第13回 11月24日 (月・祝)

「文化政策とCCDセミナー・アフタートーク」

●第14回 12月6日 (土)

「即興からめーる団さん、お話ししようよ。～うたのすむ家と、みんなアートプロジェクト～」

⑥「うたのすむ家 in たけぶん」

音楽ユニット即興からめーる団が滞在して、そこにいる人たちと関わりながら「うた」と「音楽」をつくっていった。

●うたのすむ家スケジュール

2日 赤羽着 片岡家とセッション、作曲。

3日 正木到着 2人で作曲開始。

4日 久保田と議論白熱。

5日 翌日のコンサートに向けてどんどんうたづくり。

6日 ゆりの木通りで路上演奏

「うたのすむ家コンサート」

7日 たけしとまったりセッション



⑦「うたのすむ家コンサート」

滞在中に来場者と関わり、つくったうたを披露するコンサート。

メトロノーム自己紹介から始まり、フィナーレはお客さん全員で楽器を鳴らし、合唱した。

12月6日 (土)

即興からめーる団

参加人数：24名



■事業の評価と課題

1. たけし文化センターは多くの問題提起をこの地域に投げかけ、障害のある子どもの存在を中心にすすめることによって生まれる、クリエイティブな場を実現することができたことを実験できた。
2. 様々な人たちが集う場に、障害のある子どもたちの存在が、とてもいい形でなじむことが実験できた。
3. 障害のある人やマイノリティな人たちがをも包括した、文化センター(アートセンター)が、あり得ることが実験できた。
4. 多くの報道関係の取材を受け、こうした場の可能性と現状を広報することができた。
5. 冬場の季節であったが、親子連れ、高齢者、障害者、などさまざまな年齢層の人々が来館し、滞在時間も比較的長い人たちもおおかった。
6. (お茶を飲んだり、絵を描いたり、楽器をいじったり、遊んだり)
7. 特に小さな子どもをつれた親子連れの反響がよかった(面白い、楽しい)。
8. 多くのアーティストが立ち寄り、訪れた人たちとの交流が行なわれた(楽器を演奏したり、遊んだり、絵を描いたり)。
9. 近くの障害者施設、高齢者施設が、散歩の途中で立ち寄る場面もあった。
10. 2週間という限定の中での開催であったが十分な手ごたえを感じることもできた。
11. 今後こうした場を恒久的に設ける仕組みを開発していかなければいけない。
12. 特に人的な面で、多くの応援者が必要なことがわかった。

■アンケートのまとめ

●サテライト会場「たけし文化センター」は展示会場とは違い、街の中にあつたため、通りかかった来場者が多かった。そのため広く活動を知らせるきっかけにもなった。

●障害のある人の表現活動についての認知度はたけし文化センターでも低かったが、アンケートの中でたけし文化センターにおける空間やコンセプトの同意を多く得ることができた。こうした活動を続けいくことで障害のある人の表現活動の認知度があがっていくことを感じた。

●展示会では完成度の高い「作品」として表現を価値づけること、たけし文化センターでは、人々の「違い」が大前提としてあり、それをその場の関わりの中で考え始められるということを広く発信することができた。

●アンケートの具体的な反応をまとめると、「何も考えず、あまり気を使わない、癒される空間」「子ども達が自由に出来る」「いろんな楽器でコミュニケーションが取れる」「直感的な場所」等、自由な場であるという印象がもっとも強く、反面「最初に入ってよいのやらと戸惑った」「気楽に集まれないとどうにもならない」など躊躇する面があつたのも事実である。

■たけし文化センターの可能性

- 障害のある子どもを基軸に、多くの人々が訪れる場を作り出すことが可能であることが実験できた。
- こうした試みを、文化センター位置づけ、中心市街地で行なうことの意義があった。
- 「創造都市」を提唱する浜松市に、新しい創造都市のあり方を提案することができた。
- 創造都市に欠かせない「アートセンター」のあり方を同時に示す提案となった。

主催	NPO 法人クリエイティブサポートレッツ、浜松市
共催	—
協賛	財団法人文化・芸術における福武地域振興財団、ファイザー株式会社、フィリップモリス株式会社、財団法人浜松市文化振興財団、日管株式会社
後援	中日新聞東海本社、静岡新聞・静岡放送、
協力	静岡文化芸術大学、社会福祉法人湘南福祉センター工房絵、ゆりの木通り商店街、社団法人静岡県建築士会浜松支部、NPO 法人遠州精神保健福祉をすすめる市民の会(E-JAN)、NPO 法人ドリームフィールド、NPO 法人ねっとわあくアミダス
会場設営に協力いただいた方々	株式会社高忠商会、有限会社西谷商店、株式会社協同、日管株式会社
その他	総括プロデューサー:久保田翠 企画・設営・運営:鈴木一郎太(アーティスト)、深澤孝史(アーティスト)

③ Talking Lounge

■目的

「地域にアートができること」をテーマとし、2007年4月からさまざまなゲストを呼び、座談会を定期的で開催（初年度毎月1回。現在不定期）。

浜松地域の文化芸術環境を鑑み、アートが地域にできることを模索していくと同時に、新たなネットワークの構築と、既存ネットワークの強化を狙う。

今回はサテライトの実施において、障害のある人の作品を中心とした評価、たけし文化センターの意義、文化政策としてのこうした事業の可能性について話を行なった。

■今までの事業の経緯

- 0回 野村幸弘（岐阜大学教授・映像作家）
- 1回 播磨靖夫（エイブルアートジャパン理事・（財）たんぽぽの家理事長）
- 2回 片岡祐介（音楽家）
- 3回 大岡淳（演出家・SPAC・月見の里ディレクター）
- 4回 sebone（豊橋のアートイベント）
- 5回 松本茂章（高知女子大学教授）
- 6回 深谷孝、竹内誠人（掛川市横須賀地区ちっちゃな文化展 企画運営者）
- 7回 古田菜穂子（アートプロデューサー）
- 8回 平田隆（浜松市文化政策課（当時））
- 9回 関根幹司（工房絵代表）
- 10回 ホシノマサハル（アートディレクター）、笹田夕美子（臨床心理士）
- 11回 田野智子（NPO法人ハート・アート・おかやま代表）

■事業内容

第12回 「Rolling Collection 5年構想」
（障害のある人の展覧会の意味と商品市場の考察）

11月22日（土）

ホシノマサハル（アートディレクター）
西村隆彦（デザイナー）
関根幹司（工房会代表）
久保田翠（NPO法人クリエイティブサポートレッツ）



■内容のまとめ

「障害のある人の商品は、ただ単に対価を得るという手段ではなく、むしろ、彼らの存在を多くの人たちに伝えるためにあるのではないか」といったことについて議論を進めていった。福祉施設長である関根氏は「対価を得る、ビジネスにしていくということが、障害のある人たちの見え方を変えていくことにもつながる」。障害のある人の作品展を多く手がけているホシノマサハル氏は、「障害のある

人の作品や商品は、一般のそうしたものと意味が違う。むしろ“社会を変えていく”ことを目的としている」。

福岡にある工房まるのデザインを多く手がけ、今回、チラシ、カタログ、絵本などのデザインをおこなった西村雅彦氏（トーキングラウンジは欠席）「商品を通してその人たちの存在を知ってもらうことが重要。商品にはそうした力がある」。

最後に、「障害のある人の作品や商品を専門に扱う“社会的企業”が必要なのではないか」「そうした企業を施設とは別に持つことが必要」といったことを提言としてまとめた。

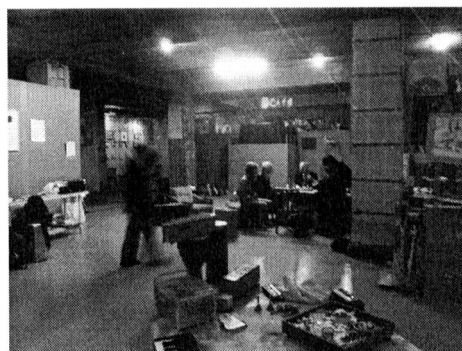
第13回「文化政策と CCD セミナーアフタートーク」

11月24日（月・祝）

加藤種男（アサヒビール芸術文化財団事務局長）

立木祥一郎（NPO法人 harappa 理事）

播磨靖夫（財団法人たんぼぼの家理事長）



■内容のまとめ

今回、財団法人たんぼぼの家主催の「文化政策と CCD セミナー浜松セッション」（文化庁助成）と同日に、パネリストを迎えて、たけし文化センターでトーキングラウンジを開催した。

ゲストの方々の意見としては、加藤さんは、文芸大のボランティアさんたちが会場の端で、木琴で自由に演奏していた様子にとっても好感を持っていた。播磨さんはもっと戦略をもってすすめないといけないとおはなし、どこに何を向けて何のために事業をおこなっていくのかを明確にしなければいけないとおっしゃり、立木さんは、大変好印象も持って観てくださり、たけし文化センターの理念や活動を評価されていた。

第14回「即興からめーる団さんお話ししようよ。 ～うたのすむ家と、みんなアートプロジェクト～」

12月6日（土）

赤羽美希（音楽家、即興からめーる団）

正木恵子（音楽家、即興からめーる団）

谷川眞美（静岡文化芸術大学准教授）



■内容のまとめ

アーティストの視点でたけし文化センターにおける表現について語り合うという貴重な場が実現した。たけし文化センターという、ただの箱としての文化施設ではなく、人ありきで、さらにやりたいという気持ちがそれぞれ本気だからこそそれぞれぶつかり合う。それは次なる文化を築くにはとても大切なことであろう。またたけし文化センターの理念と捉え方の違いから様々な行き違いが生まれたが、結果として「たけし文化センター」はたけしが基準であるという、結論にそれぞれがたどり着いた点が興味深かった。

④ 文化政策と CCD セミナー

■目的

一人ひとりが自分の文化を大切にし、同時にコミュニティのつながりのなかで生きていくことができる社会づくりが求められている現代で、アートを活かし、人と人をつなぎなおし、コミュニティを再生させる取り組みがはじまっている。

オーストラリアでは、コミュニティが抱える課題や社会的問題に対して、アートを通してアプローチし、創造的解決をめざす、CCD（コミュニティ・カルチュラル・ディベロップメント）が政策の中に位置づけられている。

オーストラリアと日本において、社会的に弱い立場にある人たち、多様なコミュニティに対してアートを通じた支援を行う実践者、研究者を招き、CCDの可能性について考え、また日本においても文化政策のなかで、こうした取り組みをどう位置づけていくことができるのか、人間が生きやすい未来、公共をつくっていくうえでアートは何ができるのかを考える場としてこのセミナーを開催する。重度の障害のある子どもを基軸にしながら、さまざまな人々が交流する場「たけし文化センター」を、浜松市中心市街地にある、旧文泉堂書店（昭和39年築の建築：空き店舗）にて、展覧会開催中に行なう。中心市街地にある文泉堂跡に、サテライトを展覧会期間中に設けることで、展覧会会場とは違った作品の見せ方とともに、作品、商品の販売、カフェの運営、という形体でのサテライト会場設置を行う。市民一人一人の目的意識からつくりあげる公共文化施設（アートセンター）についての実験をおこなっていく。

展覧会の目的である、障害者アート商品の市場調査の一環として、販売を行いつつ、来場者、お客さんの反応を調査する。（場合によりアンケートをとる）

サテライトで「トーキングラウンジ」（さまざまなゲストを招いての座談会、ワークショップ）を企画し、広くは浜松のアートについて、文化についての談議が行われることを期待している。

■事業の経緯

- ① 東京プレ企画 10月31日（金）
- ② 大阪セッション 11月15日（土）
- ③ 福岡セッション 11月16日（日）
- ④ 神奈川セッション 11月22日（土）
- ⑤ 埼玉セッション 11月23日（日）

■事業の内容

⑥浜松セッション

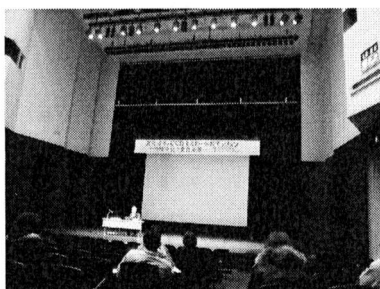
11月24日（月・祝）

13:30～17:30

場所 静岡文化芸術大学講堂

定員 200名

参加人数 40名



基調講演① Victoria Keighery (CEO of Community Cultural Development NSW)

基調講演② 加藤種男 ((財)アサヒビール芸術文化財団事務局長)

実践報告 立木祥一郎 (teco LLC 代表、NPO 法人 harappa 理事)
久保田翠 (NPO 法人クリエイティブサポートレッツ 代表)

■事業の評価と課題

1. 全国5都市で開催される講演会とシンポジウムを誘致した。
2. 文化政策について有識者から貴重な意見を伺えた。
3. 広報の不足があり、参加者が少なかった。
4. こうした事業の広報の難しさを感じた

主催	財団法人たんぽぽの家
共催	NPO 法人クリエイティブサポートレッツ 静岡文化芸術大学
後援	オーストラリア大使館、豪日交流基金 浜松市、財団法人浜松市文化振興財団、静岡新聞・静岡放送、中日新聞東海本社
協力	アーツミーツケア学会、エイブルアートジャパン
助成	文化庁

Ⅲ 事業の内容 2

■広報の状況

●ホームページ

●ブログ 1679アクセス（平成21年2月3日現在）

●チラシ 各10000部（作品展、サテライト）

配布先：NPO法人クリエイティブサポートレッツ会員（179名）

静岡文化芸術大学、特別支援学校（浜松市、近郊）、浜松市内特別支援学級、専門学校、市役所関係、県庁関係、浜松市文化財団、月見の里学遊館など

●メーリングリスト

●説明会 静岡文化芸術大学（有志）、浜松デザイン専門学校（カワムラ教室）

■集客数

Rolling Collection vol.1 レッツとカイの作品展

サテライト：たけし文化センター

日	来場者/人
11月22日	60
23日	52
24日	40
25日	29
27日	23
28日	20
29日	23
30日	41
12月1日	28
2日	30
4日	37
5日	51
6日	31
7日	37
合計	502

日	来場者/人
11月22日	79
23日	69
24日	87
25日	42
27日	56
28日	32
29日	85
30日	40
12月1日	49
2日	49
4日	53
5日	59
6日	95
7日	78
合計	873

■スタッフ、協力者、協力団体一覧

スタッフ

氏名	プロジェクトにおける役割と内容
久保田翠	総括プロデューサー
笹田夕美子	副プロデューサー
ホシノマサハル	展覧会ディレクター
鈴木一郎太	企画、運営、設営
深澤孝史	企画、運営、設営
赤堀奈奈世	事務局、総務主任
山口祐子	多文化関係の調整、アートセンター推進
岩瀬智久	アートセンター推進
片岡祐介	音楽制作
宇田季美子	プロジェクト推進スタッフ

協力者名または団体名
鈴木洸次郎(静岡文化芸術大学 教授)
谷川真美(静岡文化芸術大学 準教授)
増田幸雄(浜松市美術館 館長)
大場義貴(遠州精神保健福祉をすすめる市民の会)
大山浩司(NPO 法人ドリームフィールド代表理事)
村瀬正巳(浜松子ども館主任)
伊藤哲郎(建築士)
山内啓司(gallery CAVE 主催 アーティスト)
鈴木基生(ゆりの木商店街)
倉田布美江(建築士)
静岡文化芸術大学
ゆりの木通り商店街
社団法人静岡県建築士会浜松支部
NPO 法人遠州精神保健福祉をすすめる市民の会 (E - JAN)
NPO 法人ドリームフィールド、NPO
法人ねっとわあくアミダス
アーツミーツケア学会
エイブルアートジャパン
株式会社高忠商会
有限会社西谷商店
株式会社協同
日管株式会社

時評

上野 征洋 静岡文化芸術大学 副学長



早くも師走である。金融不安は産業界や市民生活に波及し、不透明な閉塞感が漂い始めた。「政局よりも政策、何よりもスピード」とした首相だが、その言葉の軽いこと。有効な経済対策は実行されず、政権の延命医療、福祉の懸案は何ひとつ解決されていない。不気味な殺傷事件が相次ぎ、

リストラや減給に遭って、年の瀬の前に立ちすくむ人も少なくない。なかでもプレカリアート(失業者を含む不安定労働者)と呼ばれる都市生活者には、ことさら北風が冷たい。ワーキングプア(働けど貧困)、ハウジングプア(住居の困窮)、そして派遣労働者やホームレスがその多くだが、静岡県では南米系の人々も少なくない。

北風の吹く師走に

いま、市民力の連携を

「ビッグイシュー」という名の雑誌をご存じだろうか。五年前に大阪で創刊され、今や全国の主要都市で購読されているホームレスの自立支援マガジンである。十七年ほど前、ロンドンで生まれた小冊子が原型で、世界二十八カ国に拡大した。その日本版の最新号では、茂木健一郎や坂本龍一が表紙に登場したり、特集の編集長を務めたりしている。アンジェリーナ・ジョリーやジョニー・デップも常連だ。社会福祉情報誌ではなく、エンターテインメントやエコ情報など楽しさ満載で三百円。そのうち百六十円が販売者(ベンダー)であるホームレスの収入になる。誌面には「酒や薬物を帯びたり、商品の無心をしない」などの行動規範も明示されている。北は札幌から南は鹿児島まで、全国の主要都市の街頭(雑誌には販売者の場所が記載されている)で月二回、販売されているが、残念ながら静岡県内ではまだである。

ホームレスの人々に仕事を創出し、購読者とのコミュニケーション、社会的課題(イシュー)への関心を高めるなど、多様な効果が生まれている。読者からは、「販売員に励まされた、人の温かさを知った」などの声がある。静岡文化芸術大学のギャラリーで人気を呼んでいる(いずれも十二月七日まで)。

あり、活字を読まない若者が雑誌の面白さに目覚めたという副次効果の例もある。私は東京へ出かける度に購入するが、販売者はいつも笑顔だ。記事内容はコンパクトで充実している。単なる寄付ではなく、自立支援に結実してゆく過程に参画する実感が読者拡大の一因かも知れない。

浜松ではNPO法人「クリエイティブサポートレッツ」による障害者(エイブル)アートの複合イベントが中心市街地の空き店舗で開催されている。「たけし文化センター」、略称「たけぶん」は創作とアートをテーマにした出会の空間である。カフェやワークショップもあり、展示されている作品や音楽が語りかけてくる。その連携企画で「レッツとカイの作品展」も、静岡文化芸術大学のギャラリーで人気を呼んでいる(いずれも十二月七日まで)。

執筆者略歴

◇うえの・ゆきひろ氏 早稲田大学卒、東大新聞研究所修了。専門は社会情報学。2000年静岡文化芸術大教授。04年より現職、文化芸術研究センター長を兼務。国交省、農水省、静岡県、浜松市などの審議会、研究会委員も務める。浜松市在住。

平成21年(2009年)4月4日 (土曜日)

浜松

知的障害児の表現活動を
支え、共生への理解を広げ
る浜松市のNPO法人「クリ
エイティブサポートレッ
ツ」は、人が時間を共有す
る場としてのカフェの機能
に注目している。

理事長を務める久保田翠
さん(四六)は、活動を進める
上で「カフェという空間は
大変有効」とみる。食べた
り飲んだりすることが嫌い
な人はまずいない。人と人
とが簡単につながる手段」

障害児のアート発信



交流カフェの中ではアートワークショップも行われた
—昨年11月、浜松市中区連尺町

昨年秋季には、重度障害の
ある、小さな芸術家”の名
前を冠した交流カフェ「た
けし文化センター」を浜松
市の中心街に期間限定で開
設。二週間で延べ千人が集
った。

現在も浜松市郊外の事務
所に喫茶スペース「アルス
ノヴァ」を開設しているが、
人が集まる街中の活動を
活発化させるため、中心街
への交流カフェ常設を準備
中。企業助成も決まり、秋
口にはオープンの方だ。

社説

文化振興で元気出そう

今のメセナ

「メセナは死んだ」
 「不況になるたびに
 そう言われた。それ
 でも暴風雨をくぐり
 抜けてきた。しかし
 今度の米国発の世界
 同時不況はどうだろ
 う。雇用事情が悪化している折、
 「文化予算」こそ削るべき、なの
 だろうか。

「グローバル経済の中で競争力
 を保つには、芸術教育への再投資
 が必要である」
 これは、オバマ米次期大統領の
 マニフェストの一文。こうした苦
 難の時期だからこそ、国も企業も
 芸術文化支援を惜しんではならな
 いのではないか。
 実際、日本でも、文化振興を起
 爆剤に地方の疲弊を吹き飛ばそう

という動きが活発化している。
 今、世界から熱い視線を浴びて
 いるのが「ベネッセアートサイト
 直島」(香川県)だ。瀬戸内海に
 浮かぶ離島・直島は「アートの島」
 に一変、外国人観光客が急増して
 いる。当初はキャンプ場だったが、
 ベネッセが島の文化とアートを融
 合させた。安藤忠雄氏設計の地中
 美術館、古い空き民家に現代ア
 ートを展示する「家プロジェクト」、
 さらに国内外のアーティストを招
 き、綿密なプランを立てて制作し
 た作品が瀬戸内の自然と見事に響
 き合う。
 静岡県内にも注目される動きが
 ある。「浜松的アートセンター構
 想@鴨江別館」(アサヒ・ア
 ・フェスティバル参加企画)。こ
 れは、浜松にわずかに残る昭和初
 期の建造物である市役所鴨江別館
 を舞台に、アーティストに限らず、
 障害のある人、外国人、高齢者、
 子どもなど垣根なく集い、ア
 ートの持つ面白さや力を認識しようと
 いうもの。NPO法人「クリエイ

ティブサポートレッツ」(浜松市)
 が主催した。今春行ったアートフ
 オーラムを皮切りに、今後も継続
 的に活動していく。同企画には地
 元の企業なども助成・協賛した。
 市も鴨江別館を文化施設として
 再整備する意向で、将来的には芸
 術に興味のある人たちが集う文化
 ゾーンにしようという考えもあり、
 その第一歩である。
 近年は、芸術分野だけでなく、
 福祉、環境、まちづくり、青少年
 教育など他分野との「複合型メセ
 ナ」が急増している。
 しずおか信用金庫(静岡市)な
 どによる「しずおか夢デザインコ
 ンテスト」は、まちづくり型だ。
 同市内の小学三・六年生から、あ
 ったらしいなどと思う家具、サンダ
 ル、駿河漆器など地場産品のアイ
 デアをデザイン画で募集。入賞作
 十点を選び、実際に職人に試作品
 を製作してもらう。商品化された
 ものも二点ある。
 閉塞感が覆う今こそ、メセナで
 元気を出したいものだ。

この人



障害のある子どもの表現活動
間限定の交流の場「たけし文
化センター」の中心として活
動を支援するNPO「クリエイ
ティブサポートレッツ」の
メンバー。アートを通した期
一歳。

「どんな点に気を付けまし
たか。」

「障害のある「たけし」が
いることを前提にした。仲間
うちだけで楽しむ場所にした
くなかったので、来場者が自

たけし文化センターで 活躍するアーティスト

すずき いちろう たさん (南立野区)
鈴木 一郎 太さん

由に楽しめるようカフェなど
にも力を入れた」

「活動を振り返っていかが
ですか。」

「好評だったが、もっと批
判を受けても良かったかも。

個人的には初めて場所作りや
他のアーティストとの共同制
作をした。普段会えない人と
も出会い、発見も多かった」

「今後の活動の展望はあり
ますか。」

「来年か再来年に個展を開
く予定。今までは油彩画中心
だったが、いろんな表現に挑
戦したい。今は第一印象で気
になる人の写真を撮りためて
作品にしようと考えている」

◇

高校卒業後、アーティスト
を目指し渡英。一昨年に帰
国した。

静岡新聞

浜松のNPOに 500万円を助成

フィリップ・モリス

フィリップ・モリス・ジャパンは十二日、浜松市の特定非営利活動法人(NPO法人)クリエイティブサポートレッツに二〇〇九年から三年で総額五百万円を助成すると発表した。レッツはアイイベントを通じて、障害のある人が年齢・国籍を問わず様々な人と交流できる場をつくり、社会的に自立できるように支

援している。

レッツは助成を受け今年九月に市内中心部に「たけし文化センター」を開設する。カフェを設けワークショップやライブなどのイベントを開く

予定。とりあえず一年間の期間限定だが、恒久的な施設にすることを目指す。開設場所は現在、交渉中という。

障害者 出会い空間 市民

浜松市の中心市街地に期間限定で開かれた障害者と市民をアットでつなぐ文化施設が、民間企業の支援を受けて九月に再開されることになった。関係者は「障害のある人から子ども、高齢者まで、さまざまな人が集える場所をもう一度提供できる」と喜んでい

る。同市中区連尺町の旧文泉堂書店ビルで昨年十一月下旬から十二月上旬まで開催した「たけし文化センター」で、重度の知的障害がある中学生久保田壮君(17)が「館長」を務め、障害者絵画の展示やコンサート、ワークショップに約千人が訪れた。

アートセンター再開へ



企画したNPO法人トレッツ(同市南区)クリエイティブサポーターが、たばこ会社フィリ

昨年開かれた「たけし文化センター」の会場。浜松市中区で(トレッツ提供)

民間企業が支援 9月から1年間運営

ツブモリスジャパンの市民活動特別助成プロジェクトの対象団体に選ばれ、センターが再開できる見通しが立ったという。

センターは九月から一年間の運営で、中区の中心市街地に開設する予定。障害者が働く喫茶のほか、音楽や絵画を楽しむアトスペース、作品展の会場提供などを想定しているという。

壮君の母親でトレッツ代表の久保田翠さん(46)は「たけし文化センター」には、障害者だけでなく、若いアーティストやさまざまな年齢層の人たちが訪れて多くの出会いが生まれた。そんな空間を恒久的に運営していきたいら」と話している。

(浅井俊典)



助成金の贈呈書を受け取る久保田理事長(左)

＝浜松市内

障害、国籍超え文化拠点

浜松 開設へNPOに助成金

障害のある子どもの表
現活動を支援する浜松市
のNPO「クリエイティ
ブサポートレッツ」が、
障害や国籍、年齢など
関係なく人々が集う文化
の拠点「アートセンター」
の開設に乗り出す。企画
は「フィリップモリスジ
ヤパン(本社・東京都)
の市民活動助成プロジェ
クトとして国内三百団体

から選ばれ、三年間で約
五百万円の助成を受ける
ことが決まった。
レッツの久保田翠理事
長(左)は「障害のある人
が地域に出て、市民と交
流する場をつくりたい」
と、二〇〇五年からフィ
リップ社の助成を受けて
ワークショップなどを開
始。昨年十一月末には同
市中区の商店街に「たけ

し文化センター」を二週
間限定でオープンさせ、
息子が重度の知的障害が
ある壮(たけし)君(三
ミ)をモデルに、誰でも居心
地のいい空間づくりを目
指した。
センターには親子連れ
ら約千人が来場し、これ
までの活動を評価した同
社による特別助成が決
定。今回は「たけし文化
センター」を再び市中心
部で一年間開館し、ギャ
ラリーやカフェなど交流
の場を設けたり、芸術活
動のワークショップなど
を行ったりする計画だ。
十二日はフィリップ社
の福原ひとみCSR担
当マネジャーらが浜松
市を訪れ、久保田理事長
に贈呈書を手渡した。セ
ンターは中心部に九月を
めどに開館する予定。久
保田理事長は「一年間だ
けでなく、恒久的に継続
するための仕組みを考
えたい。障害者の就労す
る場としても活用でき
れば」と意気込みを語っ
た。

作品を出したクリエイティブサポートレッツと工房絵のメンバーら＝浜松市中区の静岡文化芸術大

NPOと福祉施設がアート展



静岡文芸大
来7日まで

動物や人、文字をモチーフにした斬新なデザイン、絵画や造形作品など約八十点が並ぶ。開放感のある会場は、同市浜北区を拠点に活動するアーティストのホシノマサルさんが「閉じない」をテーマにレイアウトした。
久保田理事長は「障害者には何か生み出す原動力がある。作品を見て彼らを理解してもらい、社会に進出するきっかけにしたい」と話した。
ローリングコレクションは、五年間でレッツなど同様の活動をする団体を含みながら全国五カ所を回り、作品を通じて交流を図る展示会の

障害がある子どもにも表現活動の場などを提供するNPOクリエイティブサポートレッツ(久保田理事長、浜松市南区江之島町)は二十二日、福祉施設「工房絵(かい)」(神奈川県)と合同展「レッツとカイの作品展 ローリングコレクションNo.1」を浜松市中区の静岡文化芸術大で始めた。十二月七日まで。

開放感ある空間 斬新なデザイン

計画。六年後には米國で仕事の管理を授けたいの展示会を目指す。
工房絵は障害者がアート指す将来像に近い(久保田理事長)という。

2008年(平成20年)11月14日(金)

障害児らとともに

浜松の商店街でNPO
自由に過ごせる空間

22日から「文化センター」

障害のある子供たちが自由に過ごし、地域の人も集まれる場所を作ろうと、浜松市のNPO「クリエイティブサポートレッツ」(レッツ)が22日から来月7日まで、市中心部にある中区連尺町の商店街の一角を借りて、「文化センター」を開設する。



改装中の「たけし文化センター」で遊ぶ久保田翠さん(左)と壮さん—浜松市中区連尺町で

期間中、久保田さんと壮さんはセンターに常駐する予定。画材や楽器が自由に使え、誰でも工作や演奏ができるほか、週末にはワークショップや座談会が企画されている。問い合わせはレッツ(053・425・8801)へ。【平林由梨】

同じ期間に開設する。名称は「たけし文化センター」。レッツの久保田翠理事長(46)の長男、壮さん(12)にちなんで付けた。

無償で借り、改装した。センター作りにかかわ

重度の知的障害がある壮さんは、何でも手に取って触ったり、紙を破いたりしてしまい、周囲が困惑してしまふこともある。そんな壮さんが、自由に心地よく過ごせる空間を作ろうと、元書店の店舗跡約200平方メートル

るアーティストの鈴木一郎太さん(31)は「障害のある子供たちと社会の接点になるような場所にした」と話している。

2008年(平成20年)11月15日(土曜日)

障害者の日常基準に文化施設

社会と交流アートで

障害者と市民をアートでつなぐ期間限定の文化施設が二十二日、浜松市中区連尺町の旧文泉書店ビルにオープンする。「館長」は重度の知的障害がある中学生久保田壮君(こほら)。展示や憩いのスペースは、壮君の日常生活を基準に市内のアーティスト二人がデザインした。

(浅井俊典)

22日、中区でオープン

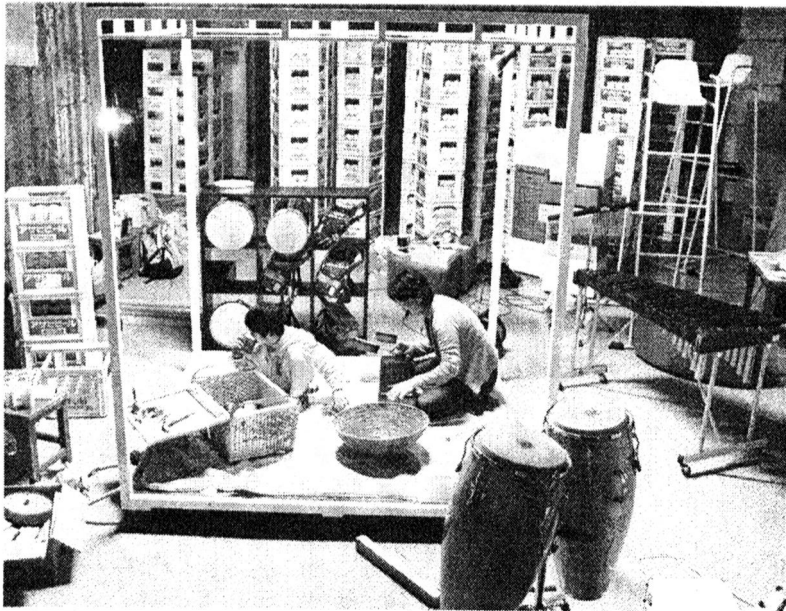
高さ二層の喫茶カウンターに、四方を枠で囲んだ展示ボックス、アコーディオンや木琴といったさまざまな楽器。閉店した書店の一階で準備が進む。

名称は「たけし文化センター」。空間デザイン担当の鈴木一郎太さん(さん)は「オープンまでに壮君の障害を全面的に肯定した空間を

喫茶や鑑賞スペース設置

「つくりたい」と語る。壮君は話すことができず、一人では食事も排せつもできない。カウンターが二層もあるのは、壮君がカップや砂糖を口に入れないようにするため。何種類もの楽器は、壮君に好きな音を出してもらおう

静岡文化芸大でも絵画を展示



よつにと考えた。壮君は、障害のある子どもたちが市民を芸術で結び付けようと活動するNPO法人、クリエティブサポートレッツ代表久保田翠さん(さん)の長男。「障害者らが社会に溶け込む

遊んで遊ぶ場で遊ぶ久保田さんと壮君＝浜松市中区で

きっかけに」と、レッツ所属のアーティストが壮君を中心にした計画を練った。

十二月七日までの期間中、静岡文化芸術大のとだけし文化センターの二会場で、神奈川県平塚市の障害者支援施設やレッツの絵画などを展示。センターでは連日、コンサートやワークショップを開くほか、喫茶や自由に絵画や音楽などを楽しめるスペースを設ける。

「障害者がいることで生まれる表現や芸術があると思う。今回の取り組みで新しい出会いや表現方法を見つけられたら」と久保田さん。

壮君は期間中、同センターに常駐するとい

障害のある人のアート作品市場開拓のためのモデル事業

2009年5月31日発行

編集・印刷・発行 NPO法人クリエイティブサポートレッツ
〒430-0844 静岡県浜松市南区江之島 600-1
アンサンブル江之島 1F
TEL FAX 053-425-8801
E-mail lets-arsnova@nifty.com
URL <http://homepage2.nifty.com/lets-arsnova/>